

---

# 神狩り

闇友菜

---

## 注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

### 【小説名】

神狩り

### 【コード】

N6782D

### 【作者名】

闇友菜

### 【あらすじ】

巫女としての修行を終え春京に戻ってきた姫、海鶴。巫女としての才能がないと言われた彼女は、巫女としての暮らしではなく日常とはかけ離れた暮らしを強く望んでいた。一方、薫は数年前の記憶がない少年だった。時々頭の中で聞こえる声。「生きていてはいけない……」。鏡池の祈りの日、姫は不思議な声を聞き、薫は老婆と出会う。その日から姫と薫の運命は大きく変わることになる。日本神話を基調にした異世界ファンタジー。5月に復活しました(笑)

## 序章 ある春の日(前書き)

神と人の物語。基本、日本の神話を元にしてはいますが、それとは、また少し違うお話です。日本神話好きな方、ごめんなさい。でも頑張るので、応援してください。

神狩り

## 序章 ある春の日

しゅんけい  
春京の春は美しい。

どこまでも蒼く蒼く澄んだ空の下、色とりどりの花が咲き乱れて、心地よい風が、山を越え、谷を超え、野原を吹き抜け、春の匂いを運び込む。陽射しは暖かく、子供たちの笑い声が外から聞こえてきて、春の訪れをしみりと感じる。

春京は、その名の通り、春は美しい里だ。

しかし、それに比例するかのようには、冬の寒さも厳しい。春京の冬は、まず木枯らしから始まる。それから、深々と雪が降り積もり、野山を覆い隠すのだった。雪は、里の音全てを飲み込んで、静寂の中に包み込む。家の窓からもれる明かりが暖かくて、旅人は何故か涙が流れるほど、心が温まる。春の訪れをひっそりと待つ間、人々は家屋の中でひっそり息を潜めて暮らす。

春が来て、暖かくなって、嬉しくなって……。

その心地よさが無性に懐かしくて、心の奥底が軋むように痛い。なぜだろう。時々感じる静寂は、春になるといつそう強まる気がする。自分の中で、誰かが帰りたいと呟いた。しかし、一体どこに帰るといふのだろう。どこに……。何もない。そこには、なんの景色もない。

薫かおるには、何も思い出せなかった。自分は、なぜ生きて、この里にいるのだろう。

神狩り

生きていてはいけないよ……。

頭が痛い。何度も何度もこの言葉が聞こえた。自分のうちから沸きあがってくる言葉。自分は世界から必要とされていないようで、苦しかった。今更、自分に何を求めるといふのだろうか。

薫は、生まれてから今までの記憶を全ておいてきた。記憶がないことは、薫を不安にさせる時期もあった。しかし、今は記憶がなくても自分がここにいるということを感じるだけで嬉しかった。

春京にたどり着いて八年。八年前の記憶はない。なぜこの里にたどり着いたのか、自分はどこから来たのか。わからない。そんな自分を受け入れてくれた、この里の人々。優しく自分を包み込む空気が好きだった。

多分、自分の年は十六、七歳だと思う。稀有な碧眼の双眸が、池に映る。池に映る自分の容姿は、まだ大人でもなく、子供のあどけなさがあるわけでもなかった。

この里では、十五歳になれば、一人前として認められる。土地ももらうことができる。多分、薫は十五歳を過ぎているようなので、去年、この里に来た日と同じ日に、土地をもらった。

自分の土地を持てるのが嬉しかった。土地に家を建てて、畑も作った。些細なことだけど、それだけで嬉しかった。

それまで、薫はこの里の長の家に預けられていた。長には、六人の子供がいて、全員もう自立して別々の生活を送っている。ただ、末の娘、海鶴<sup>みづる</sup>だけは、巫女修行のため、まだ親元に残っていた。

海鶴みづるとは、もう五年近く会っていない。あの頃は、まだすごくあどけなくて、幼い顔をしていた。丸くて、ふつくらとした顔。大きな瞳。ぷりっとした唇。血色の良い肌。健康的な、ぽっちやりした体。

海鶴と初めて会ったのは、春京の屋形の庭。桜の木の下だった。

鏡池と呼ばれる池の近くで。

薫が長に呼ばれて、そこで立ち尽くしていたら、歌が聞こえた。澄んだ高音の、透明感のある声だった。聞いたことのない言葉で、聞いたこともないような調べだった。

何か、祈りをささげているような、神聖な声のような気がした。

しばらく、その声に聞き入っていたら、落ちてきたのだ。……いや、あれは降ってきたというほうが正しいかもしれない。二人は暫し無言で見つめあった。そして、なんとも言いがたい、気まずい雰囲気 flowed。

そういえば、先に口を開いたのは彼女だった。  
「貴方、誰？」

薫を見上げた彼女の目は、澄んだ目をしていて。一点の濁りもなく、全てを信じている目だった。

「……わからない」  
薫はぽつんと答えた。本当にわからなかった。  
「馬鹿」

海鶴はそっくり捨てて、走っていった。

「なんなんだよ……」

薫の初めの印象としては、なんとも感じの悪い女の子だった。なぜ今馬鹿と言われたのか、全くわからない。初対面の子に。

それからは会うたび会うたび、何故か避けられて、目もあわせようとしなかった。あの澄んだ歌声を聞きたいと願っても、薫の前ではもう、歌を歌うこともなかった。

海鶴は仮にも姫だという立場であつたのだが、そんなものはかけらも感じさせなかった。おてんばで、明朗快活で、誰からも好かれるような、底抜けに前向きで、明るかった。周囲を巻き込むような力があるようだった。彼女の周りには、いつも人がいた。

なんて明るい子なんだろう。常に野山を駆け巡って、桜の木の下で、昼寝をする。健康的な肌。血色の良い、ふくよかな頬。五年前の彼女はまだ十歳だった。背もそんなに高くなく、小柄な身体をしていた。

薫も、気付いたら彼女に巻き込まれていた。

そう、いつというわけでもなく、薫は海鶴と仲良くなっていた。

薫はもともと、外を走り回るのが好きだったようで、身体を動かし、風を感じるのが好きだった。だからいつの間にか、どちらがいうわけでもなくて、一緒に山に行つては木の実や山菜、きのこを採つた。川に行つては水遊びをし、魚を手づかみで捕まえた。狐を追いかけて、野原を駆けた。疲れたら、一緒に昼寝をした。

五年前。海鶴は巫女修行のため、山にこもった。すこし寂しかったが、今日、彼女は五年の修行を終えて、里に降りてくる。待っていても落ち着かず、こうして外で風を感じていた。

宮の方から、真っ白な衣に、朱色の喪を履いた少女が、ゆっくりこっちに向かって歩いてくる。

春の光に透ける、腰まである豊かな漆黒の髪は、見るからに柔らかく、光を反射してつやつやと輝いている。身体はまだ少女の域を超えたばかりのようで、折れそうに細いが、女性らしいふくらみもあり、見るものが息を潜めるほど美しい線だ。

少女は、薫に気付くと頬を上気させて、髪を振り乱し走ってきた。「薫!!」

少女は嬉しそうに駆け寄って、抱きついてきた。薫は、少し顔を赤らめたためらいがちに受け止める。

「……えっ!?!」  
「大きくなったね!! 久しぶりだね!! 覚えてる!?! 忘れてない!?!」

少女が息を切らして、薫を見上げて笑う。優しい、茶色の瞳が薫の顔を覗き込む。

「……誰!?!」

「もっつ! 相変わらずね、とぼけないでよ!」

腰に両手を当てて、少女が頬をぶくつと膨らませる。

「お帰りぐらい、いったらどうなの!?!」

本気で怒っている少女に苦笑して、薫は彼女の肩に両手を置いて、じっと顔を見つめた。

「怒るな、海鶴。……おかえり」

照れたように笑う海鶴が、懐かしかった。嬉しそうに薫を抱きしめる。

「ちょ……やめろよっ!!」

赤くなりながら、海鶴に抗議した。海鶴は、少し悲しげな声で呟いた。

「どうして？ 昔はよくこうやって遊んだよ。薫は……嬉しくないの？」

「そんなことないけど……」

本当は海鶴が戻ってきて凄く嬉しかった。それと同時に、とても戸惑う自分がいた。なんだか照れくさくて、そんなこと言うことができなかったが。

いい年した男女が抱き合うなんて。しかも人目をはばからずに。

恥ずかしいとは思わないのだろうか。

そんな薫の心を読むかのように、海鶴が悪戯っぽく笑って薫を見上げた。

「素直じゃないわね。……それじゃあ、女の子にもてないわよ？」

「別にいいよ……」

薫はぶっきらぼうに答えた。その様子に海鶴が軽やかな声を立てて笑う。

## 神狩り

海鶴は、五年前よりも綺麗になった。長い漆黒の睫毛。形の良い肩。桜色に上気した頬。ふっくらとした桃色の唇。潤んだ黒い瞳。

肌は抜けるように白く、細い身体。

これが、かつて、自分と共に野原を駆け巡っていた、日に焼けた健康的な少女とは思えなかった。五年も経てば、ここまで変わるものなのか。

「いい時期に戻ってこれで、本当に良かったわ」

海鶴は、微笑みながら空を見上げた。

春京には年に一度、土地神のために祈りがささげられる。それは、里の大巫女が鏡池かがみのいけで祈りを捧げるのだ。

この里では、婚前の若者は、必ずこの祈りに参加する。池の前で巫女から信託を受け、自分の結ばれるべき相手をきくのだ。ようは、相手がなかなか見つからないから、天に命運を託すということだ。だが、かなりの確立で、この信託が当たってしまうため、祈りのための祭りに参加しようと詰め掛けるものが後を絶たない。鏡池には、そのものの運命が映るといわれている。本当かどうかかわらないが、面白さと興味で、その前に立とうとするものが沢山いる。

鏡池が映すものは、人の未来だけでなく、過去さえも映した。

池は、薫の過去は映さなかった。常に澄んだその水は、そこを覗くものの全てを、まるで鏡のように映し出す。しかし、薫が覗いた時、その澄んだ水は、瞬時に曇った。不思議なことに、いつも水面が波打って、何も見せてはくれないのだった。まるで、薫を拒絶するかのような小波だった。

「いけない、沙苗の小言を聞かないと……」

沙苗とは、海鶴の乳母だ。彼女が帰ってくる今日を沙苗も心待ちにしている一人であることを薫は知っていた。あれだけいつも姫さま、姫さまと嘆いている彼女だ。海鶴がどれほど変わったことかと

多分、期待して待っているだろう。

「ごめんね薫。そういうわけだから、また今度ね！」

海鶴が、小走りで去っていく。その小さくなっていく背中を見ながら、薫は、自分の心が温かくなったことに気付いた。

## 第1章 鏡池の祈り（1）

十五歳になった。やっと一人前として認められる年齢だ。これで家を出て、自由に暮らして。そんな生活が私の憧れだった。私の上には、もうひとり姫がいる。姉の双葉は、私とはちがって優秀だと、大巫女が何度も嘆いていた。

ああそうか、それならば、自分は遠慮することはない。

自分の好きなように生きて、巫女なんて辞めて。山に入って山師に弟子入りしようか。それとも、農家になろうか、私は色々考えていた。姫なんて、嫌いだ。しかもこんな山里の姫なんて。里の女性と変わらないのに、自分だけを特別に扱われるのは嫌だ。

沙苗にも教えてあげるんだ。もう、自分の世話などしなくてよいことを。

なのに、何でこうなるの。

「姫！！ いけませんよ、そんな汚い格好で！」

「うるさいわね！ いいじゃない！ こっちの方が動きやすいんだから！ 大体、姫って呼ばない約束でしょ！？」

「姫は姫です！！ 一応長殿の末っ子なんですよ！！ 辺境の地に住んでいるとはいえ、その自覚をもってください！！」

悲鳴に近い声で、沙苗が叫ぶ。私も負けていない。

神狩り

「こんなところに住んでいて、自覚も何もないわよ。家はぼろいし、雨漏りするし、風は吹き込んでくるし！」

「なんとということをし！ 長殿や、兄上様方が、海鶴様のためにご用意したお屋敷を！！」

屋敷だって。これのどこを見たらそういえるのだろうか。

少し傾いた戸口からは風が容赦なく吹き込んでくる。冬は悲惨だ。ただ気に入っていることがあるとしたら、それは自分の庭に作られた、小さな滝と、小さな滝つぼくらいだった。池に睡蓮を浮かべて、それが咲くのを眺めるのが好きだった。

「兄上も父上も、姉上にはもつと立派なお屋敷を与えているじゃない。私のことなんて、きつと山猿と同じくらいにしか思っていないわよ……」

「姫様！！」

沙苗が、私を睨みつける。

「あー、悪かったわ。私、巫女をやめるわ。沙苗も自由に生きて頂戴……」

「……姫！ 明後日は何の日かご存知でしょう！？」

首まで赤くなつた沙苗が声高々と叫ぶ。ひらひらと手を振りながら屋敷をあとにする。

「私には、関係ないわよ、あんなお祭り……」

どうせ、自分は落ちこぼれだ。確かに魅力的な儀式だ。認めたくないけど、薫となら一緒に 行きたいと思っている。

だがそれだけだ。

巫女の修行で山に籠る前は歌い手として何度も歌った。それが随分昔のことに思えてしまう。今でも私はあの頃と同じ純粋な気持で歌えるのだろうか。多分、無理だ。私の心は山の中で廃れてしまつたみたい。

「姫!? どちらに行かれるのですか!?!」  
「貴方の息子のところよ」

沙苗の大きな大きなため息と小言が聞こえた。私は聞こえないように両耳をふさいだ。もう小言は沢山だ。

「大人になつて帰ってきたと思つたら……。ちつとも変わつていない。もう今年で姫さまも成人だ。将来大丈夫なのだろうか。ばあやは海鶴様が心配です……」

幼馴染の浅羽<sup>あしは</sup>は、遊び相手で、相談相手で、兄弟同然の仲だった。五年ぶりに会うのだが、もう20歳になっているはずだ。元気だろうか。懐かしい。あの頃は、まだ成人したばかりで、家からも独立して。嬉々として働いていた気がする。そして、兄上たちに顎で使われて、嘆いていた。今も浅羽は変わらないだろうか。

久しぶりに戻ってきたら、何か変わるのではないかと期待していた。だが、結局皆変わっていない。そう、私も、薫も……。巫女になつたら世界が変わると思つていた。自分は全てを手に入れられると思つていた。

だが、修行を終えて思い知らされたのは。  
私は結局落ちこぼれ。姉上には到底叶わないということ。

「浅羽! 生きてる!?!」

裏庭には、睡蓮の浮かんだ池があり、今日も涼しげに葉を浮かべていた。浅羽は縁側に寝転がり、空を見上げていた。いきなり声をかけられ、ゆっくりと起き上がり、私の顔をじつと見る。まじまじ

自分の顔を見られると変に緊張する。久しぶりに会うからかもしれない。

「え……！？ ええ！？ 海鶴！？ しばらく見ないうちに、大きくなったなお前！」

浅羽は、笑顔で私を迎え入れてくれた。私もつられて頬が緩む。少し染めてはにかんだように笑うと、浅羽も何故か照れたように笑い返した。久しぶりに会うものだから、なんだかとても歯がゆい。「ちゃんと修行はしてたのか？ 大巫女の修行は厳しいって聞くけど、とてもお前にやり遂げられるとは思ってなかったよ。途中で泣いて逃げてくるかと思った」

「ひどいわね、この通り、ちゃんと生きてますけど？」  
私は肩をすくめた。

「確かに厳しかったわ……あれが巫女の修行っていうのかしら。滝に打たれたりとか、山に登ったり、薬草を積んだり、洗濯してご飯作って掃除して、狩をして。おかげで、弓の扱いも包丁裁きも上手くなったし、体力もついた気がするわね。巫女っていうよりも、あれじゃ里のお母さんね」

浅羽が肩を揺らして、笑いを堪えているのがわかる。

「双葉もそんな修行をさせられていたのかな……あんなすました顔してお母さんかよ」

「そうよ。でも、双葉姉さまはもう少し優秀でいらつしやったみたいだから。私みたいに、宮の雑巾がけをさぼって、夜中ずつと外に出されていたなんてことなかったんじゃないかしら……。それに、山の石榴を勝手に食べることもなかったでしょうし、海石榴（ほしじゆ）の花を手折ることもなかったんじゃない？」

呆れたように、浅羽が私を見つめる。

「海石榴を折ったのか？ 本当に、信じられないよなあ……海鶴は海石榴は、春京の神の象徴だろ……。そりゃあ、大巫女だって怒るな」

私は生真面目な顔で浅羽を見上げた。

「でもね、浅羽。海石榴が訴えてきたのよ。そろそろだ。時が満ちる。私を手に取りなさいってね……」

浅羽は苦笑した。

あまりに真剣に訴えてくるさまが、冗談で言っているようには見えない。

「盛りだったのよ。八分咲きって所かしら。満開じゃないの。満開って、あとは散っていくけれど、八分咲きはこれから咲いていくのよ。それを、とらないでいつとるのよ」

「そうか……さしずめ、お前も今は八分咲きってところだよ……はははっ」

私はわけがわからなくて、首をかしげた。

「何よ一人で笑って……浅羽、変」

眉根を寄せて、怪訝そうに浅羽を見つめる。

表情がくるくると変わって、見ていて面白いと浅羽が思っているとは全く考えていなかった。

「変か……。そうかもな……」

春の空を見上げて、一人で笑う浅羽を、変だと思わずにはいられなかった。

## 神狩り

私はよっころしよと、縁側に上がりこんだ。浅羽の隣に座ると、一緒に空を眺めた。思えば5年前はこうして浅羽の家で空を見たりするのは当たり前のことだった。

「春だね……空の色が……」  
「ああ……」

風が吹く。温かい風だった。気持ちいい。ずっとこうして、空を眺めていたかった。空の上にある、天ノ都あまのみやこ。高天原。  
それが、春、ここで見える気がした。

「なあ、海鶴。お前、鏡池の祈りに出なくていいのか？ 巫女だろ、一応」

「もう、なんで皆、そんなこと聞きたがるのかしら……。貴方のお母さんも聞いてきたわ、それ。ま、出ることは出るわ。お遊び程度に顔出して、後は大巫女や双葉姉さまに任せて、私は薫と遊んでるわよ」

浅羽は苦笑いを浮かべた。

「遊んでる……。ね。また……。薫、薫、薫。三人で遊ぶ日々の始まりかな……」

浅羽が何か呟いたが、私にはよく聞こえなかった。もう一度聞き返そうとしたら、聞きなれた声が飛び込んできた。

「浅羽！！ ちょっとかくまえ」

来たなと浅羽が笑う。浅羽は何も言わなかったけど、顔にそう書いてあった。長年一緒にいるのだ。見ればわかる。

「薫！ そんなに慌てて、どうしたのよ……」

「海鶴、どうしてここに……」

浅羽は一人心中で笑っていた。

二人とも明らかに戸惑っている。わかりやすい。この二人は昔からこうだった。

馬鹿らしい。浅羽は呆れながら、二人の様子を見守っていた。

「薫、それで、俺にどうして欲しいって？」

「そうだ、助けてくれ浅羽。お前、女まくの上手かったよな。あいつら、まいてくれよ。俺が木の下で居眠りしてて、気がついたら囲まれてたんだ。本当に恐くて、喰われるかと思った……って何笑ってるんだ？」

浅羽は、片手を顔にうずめ、海鶴は、浅羽の肩に顔をうずめて声を押し殺して、笑うのを必死で耐えていた。震える声を必死に抑えて、浅羽が薫の肩を両手で掴んだ。

「それで、お前は黙って喰われたのか？ まさか、本当に喰われると思ったわけじゃないよな。鏡池の祈りに一緒に言っただけで欲しいって誘われて、お前が答えに窮して、修羅場にもなっただろどうせ」

薫が、碧眼の双眸でじつと見詰めてくる。恥ずかしくなるくらい真っ直ぐつめてくるものだから、目をそらしたくなる。彼は随分と綺麗な顔立ちをしているのだ。

「……浅羽、俺、お前を本当に尊敬するよ。なんでわかるんだそんなこと」

浅羽はその場に崩れ落ちた。駄目だ。本当にわからないんだ薫には。大体、興味ないんだろうなと思う。

「まあな、何でも聞け。お前のわからない女の心理なら、俺は大体わかるからな」

「大体、俺と一緒に祈りに参加してどうなるんだよ。俺が見れないのを知ってて、何でわざわざ俺と行きたがる？ 嫌がらせか？」

海鶴が、明らかにむっとした声で言った。棘さえ感じられるその声音に薫も少し引いていた。海鶴が何故か怒っているということだけは、鈍い薫にも感じ取れたらしい。

「馬鹿ね、そんなわけ、ないじゃない。」

それは好意なんだ。知らないのか、薫。そういつてやりたかった。薫は知らない。好きという気持を。薫には記憶が欠落していたが、一緒に感情の一部も欠落させたようだった。相手の気持がわからない。相手の思いを汲み取れない。それで苦しむのは、薫ではなくて、薫に何かの気持を抱いているもの。

海鶴が、小さな声で呟いた。

「薫のことが、好きなんじゃない。その子たちだって……」

「薫、あんまり女を泣かせるな。もてるのはいいけど」

「あんなあ浅羽。俺は別にもててなんかないぞ」

本気でそういつているのだったら、凄いと思う。そこまで、人間鈍くなるうと思えば、鈍くなれるものなんだな。感心する。

「信じられない……」

海鶴の更に棘を含んだ口調に、薫はたじろいだ。そういうことに疎いくせに、海鶴に関しては、変に敏感なところがある。面白い。

「さつきから何を怒ってるんだよ……そんなに、俺が勝手に女たちに海鶴と一緒にいくこといったのがまずいのか……？」

「そこじゃないだろ……」

浅羽は、呆れた目で、おかしな二人を暖かく見守る。二人とも、お互いのことを意識しあっているくせに、本人達が全くそれに気付いていないのだから、これ以上おかしいことは無い。その場にいるこっちが熱くなってくる。

やれやれ。まだまだ二人とも子どもということか。

それにしても、海鶴の変身ぶりには浅羽も驚いた。子どもから突

然女になった。子どもが成長する様を暖かく見守る父親のような心境で、海鶴のことを見ようと思っていたが、それは無理のようだ。

ああ、こうして三人でいるのがこれほど楽しいことだと、今まで忘れていた。

浅羽、海鶴、そして自分。いつも一緒に遊んだ。今こうしていることが幸せだった。

いつか、きつと海鶴は離れる。大人になって、爺さん、婆さんになつて。それがいつかはわからないが、いつか、必ず。

今はまだ、一緒にいたいと思う。家族のない自分にとって、浅羽や海鶴は、家族のようなものだった。

そう考えた。

生きていてはいけない。

そういわれれば、そうなのかもしれない。薫は、自分の過去を知らない。一体どこで何をやっていたのか知らないが、今、ここにあることを幸せに思いたい。誰かに囲まれていることを、幸せに。

確かに、心臓が鼓動を打つのを、感じていたと思った。生きていてはいけない……。その言葉は今だけは、聞きたくなかった。

## 鏡池の祈り(2)

生きてここにいてはいけない。ここにいてはいけない……。

誰だ。どうして否定する。存在を否定なんてするな。

薫は、闇の中で叫んだ。その声は、全く響かず、誰の耳にも届かない。

目の前にいる、しわくちやの老婆も、小柄な少年も、目の鋭い男も、無精ひげを生やした青年も、何も言わず、遠くにたつて薫を見つめる。皆が輪になって、薫を囲み、低い声で何かを呟く。

まるで唱和するかのように、同じ言葉を囁く。耳障りで、嫌な言葉。どうして、絶望させるような言葉を吐くんだ。どうして、夢でさえ幸せで、平凡になることを許さない？

怒り狂うかのように、一人一人の影を殴った。スカスカと、手ごたえのない感覚が残る。

答えは、誰の中にもないんだ……。

## 神狩り

夜の桜並木というのは、壮麗にして輝き、月明かりに照らし出されるその井出立ちは、昏間のそれとは違って変わる。今夜は、鏡池へと集う人々にぎやかだった。今夜の祈りをとても楽しみにしているようで、浮かれて通り行く人が多い。男も女も、子供も老人も。この日ばかりは関係ない。

道の両脇には、毎年この時期になると何処からか商売人がやってくる。知らない異国の芸人の技を見て喜ぶ子供。拍手喝采が起こり、人々を楽しませる。

海鶴はこういつにぎやかな催し物が好きだった。たとえ巫女だろうが農民だろうが、姫だろうが何だろうが、こういう楽しみのお機会は、平等に与えられる。そういうところがまた好きだった。一人でも楽しい。

今年は、新しい楽士が何人かお屋形の所に泊まっているらしい。そんな話を耳に挟んだのは、ここ数日のことだった。

この時期、色々な土地から人が訪れるのは、不思議ではない。雪に閉ざされていた春京もやっとその名にふさわしい春がくる。夜は寒さがまだ厳しいが、それでも外でこうして花見などできるまでになった。

そして春になると、警戒心も薄くなる。

海鶴は無自覚だけど、彼女は外見がかなり美しい。

そして、そういうことに本人は一番無頓着だ。男どんなに一生懸命口説こうとしても素っ気無い。興味が無いのかと思えば、そうでもないわけだ。

どういつつもりで今夜の召し物なのかは大方想像がつく。だから、あいつが来るまで浅羽は遠からず近からず場所で海鶴を見守っていた。

あいつに持っていかれるならまだ我慢できるが、その辺のどこの

馬の骨ともわからない相手に海鷗をそつやすやすとくれてやるつもりは毛頭に無い。

「もし、そこの方。この辺に、確か名前は何だったかのう。薫だったか？ そのような名の女の子は住んでおらんかね？ 年は……16、7くらいかのう。……のう、知らんかね、お前さん」

浅羽は、突然背後から現れた、しわくちやの婆様に話しかけられて、少々とまどった。見かけない顔だ。おそらく異国から来たのだろう。しかし、薫とは浅羽の知っている薫でよいのかどうか……。女ではないし。

「まあ、よく存じているっちゃ存じているような……」  
後ろ頭を搔いて、浅羽は困ったように笑った。

「ばあ様は、その言葉を聞いた瞬間、浅羽に急接近してきた。

「どつちじゃ!？」

「いや、よく存じておりますとも」

恐い。とにかく、妙にまじめな面持ちでうなずいてみせる。これで知らないと答えたら、何をされるかわかったものではなかった。

「……ただ、俺が知っている薫は、婆様のお望みの薫とは違って、女じゃなくて男なんですけどね」

婆様は、急に顔をしかめた。何か悪いことを言ってしまったような気分になって、浅羽は婆様に背を向けて、爆笑しながら逃げ出した。

待たされた。何刻も、何刻も。薫が来るまで待った。

海鶴にしては珍しく、沙苗が飛び上がって喜びそうな格好をしてきた。湯浴みもして、身体を綺麗に清めて、髪を結い上げた。ちょこつと遊ぶつもりで顔を出すといっても、一応巫女。これくらいしないと、大巫女や双葉姉の面子がつぶれる。

肝心の薫がない。薫がいないのは、つまらない。見てもらいたかった。こんな自分を。なんと喋ってくれるだろう。

褒めてくれるかもしれない。

笑ってからかわれたらどうしよう。そんなことを考えながら、夜桜が風に揺れる様を見上げていた。

周囲からちらちらと、海鶴に向かって熱いまなざしが飛んでくる。そして、ひそかに漏らされる、感嘆のため息。

桜の木の下にたたずむ海鶴は、どこか神秘的で美しかった。そこに悪びれる様子もなく、薫がやってくる。

わかっていたが、そうか、やはりな、わかってたんだ畜生、とかいつて、男が散っていく。落胆の様子を隠せない。仮にここで海鶴に話しかけようものならば、ずっと見張っていた浅羽に半殺しにされるどころだっただろうが。

「ふーん……なんか」

薫は、目を細めて、海鶴の全身をくまなく観察した。じろじろ見られて、海鶴はなんだかこそばがゆかった。

「な、何？」

「意外と似合うね。初めて見たから、そういう格好……お姫様なんだなあって思ってた……」

一瞬顔が綻んだが、海鶴の顔はすぐ朱に染まった。眉間に皺を寄せ、頬を子どもっぽく膨らませて見せた。

「他に言うことがあるんじゃないの？ 最初によ！」

「？ 大丈夫、可愛いよ。山猿なんていわれないよ」

「あ・の・ねえ！！ そうじゃないでしょ！？ 遅れてごめんとか  
いえないのかって言ってるの！ 私、ずっと待ってたんだから！」

薫は肩をすくめた。

何、その態度は。

その行動が海鶴の神経を余計逆なでする。

「海鶴、来なかったじゃないか」

海鶴はきよとんと薫の顔を見上げた。月明かりに照らされた白銀の髪が反射してまぶしい。

「海鶴が、今夜桜の木の下って言ったんだろ？ 俺は日が沈む前から待ってたのに、海鶴が来ないから……」

薫は小さく欠伸した。

「えっ……」

「いつのまにか木の上で眠ってた……ごめん、待たせて」

真っ直ぐ海鶴を見つめてくる。海鶴は、それ以上何もいえなかった。

恥ずかしかった。敵わない、本当に。悔しい。何でかわからないけど、凄く悔しい。嬉しいのと、悔しいという気持が、海鶴の心を埋め尽くしていく。

でも、薫。言ってくれた。欲しかった言葉を。可愛いといわれて、悪い気はしなかった。

「もうすぐ、祈りが始まるわね、行きましょう！」

海鶴は、薫の手を取って引つ張った。久しぶりに薫の手を握った。薫が海鶴の手を握り返す。大きくて、暖かい手だった。こんなに、大きな手をしていただろうか。五年前は、まだ本当に少年の手で、すべすべしていて、今のようにごつごつしていなかった。こんなに、海鶴の手を包み込んでしまうほど大きくなかった。

とくんとくんとくん……。

規則正しい鼓動が、わずかに乱れる。少し手が湿っていた気がする。

「海鶴、手が小さくなったよなあ……」

……馬鹿か。薫が大きくなったのだ。男なんだなあ、などと、改めて実感してみる。

鏡池には予想以上に人が集まっていた。例年、占いは特に人気があり、人は隣の里からでも集まってくる。

薫と海鶴は先に宮参りをすることにした。カランカランと、鐘の音が心地よい。人影が一つ。鏡池とは対照的で、とても寂しい。

「浅羽……お前も寂しい奴だな」

浅羽は苦笑した。海鶴を横目でチラッと見やる。目が合うと海鶴はにこっと笑った。

「生憎、俺はお前みたいになからきゃーきゃー騒がれて追い掛け回されるような野郎じゃないんでね、薰くん」

「何の皮肉だ」

浅羽は、薰の言葉を聞き流して海鶴の袖を引っ張り、少し離れた場所に連れ出すと、彼女に囁いた。

「頑張れよ。……応援するから」

「え？ 何のこと？」

優しく海鶴の肩をぽんぽんと叩いて、浅羽は笑った。どうしてか、海鶴にはその笑顔が悲しい含みを持っているように思えた。

その瞬間、胸の奥がちくつとした。そんな風に笑わないで欲しい。どうして笑っていられるんだ。海鶴はきよんとしてそこに立ち尽くした。

「浅羽……？」

「じゃ、俺は、ありがたい大巫女様のお言葉を聞かなければいけないから、失礼しますよ。姫」

おどけた調子で言うと、浅羽は二人に背を向けて、夜の闇に消えていってしまった。海鶴は動揺を隠せなかった。どうして、そんなに悲しそうな顔で笑うのだろう。浅羽、何か辛いことがあったのだろうか。

辛いことがあるのなら、どうして打ち明けてくれないのだろうか。ずっと一緒に過してきただけに、浅羽が辛いことを自分に打ち明けてくれないのは少し切なかった。

「海鶴、浅羽は？」

一人で戻ってきた海鶴に、薫が無邪気な問いを投げかけた。

「行っただわ。私、案外子供なのかな……」

薫が不思議そうな顔をする。

「何わけわかんないこと言ってるんだよ」

「なんでもない。行こう」

薫の袖を引つ張って、海鶴は鏡池に急いだ。

祈りは、満月の日に行われる。波のない池に映るのは、白く大きな満月。鏡池には、真赤な海石榴つばきの木が植えられ、満開に開いて、ひらりひらりと散っていく。

夜。  
冬から、春にかけて咲く花。春なのに、わずかに冷たいこの春の

巫女としては未熟でも、洗練されたこの空間にいただけでも、海鶴は嬉しかった。双葉姉や、大巫女が月の映った鏡池に祈りをささげる。

綺麗だ。ここの空間に存在するもの全部。

海鶴の姉、双葉が海鶴に気がつき、笑顔で近寄ってきた。

海鶴の黒い髪とは対照的に、双葉の髪は柔らかな亜麻色だった。

薄い茶色の瞳も、自分とは似ていない。姉はどちらかというところ、亡くなった母の面影を宿していた。

「海鶴、久しいわね。……来てくれたのね。嬉しいわ」

双葉が、海鶴の手を握る。暖かい。

「姉上、お元気そうで何よりです。……私が参るとは思いませんでしたか？」

海鶴は、少しの皮肉を込めて、姉を見上げた。自分より、8つも年上の姉。自分とは違って、出来がよく、兄や父からの人望も厚い姉。常に自分に優しく、いつも心配してくれて 自分のことを思ってくれる。

同情なんてしてくれるな。本当は叫びたい気持でいっぱいだ。おちこぼれで、末っ子で……、早くに母親を亡くして。自分とは正反對の姉は嫌いじゃないが、哀れむ姉は嫌いだ。

姉は、やんわりと微笑む。

「ごめんね、そういうつもりじゃなくて……。海鶴、歌ってくれないかしら。あなたの歌声に乗せて、祝詞をささげたいの」

綺麗な横顔だ。この人は、何を言っただって、きっとこうして笑ってくれる。きつと、言葉の裏にだって、嘘なんてないんだろう。

「海鶴、堅苦しいのは無しにしましょう。いつもみたいに、歌ってよ」

「わかったわよ……」

春京の神は、女神だと言われている。海石榴に身を宿し、この里に降りる。女神が好むは、美しい祝詞、美しい歌。美しい夜。

巫女の修行で宮に上がる前は、毎年鏡池の祈りで歌っていた。それには選ばれるのが嬉しくて、祈りの歌を一人で練習した日々が懐かしい。

海鶴が声を出すと、空が震えた。空気は、海鶴の声を天に伝え、地に伝え、空間全てに響く。生命を共鳴させる声。女神の……声。

祈りの歌にあわせて、双葉が祝詞をあげる。二つの声が、重なって、交わって……。

響く。

鏡池は、月の光と星の光を取り込んで、煌いていた。

人の輪から外れて、海鶴と薫は、鏡池の宮の裏にある、誰もいないような小さな池に来た。この池は、古鏡池と呼ばれている。表の鏡池よりも高い場所にあって、鏡池へ水を流している池だ。

海鶴も薫も、あそこにおいても意味がないと思っていたが、お互い口には出さない。

「お前の未来を見てみたいとは思わないのか？」

薫が、無邪気に尋ねてくる。どうしてそんなことを聞いてくるのだろう。薫の全てが見えないことは知っている。だが、薫は、自分が自分の全てを見ることができないことを知らない。

「まー……これでも一応、巫女の修行はしたんだし。今まで見えなかったものが、新しい境地から見えるような気がしないでもないわよね……」

あまりにも無理やりすぎる解釈だったが、そこは敢えて気にしない。

「何ぶつぶつ独り言言ってんだよ……」

「おちこぼれだって……きつと何か分かるはずよね!!」

「海鶴、お前なあ」

祈りに参加していたはずの浅羽が、背後から呆れた声を投げかけた。そのまた後ろから、双葉が近寄ってくる。姉が不思議そうに海

鶴の顔を覗き込んだ。

「どうして途中で抜けてきたのですか？ まだこれからののに……」

「姉上、こんなところにいたら、大巫女に叱られますよ」

「あら、海鶴がそのような心配をするなんて」

くすつと双葉が笑う。

「私はいいのです。叱られるのは、私だけで十分ですよ」

海鶴は肩をすくめた。

「この池で占いができたのは、もう何百年も前のことなのよ。占いならば、鏡池でもできるのではないの？ どうしてわざわざ古鏡池に……」

双葉が不思議そうにたずねる。

わからないだろうなと思う。完璧に占いを成功させる姉には。

「姉上、何百年も前に占いできたのなら、今できても全然不思議じゃないですよ」

浅羽が肩をすくめる。

「まあ、そらそうですよね？ 双葉様、好きにさせて差し上げてください」

「でも……歴代の巫女ができなかったのに……」

水面が静かに波紋を描く。丸い月が、ゆがんで揺れる。

見つけた……

神狩り

「え……？」

海鶴は、小さく声を上げて、池の水に手を伸ばした。無機質な声、

それでいてまるで絡め取るかのような声。それが池から聞こえたのだ。

「おいつ！」

今にもおちそうなくらい身体を傾けて池を覗き込もうとする海鶴の腕を、薫が掴んだ。

「どうしたんだよ、海鶴！」

「だって、今、池が光って……」

海鶴が何かを言いかけたと同時に、怒鳴り声が響く。海鶴と双葉は、その声に顔をしかめて思わず耳を覆う。

「海鶴！！ お前という娘は！ 大事な歌の途中で抜けおって！！

双葉！ お前まで！！ 全く、信じられん姉妹め！！」

「申し訳ありません、大巫女」

双葉が素直に謝る。海鶴は、意地でも頭を下げたくなかった。それが気に入らないのか、大巫女が海鶴の頭を平手打ちする。海鶴はぶたれた頭を押さえて、大巫女を睨みつけた。反抗的な海鶴の目に、大巫女は舌打ちした。

「馬鹿もの！！ 変なところで意地を張るんじゃない！！ そのよ  
うなことでは、優秀な巫女にはなれんぞ！！」

「ごーめーんーなーさーいー」

大巫女以外のその場にいる誰もが、心の籠っていないごめんなきに苦笑した。

「別になれなくたって良いです。ここに優秀な姉上がいいますもの」「  
なんでそう反抗的なんだ海鶴！ いつか、神に背く狩手に選ばれても知らんぞ！！」

大巫女は、そっぴい捨てて、下の鏡池に下っていった。

海鶴は、大巫女の背中を見送って、その場に座り込んだ。  
さっき、確かに聞こえた。

見つけたと。

あの声を思い出すと、何故か、寒気がした。

## 使者（1）

豊葦原。この島はそう呼ばれている。この島に住んでいる人は、自分たちが世界のどの辺にいるかとか、世界が広いとか、そんなことは知らない。

天にも高天原という世界があること、地には黄泉の国があること、その間に挟まれるこの地上は、中つ国と呼ばれること。それは知っていた。

この島が全て。この島を作った神が全て。地上を照らす、天照大神が全て。それ以外の神の存在は許さない。そこに宿る八百万神の存在を否定する。

だから、誰がこの国を生んだのかということさえ、今は語り継ぐものが少ない……。

『昔、この世界で最初に天に現れたのは、天之御中主神という神様でした。後に、この神は天帝と呼ばれるようになりました。』

国がまだ海に浮かぶ脂のごとく、くらげのようにただよっていた時に葦あしの芽が萌え上がるように現れたのは、二人の神様でした。イザナギの神とイザナミの女神のご夫婦の神様です。』

## 神狩り

国を作った神は、イザナギとイザナミ。最初に、暗い場所で子生んだ。しかし、この子はとても醜く、骨のないぐにやぐにやした子であった。蛭子ひること名づけられたその子は、イザナギに子として認められず、葦の船に乗せて流してしまった。失敗したものは切り捨てて、また神を生みなおす。

イザナミが火の神を生んだ時、女神は火傷を負った。それから、身を隠すようにして、黄泉の国へ降りていったといわれている。

全てが全ての帰途につくように、女神は黄泉で、男神は天つ都で子供たちを見守る。

生から死、死から生は繰り返される。  
歪めるものは、許さない。

三種の神器を与えよう。汝ら、子供たち。

神器は、力を与えてくれる。そなたらにない力を。そなたらの望みをかなえる力を。

願え。8つの勾玉に。

祈れ。天照を映した鏡に。真実を見せよう。

殺せ。己に脅威を与えるものを。

人と神。かつては共存していたものたち。神の特異な能力は、人の脅威でもあり、憧れでもあった。

地上の神は、その地を育み、土地に豊かさをもたらす。人は彼らを信仰し、社や祠に祭った時もあった。

皇族すめいみは、それを恐れた。元々、自分たちより秀でた力の神。脅威以外の何者でもない。

## 神狩り

殺そう。

神器は平等にわけられていたもの。

三種の神器を全て手にしたものこそ、この世を支配できる。

それを我が手に。

皇族は、その神器に目がくらんで、神たちを騙してこれを奪い取った。神は人を憎み、人は神を恐れた。

巫女は所詮人。神のために存在する彼女らも、情をもった人である。

裏切り。神を殺す。

神は皇族を恨み、皇族は神を恐れた。あれほど、神をあがめてきた人々も、次第に心が離れ、最後には、極僅かの信者が隠れのこつた。

神に背きし神狩りの巫女。

非業の最期を遂げるといわれている。

それでも、彼女は神の依り代。思いを伝えるのは、巫女だから、神は巫女を怨みはしないだろう。

海鶴が見たという光は、薫には見えなかった。ただ、あまりにも彼女が興奮しているので、本当に見えたんだろうなとは思う。それに、謎の言葉を言われたそうだ。見つけたと。

## 神狩り

まだ少し夜は肌寒い季節。こんな夜、外に出て空を見ているのは、なんとなく気持が落ち着かないから。真上にあった白い月が、徐々に西へ落ちていく。

闇の中から突如として現れたのは、月明かりに照らされた老婆と小柄な男だった。見かけない顔だ。この里の者ではない。老婆が口を開いた。

「お主が薫か？」

「誰だ」

「わたしの質問に答えておくれ」

「俺が薫だったら、どうだというんだ」

老婆は、目を瞬かせた。丸まった背中が、少し震える。

「何処かの男に、薫は女ではなく男だと聞いたが、本当にそうだったのか」

どこかの男ってなんだ。

「お主を見たとき、すぐにわかった。この里で、一人異彩を放っておったからな。その髪、その瞳。わたしが記憶していたものそのままであった」

「いやいやいや、さつき男か女かも忘れていた人が、何を言ってるんですか、まったくもう」

小柄な男が苦笑いを浮かべた。どこか風変わりだと感じた。擦り切れた裾。伸び放題の髪。一番不思議なのは彼の瞳で、琥珀色をしていた。肩幅は狭くて、身体も小さい。自分と同じくらいの年なのか、それとも年下なのか。判別がつかなかった。

「何だお前ら」

「探していたんだよ。ずっと、お前だけを」

老婆が薫の手を握り、皺だらけの手で何度も何度も擦った。ここに、目の前に確かに在ることを実感しているようだった。

「……」

「やっと、見つけた」

老婆が薫を見上げる。

誰だ。……知らない。

どうして俺を探していたんだ。……わからない。

生きていてはいけない存在なのに、どうして求められている。それは、生きていてもいいということだろうか。

「もうすぐ来るだろう、ここへ。この里へ、あるべきものを求めた使者が」

「なんだ、それ」

老婆の顔がゆがむ。

「神を狩る女」

春という季節は人を感傷的にさせると海鶴は思う。彼女は陽だまりの縁側に寝転んでずっと考えていた。

昨日のことが頭から離れない。見つけたとはなんだ。誰を見つけたんだ。あの場にいた誰かか。

あの声のことを思うとぞっとする。冷たい声だった。あの声の主に、見つかりたくない。どうしてだろう、そう思った。

鏡池の祈りの後は、巫女が7日間屋形にとどまっていなければならぬという、里の決りであった。7日間だけ、女神の依り代としてここにいる。あと6日間。できるならば早く我が家へ帰りたい。

でのいい兄弟ばかりが集結する実家にいるよりも、ぼろくても、雨漏りしても風が強くても、あの家が一番良かった。

人の気配がした。今日は誰か客人がくる予定でもあっただろうか。それも一人ではなく、複数だ。

なんだか妙な空気に、海鶴は身体を起こした。どうして、こんなに静かなのだろう。いつもならもつとにぎやかな館が。

渡りに、人影が見えた。父と、見知らぬものたち。こちらに向かってくる。

慌てて彼女は中に入った。自分に客、しかもなんか怪しい雰囲気。これはなんだか嫌な予感だ。

……逃げよう。母親の形見の勾玉を握り締めて、海鶴は決心した。

「双葉姫」

「……ふたば？」

父と数人の者が入ってくる。

「来るべきが来ました」

「はい」

こいつの頭をかち割ってやるうかと思う。この人たちの来るべき時、それは最期の時。そんなことを海鶴が思っているとも知らず、彼らは恭しく頭を下げた。

「吾らは帝の勅命により参上いたしました。貴方を無事都までお運びし、帝の御前までお連れするように、おおせつかって参りました」

「都からの使者……。私でいいんでしょうか」

父を振り返つたら父が無言で頷いた。

とても変だ。私でいいんでしょうか。そう言いたくもなる。

自分は海鶴という名前で、双葉姫ではないし。帝の御前に出て行く必要性も良くわからない。だけど、ずっと願っていたのは、外へ出て、自由になること。

「どうか、我々と都へご同行願えないでしょうか」

「嫌だといったらどうなるんでしょう？」

「その時は、貴方様の一族は帝へ反旗を翻したと受け取り、正規軍が反逆討伐として里を討伐せざるをおえません」

「そんな……里を焼くと言うのですか？ 私たちを脅すのですか？」

「そうですね、焼かれないう、努力をするために、こうして里長様が双葉姫のもとへ導いてくださったのですから」

男は父を振り返つた。気まずそうに、父はそこにいた。

それはそうだろうな。大事な双葉を何処かへやるわけには行かない。なんの目的だか知らないけれど。だから、この人たちの勘違いでもなんでもなくて、姉の身代わりとして差し出されたのだろう。この里のために。娘にこんな仕打ち、あんまりだろう。

海鶴が黙っていると、男が囁くように話してきた。

この人、気持悪い。海鶴はそう思わずにはいられなかった。

「姫は、神狩りというものをご存知でしょうか？」

「神を狩るために存在する巫女ですか？ 神に背いたものかなるのでしょう？」

それくらい知識はあった。大巫女から知識を叩き込まれた5年間は伊達ではなかったわけだ。

「ええ。このごろ、先のようにまた神の動きが活発になっています。神は人を憎み、人は神を恐れる……。かつてのように、三種の神器を奪い合い、殺しあう。そのような世を、想像できますか姫。人は

無力です。非力なものです。神と対抗できるものは、神の力を授かったもののみです。帝は恐れているのです。今の世が混乱し、神が人を支配するのを。帝は、かつて人々が行ったように、神狩りをなさろうとしています。既に何人かの巫女は、都でその準備に入っております」

「……………私は、神に背いたことなど一度もありません!!」

海鶴は思わず叫んでいた。巫女にこのままなるのは嫌だった。周囲が勝手に期待して、勝手に自分を巫女に仕立て上げて。だから巫女という人も嫌いだ。巫女である姉も嫌い。

それでも、海鶴は巫女なのだ。いくら巫女の修行の出来が悪くても、いくら口で巫女なんてやめるとか言っているにしても、神に背いたことだけはない。それなのに、どうして……………。

使者の口調が急に優しくなる。その優しさがとても臭くて、海鶴は顔を背けた。ドイツもこいつも、嘘の塊だ。大人はみんなうそつきだ。

「落ち着いてください。あなたは、神に背いたために選ばれたわけではありません、双葉姫。貴方は、この世でただ一人、御霊鎮めのできる巫女。神狩りの中でも、最高の巫女なのです」

「な……………何よそれ」

思わず父を振り返る。そこにはもう父はいなかった。

出て行った。こんな大事な時に。信じられない。海鶴は開いた口がふさがらなかった。

「共に都へ、双葉姫」

「どうしても拒むとおっしゃるのなら、仕方ありません。無理にでも御身をお連れ致します故、御覚悟を」

口々に勝手なことを言ってくれる。多分、姉は御霊鎮めという技

ができるのだろう。それは、この里にとって大事なものであり、だから父は代わりに自分を差し出した。神狩りに、悪用されてはならないものなのだろう、きっと。そう思いたい。ただ、……双葉が大事だから、変わりに娘である自分を差し出すという理由ではないことを願った。海鶴はぎゅっと拳を握り締めた。違う、そのようなこと、父が考えるはずがない。海鶴は自分に言い聞かせた。そうしなければ、ここで泣きそうだったから。涙をこんな連中に見せることだけは嫌だ。負けたくない。

頭を振る海鶴に、庭から不意に声がした。

「おいおい、それは俗に言う、拉致ってやつですよね？」

一同は一斉に声のするほうを見た。睨みつける視線は、それを刺し殺さんばかりの勢いだった。

「おー怖い」

声の主は両手を小さくあげて見せた。ひょっこり現れたのは浅羽だった。使者の一人が厳しく問い詰める。

「どうしてここに!？」

開かれた瞳孔にへらへら笑う浅羽の姿が映る。海鶴は思わず立ち上がりそうになるのを必死に堪えた。

どうして、ここに。

それは海鶴も同じことを心の中で浅羽に問うていた。

「いつからいた。……どこまで聞いた？」

使者はもはや容赦ない。声は低く、顔は険しい。彼らから一斉ににらまれた浅羽は口ごもっていた。

「いや、たまたま姫様の庭の手入れをしていたら……」

浅羽はごまかすような笑いを浮かべた。

「どこまでだ？」

使者はピシャツと言った。

「初めから」

使者たちの中から小さななどよめきが起こった。

「ぬかりましたね」

「このようなことは予定外だ」

「仕方ない、………ここで」

「待ってください!!!」

海鶴はとっさに叫んだ。このままではまずい、それは自分でもわかっていて。

浅羽は関係ないのに、このままでは殺されるかもしれない。

それだけは嫌だ。

そう思ったら、口からでまかせでも弁解でも何でも、すらすらと出ていた。

「行きます、都でも天つ都でも地獄でもどこでも。浅羽も一緒に。それで文句ないですね。はい決りました、もう意見は受け付けません」

その場小さくどよめきが起こり、使者たちが口ごもってお互い顔を見合わせていた。

「ですが………」

一番の使者と思われる男が、その発言を制した。

「いいでしょう。それで貴方が来てくださるのなら」

海鶴は額を押さえて、ため息をついた。

翌朝、海鶴は大巫女に呼び出された。靄がかかり、里はまだ目覚めていなかった。早朝から目覚めているのは、鶏と、海鶴と浅羽くらいだろうか。屋形を出てくるときは、兄弟達と顔もあわせなかった。多分、まだ眠っているのだ。

薫にも合わなかった。

彼も眠っているのだろうか。つい先日やっと会えたばかり……。

正直、こんなに早くまた別れることになるなんて思っていなかった。ずっと一緒にいられると思っていたのに。

しかし大巫女は朝から深刻な顔でまあ。眉間に皺を寄せ、腕を組み仁王立ちして海鶴を待ち構えていた。切れ長の目が海鶴を捕らえると、海鶴はその場に立ち竦んでしまった。今日はまだ怒られに來たと決ったわけではないのに、いつもの癖で何となく怒られるような気がして、無意識のうちに構えてしまうのだ。

「双葉であったのか、神狩りは。お前か、双葉のどちらかであることはわかっていた。仕方あるまい、この里を守るため、どちらかの姫が身代わりにならなければならぬ」

海鶴は頷いた。

「大丈夫です、私、春京が好き。この里が好き。私が行くことが、この里を守ることに繋がるなら、私、行きます」

「悲しむな、海鶴。お前には帰る場所がある」

いつになく優しい声で語る大巫女……。

怒られなかった。それに怖くない。でも、悲しくないのに、何か泣きそうになった。

「悲しんでません。むしろ嬉しいくらいです。ずっと里を離れたいと思っていた。自由に生きたいと。自由ではないけれど、私は行きます」

おかしかった。あれほど願っていた自由がこのようなかたちでかなうことが。

「大丈夫だ、無理をしないで」

「落ちこぼれだからですか」

大巫女は頭を振った。

「違う」

まあいいや。

大巫女が思い出したように私に訊ねた。

「そういえば、お前浅羽を連れて行くそうだな？」

成り行きとはいえ、すまないことをした。変なことに巻き込んだ。

……まあ、あそこにいた浅羽が悪い。海鶴は開き直った。時には開き直ることも肝心である。

「まったくお前らは……馬鹿ほど余計なものに首をつっこみたくないのかしら」

「さあ……」

「あやつ、大巫女様に勝る怖いものなどない、帰ってくるまで死ぬつもりはない。……とかぬかしたぞ小童が」

大巫女は笑ってから冷めた表情をした。いや、怖いんですけど。

浅羽、何てことをしてくれただ。浅羽は大巫女の本当の恐ろしさを知らない。

「帰ってきます、もう一度、ここへ」

大巫女へ背を向けた。息を吸い込む。

「必ず」

瞳には強い決意の光が宿っていた。海鶴を呼ぶ声がある。使者と浅羽がもう既に待っていた。

浅羽が弓を黙って渡す。海鶴はそれを受け取った。

「行きましょう」

春の風が吹く。海鶴と、浅羽の背中を押すように。優しいけれど、決して引き止めてくれない風だった。

## 使者（2）

「大丈夫なのでしょうが？ 海鶴姫は、何の力も持たぬ巫女ということ……。やはり、双葉を使わせたほうが良かったのでしょうか？ いくらこの里に伝わるものを守るためとはいえ……」

大巫女は不安げに里長に尋ねた。

海鶴が使者に連れられて、早朝春京を発ってから、半刻過ぎていた。大巫女と長は二人で頭をつき合わせて、これからのことを互いに話し合っていた。

「大丈夫。仕方あるまい。勾玉を守るため……。誰かしらが犠牲にならねばならぬのだ」

里長は腕組みをして低く唸った。大巫女はそうですなと小さく呟くことしかできなかった。誰にも、どうすることもできない。

苦渋の表情を浮かべる里長の横顔を、大巫女は心配そうに見つめた。

「しかし……。連れて行かれたのは海鶴です。何かやらかさねば良いですが……。あの娘に都へ赴かせるのは、やはり無理があったのではないかと、今更ながら心中で後悔しているのです」

「大丈夫だ……」

二度目のその言葉は、自分自身に言い聞かせているようだった。

廊下を小走りで走る音がし、続いて少し息の上がった娘が静寂の間に飛び込んできた。髪はふり乱れて、目がすこし赤くなっている。

「父上……」

「何です、騒々しい。双葉、少しは自重して行動なさい」

父のみいると思っていた双葉は、そこに大巫女がいたことに慌てた。

「申し訳ありません、ですが、急を要することでしたので……」

「 どうした? 」

「それが……御魂鎮めの勾玉がないのです」

「なんだと……!?!? 」

その場にいた大巫女も目をむいた。

「なぜです!?!? あれは呉羽様が最期、自らの手で箱にしまわれたはず……!?!? 」

「ですが、今まで誰もその箱の中身を見たものはいないはずですが、これはわたくしの想像ですが、最初から、勾玉は箱の中になかったのでは? 」

その場を見えない白い霧のようなものが包み込んでいくような感覚に誰しもが陥っていた。

「では……一体誰が勾玉を持っているというのだ……? 」

薫は途方にくれていた。海鶴がどこにもいない。そういえばなんだか今日の朝はいつもと違うような空気だった。それが原因かもしれない。

海鶴の屋敷は誰もいなかった。海鶴の乳母である早苗もいない、浅羽もいなかった。誰も居ない屋敷はとても冷たかった。ひっそりと、主の不在を物語っている。それが妙な焦りを感じさせる。

何かが崩れる。平穏な日々が音を立てて消えていく。

どうしてこんなに不安になる。海鶴がいなくなっただけで、何が変わった? それを薫は知らない。歌が聞こえない。声が聞こえない。温かみが、感じられない。

「どうして、いないんだよ……」  
「誰かそこにいるのか!？」

緊張と、懐疑を含んだ声で誰かが問うてきた。長だ。長なら、海鶴がない理由を知っているだろうか。

「薫……なぜここに……!!」

「長、教えて欲しい。海鶴はどうしたんだ?」

長は、海鶴の行方を知らなかった彼に少々驚いた。眉を寄せて訝しげに薫を見下ろす。

「知らぬのか。海鶴なら今朝旅立った。お前はなぜここにいる」  
「都か……」

考え込む薫を尻目に、長は海鶴の部屋をうろつくと動き回り、家具の下やら間やら、引き出しの中やら箆笥の中身やらを開け閉めし始めた。何かを探している。その表情は必死であった。一つ一つ確かめて幾たび、顔色が見る間に青ざめていく。

「ない……。ここが最後であったのに。なぜどこにもない!？」

拳を壁に叩きつけ、里長は海鶴の屋敷を出て行った。  
何を探していた。海鶴の部屋で、何を……。

「深刻な顔してどうしたんじゃ?」

「うわあッ!!! き、昨日の婆さん……」

またまた突然現れた老婆に薫はうろたえた。気配を全く感じなかった。恐すぎる。

「使者がきたのだろうか？　ここに。やつらは神狩りの巫女を求めてここまで来た」

薫の目が鋭さを増す。なぜこの老婆はそのようなことを知っているのだ。

「何者だ、婆さん……」

「そうじゃな、御魂鎮めの巫女はこの里の勾玉を扱えるただ一人の人物じゃからな。荒れ狂う神の魂を沈めることのできる巫女は、やつらにとって重宝すべき巫女なのじゃな。巫女は二人いたが、使者は迷わず本物を選んだか」

「何を……」

「下準備を怠らなかつたな、やつら。里の者が勾玉を守っているのをしておつた。姉姫の名前を出すことで、本物を引き出したか……。ずるがしこい奴が考えそうなことじゃ」

「……わけのわからないことをべらべらと」

「あー、無理無理。葵上は一度自分の世界に入りだすと、なかなか答えてくれないから」

昨日、老婆と共にいた男が苦笑いしながらそこに立っていた。それだけではない。他に、二人男が薫を囲んでいた。

「あんたら一体何なんだ……？」

その答えは、薫の想像の範疇にはないものだった。

「地の神一族だ」

老婆は低い声でうなるように言った。誰かが聞き耳を立てていれば困るのか、彼らは周囲をよく見渡している。薫は絶句した。しば

らく言葉が出てこなかった。

「でも、神の一族って……」

小柄な男が、薫の目の前で手を振って見せるが、全く反応が見られなかった。彼は呆れたように老婆を振り返った。

「固まってしまいましたけど。どうしましょう、葵上様。ちょっといきなり本題に入りすぎたんじゃないですか。かなり動揺してますぜ」

「薫、よく聞いておくれ。お主があのお巫女とどういう関係であったかは知らないが、あれは狩手だ。あれと関わってはならない。おぬしたちはいずれ分かたれる運命であったのだろう。わしも初め驚いた。狩手と一緒にいるお前を見て。巫女は都へ向かった。もう我々にはどうすることもできない」

「どうしてだよ……昨日のうちからわかってたんじゃないか。どうしてそれを俺に教えてくれなかったんだ!？」

薫は老婆の胸倉を掴んで激しくゆすった。このときばかりは、あまりの怒りで、お年よりは大切にという精神も何処かへ吹き飛んでしまった。悔しくて、海鶴を生かせてしまったことが悲しくて何もできなかった自分に憤りを感じた。

「葵上様!！」

「貴様、何をする!! 葵上様、やはりこいつではないのではありませんか? 葵上様に手を出すようなやつなど言語道断! 問題外です」

薫は自分と老婆の間に割って入ってきた男を見上げた。眼光がひとときわ鋭く、高みから薫を見下ろしているようなその男は、鷹を連想させた。他の男も緊迫した面持ちで薫を睨みつけている。腰の太刀に手をかけたまま、薫を睨みつけている。薫が再度老婆をなじるような行為をしたならば、きっと容赦なく切りかかってくるだろう。

そんな彼らを制して、老婆はどこまでも落ち着き払った様子で彼らをなだめた。

「そうぴりぴりするでないよ、お前たち。確かにわしはあの巫女を引き止めることができたのに、それをしなかった。非はわしにあるだろう」

「しかし……それは我々がどうにかできることではないはずですよ。そうだ、そんなことはわかっている。あれはただのあてつけだ。怒りのやり場がなく、老婆に子供のような癩癩をぶつけて。自分が情けない。」

「よい。薫はまだ若いのだ。感情が先走ってしまうことだってあるうが。お前たちにもそうだった時期があったであろう？」

老婆は意地悪そうに言った。彼らは言い返そうとするが、そのすべもなく、言葉を詰まらせた。老婆はふっと満足げにため息をついて、薫のほうに向き直った。

「さて薫よ。お前だってそろそろ気付いているだろうか。お前とて馬鹿ではあるまい」

「何のことだ」

薫はむすつと答えた。老婆が片目を瞑ってみせる。

「お前の正体じゃ。ここにおいて、お前は時々、自分は一体何者なのかと思ったことがあるじゃろう？ お前は心の奥で感じているはずじゃ。自分は他の人間とは違うとな」

「……ない」

薫は一言そういつて、目を伏せた。聞くのが恐い。知ったら最後、一体どうなるんだ。海鶴とは道を分かかって、何だ。

「何を迷うことがある。自分の正体を知りたくはないのか？」

老婆が問う。薫は深呼吸して口を開いた。

「俺は」

その場にいる全員が薫の次の言葉を待った。全身で心臓の鼓動を感じる。血潮が通うのを感じる。  
この気持は一体なんだろう。

「お前たちと同属だといいたいのか？」

自分で言ったのに、衝撃だった。まさか自分の口から、自分が今まで考えもしなかった言葉が出てくるとは思わなかった。

「何を言っているんだ俺は。どうかしている」

笑おうとしたが上手く笑えない。薫を見る老婆の目は真剣だった。その身に纏う緊迫した雰囲気、固唾を呑む。

「お主はこの戦局を左右する重要な男じゃ。記憶をなくしてこのようなところにいるとは、本当に驚いたわ、薫」

暫し呆然とする薫に、更に追い討ちをかけるように老婆が囁く。

「また、かつてのように共に戦おうぞ、友よ」

そんなこと、突然言われて、一体自分に何ができるといっただろうか。今まで普通の人として生活してきた男に。

薫はためらいがちに彼らを見渡した。誰をみても、自分のことを射抜く鋭い目つき。

まるで囚われた奴隷のような自分。

色黒で、二十歳前後の男。無精ひげを生やし、髪を後ろで束ねている。黒い髪と切れ長の黒目。黒い龍のようだった。

「私は龍邦<sup>りゆうほう</sup>、こちらにいらっしやるのが葵上。その隣にいる小さいのは虎彦。私の隣にいるのが鷹峰<sup>たかみね</sup>」

龍邦は淡々とした口調で簡単な自己紹介をした。鷹峰の薫を注視する鋭い眼光に少々たじろぎながら、薫は口の中で小さく名前を復唱してみた。ぴりぴりした空気が。おそらく彼らは幾多もの死線を潜り抜けてきたつわものだと感じた。言葉では何も言わなかったが、

そんな気がした。

葵上と呼ばれた老婆が苦渋の表情を浮かべた。

「帝が近年、神狩りの動きを見せている。都に各地から寄せ集めたえりすぐりの巫女たちを住まわせ、訓練させているようだ。今度こそ吾らを滅ぼすつもりだ。吾らを滅ぼして、神器を手に入れるつもりだろう。」

巫女たちはもはや帝の人形であろう。洗脳された彼女らを助けることはもはやできない……。

ならば戦うしかないのだ。自らの平穏な日々を取り戻すには。この土地をこれ以上荒廃させないためには。人の手から、この大地を取り戻すしかないのだ。忘れられしかの都に隠れ潜んではや何世紀がたったであろうか。天月へ、帰ろう。薫」

失った八年間の記憶。自分の故郷だという都、天月。そこで生まれて、自分の知らぬ人々が自分のことを知っていて、ずっと探していた。すごく変な気分だ。

「さあ、われわれの手をとるか、薫。それとも、この里で世界が人の手によって支配され、朽ちていく様を黙ってみているか？」

「海鶴はどうなるんだ。俺が神の里に行ったら、敵対するんじゃないのか？」

「不安か。ごもつともだな。そうじゃ、あの巫女はいずれ、必ずお前に仇なす存在となるぞ……それでもお前が望むのなら老婆の目が妖しく光る。」

「その時は、あの巫女を奪い返すまでじゃの」  
老婆が意外と白い歯を見せて笑った。

海鶴は都の使者に連れて行かれた。神狩りの狩人として。

俺は、神の使者に連れて行かれる。人と戦うために。

これって、何の皮肉なんだろうな、海鶴。

薫の思いは、春の風に乗って流される。遠く、遠く。同じ空の下

神狩り

に立つ、彼女へ。

## 旅は道ずれ世は情け(1)

ずっと考えていた。自分のこと、家族のこと。里のこと。里を離れたいと思っていたのが、このような形でかなくなってしまったこと。

それより、この人たちを欺いて私はここにいるわけだけど……。いいのかな……。このまま騙し続けていて。私がいても何もできないわけだけど。

……。いいのか。

「……鶴？」

「うーん」

「海鶴、聞いてるか」

浅羽が訝しげに私の目を覗き込んでくる。

「だからこのまま都についてお前が偽者だつてばれたら間違いなくぶつ殺されるんじゃないかって。そうなる前に何か考えようって言うてんだよ」

「いやだぶつ殺されるなんて、何言ってるのよ」

使者の一人が横目で私と浅羽を見る。浅羽が慌てて私の口を押さええる。彼は顔をしかめ、声を潜めた。

「そんな大きな声で……。もう少し声落とせ」

「何だよ」

「何でつて……。何でわからないんだよ」

「大体浅羽は大げさなのよ」

呆れたようにため息をつく浅羽。本当に心配性なんだから。そんなの、実際になってみないとわからない。そういうことが起こらないように色々間がることも大事だと思っけど、それやっていたら、いつまでたつても進んでいかない。

ずっとびくびくしているわけにもいかないのだから。

「もう、そんな暗い顔しないで。なるようになるんじゃないの？」

私はそう思うわ」

「そりゃあなるようにしかならないだろうな。わかってるんだよそんなことぐらい」

「どうなるかなんて、そのときになってみないとわからないでしょ？」

「なんていうかさ、もっと危機感つてものを感じたほうがいいんじゃないのか。何事も前向きに考えられるのは海鶴の長所かもしれないけどさ」

危機感といわれても、殺されるということに対して実感が湧かない。自分が死ぬことを想像できないから、全然怖いと思えない。浅羽は、怖いのだろうか。

「ねえ、怖い？ 自分が死ぬところを想像してみて」

唐突な質問に、浅羽は目を大きく見開いた。そんな彼をじつと見つめる。浅羽はふつと笑って海鶴の頭に手を置いた。浅羽の手は暖かかった。

「馬鹿だな、海鶴」

「私は真剣に聞いているのに。答えてよ」

「だってさ、自分が死ぬところを想像するなんて馬鹿らしいだろう？」

「そんなことない！」

むきになっていた。

どうしてこんなにむきになっているのかわからなかった。

自分は怖いと思わない。

だけど、浅羽は。殺されるかもしれないといって。それを回避しようと考えていて。

そんなこと当たり前だけど。

死ぬことにたいして恐怖があるなら。

私についてきたことは、間違っていたのではないか。

都にいったら、素性がすべて暴かれて、私が双葉ではないことがわかったら。

私たちは殺されるのかもしれないのに。

「どうしてついてきたのよ」

私が浅羽も一緒よ、とか啖呵きつてその後の問答一切受け付けなかったからなんだけど。今自分でめちゃうくちなことを言わんとしていることはわかる。

「心配だからに決ってるだろ」

「浅羽と一緒に来たところで、死体が一つ増えるだけでしょ？」

浅羽の顔がこわばる。違う。こんなこと言いたいわけではない。

「わからないの？ 私は双葉姉さまの身代わりなのよ。殺されること承知で送り出された娘なの。いらないの。それに貴方はついてきた。自殺願望でもあったの？」

「何言ってるんだよ、海鶴」

自分でも止められない。ことばを吐き出すたびに、嫌悪感が湧き出る。見たくない、醜い自分の姿がさらされる。

「だってそうでしょう？ 考えてみなさいよ。私は双葉じゃないし、御魂鎮めとかいう技もできないし。あるのは度胸と根性と体力と歌と弓の腕前よ。何かできると思う？ 私何もできない。双葉姉さまの代わりなのに、何もできないのよ。価値がないってわかった瞬間、殺されるでしょ？」

「だから、生きるために何か考えようって……！」

二人とも興奮しすぎて気がつかなかったが、二人を取り巻く使者たちには、その会話丸聞こえだった。

「話は聞かせてもらった」

「ちよつと黙ってなさい。私にはまだ言うことがあるのよ！ 全部言わないとこの際気がすまないわ！！ ずっと腹のなかに貯めてきたのよ、ずっと……！」

「おい、だから……」

「私だけならいい。だけどね、人の死を、それも自分の大事な人の死をみるのは怖い。もう嫌なの」

「だから馬鹿だつてなんだよこの馬鹿姫……！」

鼓膜が破れるくらい大きな声で浅羽が怒鳴る。怒っている、見

れば一瞬でそう判断できるくらい、浅羽の顔は赤い。

「なんでそうなんだよ。俺だってお前が死ぬところなんて考えたくないよ。でもお前一人なら絶対生きる道探そうなんて思わないだろ、馬鹿だから。自分なんてとかくるぐる考えて。本当にどうしようもないくらい馬鹿だな。だから一緒に生き残る道を探そうって言ってるんだろ、人の話最後までちゃんと聞け馬鹿」

「何よ……そんなに馬鹿連呼しなくてもいいじゃない！」

浅羽がむすつと呟いたのに、海鶴は気付かなかった。

「人の気も知らないで……無謀な考えしてるお前が悪いんだ」

無視され続けた使者たちは、ようやく話がまとまったらしい二人に改めて話しかけた。

「どういうことかわからんが、お前は偽者であるということだな？」

「なぜわかった？」

海鶴は口を開いた使者をにらみつけた。

「なぜってお前、わからなかったらそれこそ馬鹿だ。耳ついてるか疑いたくなるであろう。とにかく、偽者とわかった以上、そして我々の神狩りの策を知っている以上、生きて帰すわけにはいかん。都まであと一月ひしきというところまでできていたが、残念であつたな」

「だから、都まで行くっていつてるじゃない。今更帰らないわよ」

「う……。いいんだ、とにかく生かしておくわけにはいかん」

「わかったわ、こうしましょう」

「いや、いかなる要求も受け入れることはできん、言うだけ無駄だぞ」

使者は鼻を鳴らした。

「貴方たちだけ死になさいよ」

「えッ!？」

使者たちは一瞬にして固まってしまった。何を言われるかと思えば、死ねだと。

「何を言っているんだ貴様!! どう考えてもお前たち二人で我らを振り切れるわけがないではないか。本当に馬鹿なんだな。そして

人の話を聞け。要求は受け入れられん」

浅羽は呆れて呟いた。

「いやいや、受け入れたらえらいことだぞ。死ぬんだから……」  
「違う違う。死んだことにして、帝には会わないよう一生闇にまぎれて暮らすの……。裏社会で生きてらいいのよ」

海鶴の顔はかつてないほど輝いていた。それほどまでにいい思いつきだと思っていた。

「一生娑婆の空気は吸うなというのか？」

「我々に日の目をみるなと？」

目の前で、満面の笑みを浮かべる少女へ視線が注がれる。

「それぐらいできると思いますけど。話の雰囲気からすると貴方たち、隠密としての使者でしょ？ 帝の勅命で動いているといっても、表立って活動できているわけではないんでしょう？ 不可能だ、なんて言わせませんよ」

「それで、我らに一体どんな利益があるというんだ」

「ここで死ななくて済む」

「ご自分の力を相当過信されていらっしやるようだな、姫君」

「私は確かに何のとりえもありません。でも、一つだけ。生まれた時からいただいたものがある……。それは、声です」

「声がどうした」

使者たちがせせら笑う。浅羽はひやひやしながらその状況を見ていた。

海鶴の声は、春京でこう呼ばれていた。

『女神の声』。

「おい、ちょっと待て。そんなことより、あれを……！」

使者の一人が西方を指差した。空が茜色に染まり、夕日に照らされる金色の雲がゆっくり動いていく。異様なのは、その雲の動きとは別に、黒い雲が集まり、徐々に大きくなって空を埋め尽くしてい

く様子だ。

その雲と動きを共にするかのように、日が落ちる場所からここへ、急激に向かってくるものがあつた。

最初は小さな点だつた。

それは徐々に大きくなつていった。

肉眼で確認できるのは、青白い炎と、夜の闇のようなものが連動して動いていること。

ゆらゆら揺れる、大きな炎。

「まさか、ここに出るなど……!!」

「巫女はいないんだぞ!!」

どういう意味が良くわからないが、向かってくるものはあまり歓迎されたものではないらしい。

「焰神ほむらのかみ!! 何人もの巫女や人を食い殺している、ここら一体で幅をきかせている狼だ!」

「全員、焼け死ぬ可能性がある!」

使者全員が混乱に陥ってしまった。本当に予期せぬ事態だつたよ  
うだ。

「蝉せみ! かくなる上は我々で打つて出る!」

「仁じん、相手はあの焰だぞ!」

「海鶴、何とかならないのか? このままだと都に着かなくても死ぬかもしれないぞ……」

「浅羽、私に何ができると思ってるの? 巫女とはいえ、才能がないと言われた私が。何とかできるならしたいわよ」

そうこう話している間にも、確実に焰は迫ってくる。

黒い大きな影が、一団の上空を飛ぶ。

「来た!! 皆、伏せろ!!」

誰かの怒声に全員地面に這い蹲る。

伏せる直前、海鶴はその姿を垣間見た。

大きく裂けた口からのぞく、だらりとたれた真赤な舌。そこから

吐き出される熱い息。

尾は青白い炎のように揺らめいていて、それ以外の毛羽立った毛並みは夜の闇の色だった。

周囲を睨みつけるのは、血走った黄色い目。

爪は長く鋭そうだった。

全長約自分と同じくらい。とにかく大きかった。

焰は、低く唸って一団の周りをぐるぐると回り始めた。良くわからないが、海鶴は品定めされている気分だった。

帝のいぬめ！

「え……？」

声だ。声が聞こえた。思わず体を少し起こした。

「海鶴、危ない！！」

浅羽の叫び声は、すごく遠くから聞こえた。

焰が口から灼熱の炎を吐き出した。逃げ切れることのできなかったものは、断末魔の叫びを与える暇もなく、一瞬にして消えていく。使者の何人かは焼け焦げて消えた。

起き上がった海鶴の体に、炎は直撃した。浅羽は、体が動かなかった。いや、動けなかった。目の前で海鶴が炎に飲み込まれる。

やめてくれ、もうやめてくれ……。先にいくな。

自分も炎の熱気に包まれ、死ぬのかと思った。

「仁！！ 巫女殿の札を！！」

「ああ！！」

巫女の霊力を込めた札の力で生き延びたか。だが無駄だ！

ここで終わるのだ。いぬ共！

「そこまでだ！」

その場に現れたのは、白い衣に緋色の袴を履いた、海鶴と同じ年頃の娘だった。髪は肩ほどまでの長さで切りそろえられている。

彼女は太刀を抜き、焰へきりつけた。空を切る音が響く。焰はそれをかわして、地面に軽やかに降りた。

切れ長の目が焰を真正面から見据え、黄色い目と交わりあう。

「焰、ここにお前の望むものはない！ 早々に立ち去れ！！」

燈火<sup>とつか</sup>か。我が後をつけてきたか。まあいい。その二人は殺し損ねたが……面白いものが見れた。ここは引こうじゃないか。

焰は不気味に顔をゆがめた。鼻に皺がより、目が細まる。これは焰が機嫌の良い時、みせる表情だ。

気味の悪い笑顔を残して、焰は西へ去っていった。空は元の茜色に戻り、回りは朱色に染められた。

燈火は太刀を鞘に収め、後ろを振り返った。

「残ったのは、二人だけか……」

使者二人の疲労困憊気味の表情をみて、彼女はため息をついた。そういえば、帝の命令で使者が派遣され、春京から巫女が連れてこられることになっていたが。

燈火は自分の目の前にある光景に目を見張った。

少女が起き上がり、青年が青い光に包まれていた。

少女の首から、蒼く光る勾玉が下がっているのが垣間見えた。

旅は道ずれ世は情け(1) (後書き)

更新遅いです。はい。2ヶ月ぶりの更新でございます。

なので話しが飛んだり分けわかんなかったりするかもしれません。本当にすみません。

## 旅は道ずれ世は情け(2)

(あれ、なんともない……)

気がついたら、地面に伏せっついて、さらに周りを見ると、知らない女の人が心配そうに私を見ていた。浅羽の姿も後ろに見える。

何だ。無傷みたいだ。でもどうしてだろう。良くわからないけど危ない状態だったのに、何とか助かったみたいだ。

「おい、お前。大丈夫か」

「え、あ……。はい、あの。ありがとうございます」

そんなに鋭い目で見られると、言葉に詰まってしまう。

私に声をかけてきた女性は、春京では見かけない種類の人だった。肩で切りそろえられた髪。春京では女性はみな髪が長かったから新鮮だ。肌の色は褐色で、白い衣と緋色の袴がよく映えた。色の白い海鶴とは正反対だ。切れ長の黒い瞳は、とても意思が強そうで、その目で見射られたら思わず足がすくんでしまいそうだった。

私が少し怯えた目で見ていたら、彼女はその鋭い眼光を少し和らげて微笑んだ。

「助かったのは、お前達四人だけのようだ。運がよかったな」

「四人だけって……」

使者は仁と蝉以外全員死亡してしまったらしい。肉片の一片も残されておらず、人の存在した痕跡はそこにない。

「あの人たちも助かったんですか」

あの狼の灼熱の炎に焼き尽くされなかった。女の方は頷いた。

「そうだ。私の 巫女の札を持っていたからな」

「……三の巫女殿、なぜここに」

へたつていた使者が驚愕の表情を浮かべ、女の人を見上げている。幽霊でも見たかのような顔つきだ。この人、そんなに珍しい人なのだろうか。

「私は、陰君いんのみぎからこれから都へ来るはずの巫女を迎えにくくように

と頼まれてきた。帝とは関係ないが、陰君の頼みだ。無視することはできない。あいつの我がままにつきあってやっている。……それで、この娘が巫女か」

自分で否定しようと思ったが、使者が首を横にふった。……確かにこの使者たちの望む巫女ではなかったわけだけど、そう力いっぱい否定されると、癪に障るのはどうしてだろう。

「こいつは巫女ではありません。ただの地方の姫です。結局、違うものをつかまされたようです。勾玉もおそらく、持っていないのでしょう。やってくれましたよ。本物の双葉姫は里にいます」

女の人は声を立てて笑った。使者を馬鹿にしているように見えた。「お前達、どれだけ彼女と一緒にいるんだ？ 気がつかなかったのか。彼女は勾玉を持っているし、おそらく『本物』だ。本物は、双葉ではなかったということだ。……お前、名はなんと言う？ 私は燈火。神狩り、三の巫女」

神狩り……。都に集められているというのは本当のようだ。

「海鶴です。でも私、勾玉なんて持ってませんよ」

慌てて手を振る。冗談じゃない。この勾玉は母親の形見で、そんな神狩りの巫女や帝が望んでいるような凄いものではないはずだ。

「その首にかけられたものは紛れもない、四方に散った、八尺瓊勾玉やまかしのまがたまの一つ。その証にお前は焰の炎を勾玉で防いだ。それに、連れの男を助けたのはお前だろう？ 青い光に包まれ、そこに倒れていたぞ」

「そんな、私……」

大巫女からは才がないといわれていたのに。

「そこのお前の連れに聞いたぞ。お前、『女神の声』を持っているらしいな」

私と目が合った浅羽が、燈火の後ろで手を合わせて頭を下げているのが見えた。口をパクパク動かして、何度も「すまない」と言っている。

「はあ、確かに私の声はそう呼ばれていましたか……」

「女神の声は何なのか知っていてそう呼ばれていたんだよな」  
「女神の声は、癒しの声です。少なくとも私は癒しにしか使ってきて  
ませんでした」

「それ以外にも効力はあるということは知っているようだな……。  
例えば、ある音韻を踏むことによって相手を傷つけるとか、時には  
殺すこともできるとか……。その声をもつものは神の魂を鎮めて力  
を封じ込めることができるということも知っているか、海鶴」

海鶴が生まれつき持つ、女神の声は、海鶴が歌うことによりその  
効果を示現してきた。あの鏡池の祈りの日。歌い手に選ばれたのは  
海鶴が女神の声を持っているからという理由もあった。特定の音韻  
を踏むことにより、癒しだけではなく、人を死に追いやることもや  
らうと思えばできる声だった。

女神に選ばれた者が持つ能力の一つ。それが女神の声。

「この声で人を傷つけることもあるということは知っています……。  
神の力を封じるといのは初耳です。やっぱり、私が巫女なわけな  
いですよ」

「自分が巫女ではないと言い張るか？ まあいい。仮に巫女でなく  
とも、神を惹きつける力がお前には確かにある。女神の声だぞ。神  
狩りとして最高位にある一の巫女でさえ持っていないその才能。神  
狩りではなくなんだという？」

手が震えた。指先がぴりぴりしている。舌がやけに乾いている気  
がする。

「私が、神狩りだというの……？」  
「わからない。ただ、お前のその勾玉は本物だし、女神の声を持つ  
というならお前も本物なのだろうな。私は陰君から迎えにいけとし  
か言われていない」

ひよろつとした男が無表情で燈火に近づいてきた。二頭の栗色馬

の手綱を引き、一頭の手綱を燈火に渡す。

「燈火。無事ですか。巫女は見付かりましたか」

「紅、あっちへ行つてろ。お前が来ると皆おびえると言つただろう」  
紅と呼ばれた男は仮面をつけているように、眉一つ動かさず、感情の動きさえよくつかめない。確かに怖いかもしれない。紅は燈火の言葉は全く気にしていないようだ。

「ええ、できることならそうしたいですがね。主のご命令は燈火の護衛をしることですから」

「護衛だと？ 監視の間違いではないか？ 大体お前今までいなかつたじゃないか。護衛の意味がないだろう」

「否定はできませんね。それに、お言葉を返すようですけど」

「何だ」

手綱を受け取って、馬に乗る燈火を助けながら紅が抑揚なく言った。

「ついてくるなら離れていろ、私に近づくなと言つたのは燈火です。護衛の意味なんて最初からないでしょ？ ま、監視さえできればあとは死のうがどうしようが知つたこつちありません」

紅は肩を竦めた。

「……お前は本当にどうしようもない男だな。主以外はどんなにでもなれか？」

「いいえ、主と自分以外、本当にどうでもいいと思つているだけです」

「……そうか」

馬の背に乗り、燈火が近づいてきて海鶴に手を差し出した。

「さあ、私と一緒に来い。お前を陰君のところへ連れて行く」

差し出された手をとろうか迷っていると、浅羽がいつの間にか背後に回っていて、背中を軽く叩いた。

「俺はとことんお前に付き合う。お前の好きにしたらいいさ」

「浅羽……」

浅羽と海鶴がそれぞれ馬に乗る。どこから来た馬かというと、使

者達が乗っていた馬だ。馬を奪われた使者二人は、燈火を恨めしうに見上げた。

「お待ち下さい、三の巫女殿！ 我々は帝と巫女を引き合わせるまで巫女を手放すことはできません！ いくら三の巫女殿の言葉とはいえ、聞き入れるわけにはいかないのです！」

「そうです、巫女は一刻も早く都の巫女舎あらかに……」

「お前達の言いたいことは良くわかるけど、私じゃどうすることもできない。文句があるんだったら、直接陰君に言うように。巫女は責任を持って都に送り届けるから、心配するな」

快活に笑って、燈火は使者に背を向けた。使者取り残された使者は口々に何かを叫んでいる。その声も、馬を走らせ始めた者の耳には届くことはなかった。

使者ではなく、人が巫女とその護衛になっただけで、海鶴と浅羽の旅はそんなに変わりないように思えた。

紅が先導を勤め、何故か浅羽がしんがりを勤める。海鶴と燈火は並走という感じになった。

燈火は色々話してくれた。陰君とは朝廷内では位をつけることができないくらい、限りなく帝と対等に近い力をもつものこと。陰君は弓の名手だということ。

「お前が出会った神だが、あれは焰という。私が持つ、紅玉を奪おうと何度か都周辺の里に近づくと神だ」

燈火は自分の首から下げられた勾玉を海鶴に見せた。その名の通り、真紅の勾玉が胸元で光っていた。

「勾玉は全部で八つある。一の巫女が持つ紫玉、二の巫女が持つ碧玉、私が持つ紅玉。今見付かっている勾玉だけで三つだ。勾玉が神にとってどういう意味を持つのか知らないが、勾玉をなんとか奪おうとあちらも命がけだな……。もつとも、神を殺すことなど誰にもできないけど。やつらは不死身だ。神が死ぬところを私は見たことがない」

燈火は一人で話し続ける。

神って、なんだろうか。いきなり襲ってきて、人を殺して去っていった。帝のいぬがどうたらこうたら。あんなの相手に御魂鎮めをしてくれといわれて。

「神は胴を切り落としても、首をはねても死なないといわれている。誰も神の首や胴を切り落とせるような距離に入ったことはないし実際に切ったこともないからわからないけどね」

後ろを走る浅羽が口を挟む。

「そんな相手をどうやって倒すんだよ」

「そうだね、私達神狩りの巫女にも神を殺すことはできない。私達は神を殺すことを目的としているわけじゃない。神はね、殺した人間の魂を喰らって生きている。その人間の力が強ければ強いほど、神にとっては最高の力の源となる。最近あいつら、無差別に人を喰うようになってきた」

海鶴は話を聞きながら前を見つめていたが、今の言葉に耳を疑った。神とは、人の魂を喰らって生きるものなのか。信じられない。

浅羽も一瞬言葉に詰まっていた。

「……どうするんだ。神狩りの巫女だろお前」

「神を殺すことはできないが、封じ込めることならできる。私達にできることはそれまで。この世に神を殺すことができる巫女がいたとしたら、そいつは人間じゃない。巫女のフリをした、神殺しの女神だね」

「女神って……そんな、仲間を殺す女神がいるのかよ？」

「ああ、いたのさ。かつてはね。なんだ、伝説の殺戮女神を知らないのか？」

「伝説の殺戮女神……？」

「神殺しの椿姫、鬼殺しの葵上。それぞれ、天ノ都では有名な女神だね。地上に降りた神をどんどん殺戮していった椿姫と、人の祈りを聞いて鬼を殺戮していった葵上。神を殺すことができるのは、椿姫しかない」

「……そんな怖えー女神は、現れなくてもいいと思うんだー」

浅羽は乾いた笑いを漏らした。

「海鶴。もしもお前が私達と共に来てくれるというのなら。海鶴の力が必要なんだ。お前の力は未知数だと思う。御魂鎮めは神を長い間眠りにつかせることができる。より強力な封印が完成する。荒れ狂う神を海鶴の力で抑え封印する……。そうすれば巫女が命を落とすことも減ると思う。多くの同志たちのためにも、お前が必要だ」

海鶴は、頷いた。自分を頼ってくれているものがある。それはあまりにも新鮮な感覚だった。

### 旅は道ずれ世は情け(3)

山の起伏が少なくなり、開けた平野が目の前に広がった。春京には平野が少ないため、こういう風景は珍しい。山に囲まれていない土地は、開放感があった。ここはもう、海鶴の知る場所ではない。それだけで胸の動悸を抑えられなかった。

燈火は、ここは樂秋らくしゅうという里であると教えてくれた。どうやら、ここに立ち寄るらしい。先導をきって走る紅が何も言わずに、そこへまっしぐらに向かっているからだ。しかし、この紅という男、本当に無駄なことは一切言わない。笑わない。面白くない……。

ふくれつつらをしている隣の海鶴を見て、燈火が吹き出す。

「とても私より一つ下とは思えないな」

「悪かったわね、どうせ私はまだ子どもよ!! 燈火が老けてるんでしょ?」

燈火といると調子が狂う。春京では年上に囲まれて生活していたため、自分をどうすることでより可愛く賢く見せられるかということとを心得ていた。自分と同じ位の年の燈火に対してはどう接したら良いのか全くわからない。自分と同じくらいの年なのに、やけに大人びている燈火と比べると、まだ子どもであることが浮き彫りになって嫌だった。

何より、巫女修行していた私にとっては、同じ年頃の娘と遊んだ覚えがあまり無い。話も何をしたら良いのかわからず、調子が狂わされる。

「悪い悪い。あまりにも可愛らしいのでな」

「そうだよな、そう思うよな。可愛いんだよ、中身も容姿も。面白いだろ?」

浅羽が横に並んで口を挟む。頬が緩み、白い歯がこぼれた。笑われたことに対して、何故か傷つく自分に驚いた。

「可愛くなんてないってば！！ からかわないで！！」  
顔を真赤にしてむきになって言うと、燈火も浅羽も肩を震わせて笑っている。

そこまで笑わなくなっただけいいじゃないか。

「燈火、海鶴に話してくれましたか？」

紅から声をかけられて燈火が頭をかいた。

それにしても、紅はいつも唐突だ。相変わらにこりともしない。別におべっかつかって欲しいわけじゃないが、愛想笑いの一つくらい浮かべたっていいではないか。その身に纏う雰囲気はただでさえ冷たいのだから。

私がじつと二人を見ていたら、私の視線に気付いたのか、困ったように笑った。

「あー……言い忘れてたな。これから行くところは陰君がいる別邸だ。都からこつちに来ているらしいから、直接こつちに行こう。できれば私は会いたくないけど、そういうわけにはいかんだろうな」  
陰君とは国家の権力者であるということは先の会話から十分学んでいることである。私は不満げに頬を膨らました。

「何で私がそんな人に会わなきゃいけないのよ……」

「会いたいからだって」

燈火が肩をすくめた。よくあることだと鼻を鳴らす。

「そんな理由だけで神狩りの巫女を遣わせるなんてとんでもない奴だな」

浅羽がもつともな事を口にした。誰だっただけにそう思うだろう。巫女を担ごうと国中が動いている中、どうしてもその陰君だけ、巫女を大して重要でもない仕事をさせるのか。迎えに来させるなら、その辺の使い間でもなんでもよこせばいい。

「神狩りは国の最高権威の象徴だから？ そうでもないのさ。こんな時勢じゃなかったら、私達神狩りの巫女なんて所詮下女にされていたらうね。だって私らは他の人とは違う。神という化け物がいなかったら、化け物にされるのは私達のほうさ」

燈火は笑いながら答えた。自分のことを嘲るような笑みだった。

良くわかつている。彼女は自分のことを良くわかつている。

私だって、神狩りの巫女は神に背いた巫女が、墮落した巫女が選ばれるものだとずっと思っていた。神を狩るなんて、化け物以外の何者でもないと思う。

私も都についたら、好奇の目にさらされるのだろうか。姉がこういう思いを味わうはずだった。姉なら、耐えられただろうか。春京では周囲の尊敬を集めていた姉が、好奇の目にさらされるのは耐えられないだろう。私でよかった……。

今になって考えてみると、懐かしく思えてくる春京。兄弟達は、姉さんは、薫は今頃どうしているだろう。あの中にいた頃は嫌で嫌でたまらなかつたできの良い兄弟達も、離れてみればそれでも大きな存在であったことに気付く。

いつの間にか桜は散って、衣がびったり肌に吸い付く季節になった。青田が広がり、日は長くなった。

都がどこにあるか知らないが、随分時間をかけてきた。自分の知らない気候の、知らない土地に立っていることが信じられない。

私が姉の代わりに来て良かったんだか悪かったんだかわからないが、あのまま春京にいたら一生そのまま終わっていたことだろう。だから、良かったんだ。

私に弓道の手ほどきをした師匠だって、色んなものを見たほうが良い女性になれるとか言っていたではないか。……顔はもう覚えていないけど。

楽秋について真つ先に向かったのが陰君の屋敷だった。これでやっと馬から下りて、体をゆっくり休めることができると思いでいたら、そうではなかった。門はこちらですと言い、颯爽と紅が前を歩いていく。慌てて浅羽と共に前を行く二人を追いかけた。二人から離れると、迷子になってしまうのではないかという気さえした。

陰君という人物は相当な権力者らしい。ああそつだ、嫌というほどわかった。

先ほどからぐるぐる同じ景色を回っている。長い長い堀。終わりのないような道。都ならいざ知らず、こんな都の前の里にこれだけの敷地を持つているなんて。はいはい、権力を示したいのはわかったから、早く中に入れて欲しい。もう切実だから。私の足は棒だった。疲労困憊気味の浅羽の表情から、彼も同じだと思う。

陰君とはどんな人物なのだろう。勝手な想像だと、多分彼は中年のおっさんでかなり太っていて、体の肉が弛んでいる。そして髭を顎に蓄え、酒の池で肉をむさぼって遊んでいて、多くの巫女をはべらせていると思う、多分。肉欲と権力の権化のような人物だ。

紅の話では、陰君は私のことをとてもよく知っているらしい。

そんな中年の肉欲権力の権化のおっさんの知り合いなどいない。

「こんな山奥の姫を知ってるなんてな。よつぽど変な奴だな。里じや才能のかけらも無いとかいつも散々大巫女に言われてた海鶴を知ってるなんて……」

「浅羽、聞こえてるから。いくら本当のことでも言いたい放題言わないで下さい」

私は浅羽の後頭部を叩いた。浅羽は苦笑いを浮かべた。

先を歩く紅は、私達がきやあきやあ言い合ってなかなか進まないのを離れたところから燈火と並んで眺めていた。

「お二人がじゃれあっていてところを見ると、微笑ましいくらいですね」

「無表情で完全に棒読みのままいう言葉じゃないな、それは」

燈火は紅の横顔を見ながら呟いた。眉一つ動かさない男がそういうこと言うと、逆に怖い。それにどう考えても心の底からそんなこ

と思っっているように聞こえなかった。思っていることといっていることが一致していないのは誰が見てもわかる。この男は全く信用できない。信用できないものの近くについて、背を向けることが怖かった。だが紅は飛景が燈火にと護衛に付けた男だ。嫌でもなんでも後ろにいるときもあるし、ほとんど燈火の周りをうるちよろしている。「しかし、飛景さまの発掘癖にも困ったものですね。貴方といい、あの姫といい。才能のありそうな者をどこからともなく呼び寄せては自分の手駒にしてしまうのですから」

「私は飛景の手駒になったつもりなどないぞ」

紅は冷笑を浮かべた。その笑いに燈火はむっとし、紅をにらみつけた。今明らかに侮蔑された。雰囲気がそう物語っている。

「失礼、言葉のあやです。気になさらないで下さい」

「……。海鶴姫の才能は私も認めよう。焰の炎に焼き尽くされず、連れまで助けたのだろう？ 勾玉まで持っていたしな。あの青い光は……まさかな。ありえん。あれも勾玉の力の一部なのか。私の玉とはまた違う力を持った玉……か」

燈火の玉は人を守ることはできない。炎で神を傷つけることはできても、守ることは……。

「一人で何をごちゃごちゃ言っているんですか、早くあの二人をつれてきてください。着きました」

「お前は本当に、自分のことしか考えていないな……呆れるのを通り越して感心する」

燈火がぶつぶつ言いながらも二人を呼び寄せた。二人とも、疲れ果てていた。これで本当にやっと休めるとわかり、手放しに喜んでいたのは燈火も同じだった。燈火は非難の目で紅を見、恨みを込め、声をあげた。

「やっと休めるな、後であいつに死ねって言っといってくれ、紅。ついでにお前死ね」

「燈火、後で主によく伝えておきますね」

唯一疲れた様子を微塵も感じさせない紅が燈火の言葉をそのまま

受け流した。

私は少し緊張していた。

権力者に自分を売り込むのは兄が得意だった。特に、四番目の兄が。こんな日が来るとわかっていたら、もっと兄の話聞いておけばよかったと後悔した。

屋敷に入るなり、少し垢抜けた侍女が私と浅羽を奥の間に通した。通された間には、紫色が鮮やかな菖蒲がいけられていた。その空間には、とにかく必要最低限のものしか置かれていなかった。これが本当に最高権力者と同等の力を持ったものの屋敷かと思わず疑いたくなるような部屋だった。

そのうち、ここに案内してきた侍女がお膳を運んできた。暖かい飯を前に、二人で生唾を飲み込んだ。こんな飯は、春京でも目にした事が無い。今まで巫女修行をしていた私は基本的に肉は食べなかつたし、浅羽も自給自足の生活に限界があつた。久しぶりの誰かに作ってもらつた飯。とにかく、馬上の生活で疲れている体にとって最高のもてなしだった。

私と浅羽はその待遇のよさにうろたえていた。紅はどこかに行つてしまふし、燈火は『奴を呼んでくるからちよつと待ってる』といつて、内心小さくなつている二人を残して出て行つた。

私たちは自然と寄り添っていた。隣に自分以外の誰かがいることがこんなに心強いものだと思わなかつた。

疲れた……。どちらが言ったのかわからないが、二人とも同じ言葉を呟いた。お互い、背中にもたれかかりながら、背中のみくもりを感じながら目を閉じた。

旅は道ずれ世は情け(3) (後書き)

約80日間の更新途絶・・・まことに申し訳ありません。  
ゆっくりゆっくり更新していきます。気長にお付き合い下さい。

旅は道ずれ世は情け(4)

真赤な花びらが舞う。

神殺しの女神が舞うたびに。

ひとひら、ひらり。

どれだけ真紅の血に染められようとも

お前の輝きは決して失われないだろう

むしろ艶やかなその出で立ち

際立つ

見つけましたよ私の女神。貴方がこの世に再臨するのを、私はどれほど待っていたことか。

待っていた……。

気が狂うくらい、愛しい貴方。

神狩り

水面に写る貴方の驚いた顔。なんと愛らしく可憐なこと。水が私に教えました。

これが姫。

手に入れたいののは皆同じ。帝も 闇の主君も 神さえも 貴方を欲している。

昔、たった一人だけが持つことを許された力

女神にだけ許された 神を殺す力を

夕日が差し込み、部屋の中は茜色に染まっていた。ここについたときは真上にあつた日が、今は山の山頂から徐々に沈んでいく。

木の床が火照った肌に吸い付いて、その冷たさが気持ちよかった。二人でなだれ込むように眠っていてそれが気持ちよかった。今までずっと緊張の糸を張り詰めていたのが、ここで一気に緩んだらしい。「……ん……はう……」

海鶴は、『誰か』が浅羽の首筋に息を吹きかけ、気色悪い声を出すまで自分が眠っていたことなど知らなかった。

その気色悪い声に揺すり起こされて目を開くと、目の前に人の顔があった。普通に息するだけでそれが吹きかかる距離に。

驚いて声も出ない海鶴に『誰か』が微笑みかける。

「会いたかったよ、僕の大事な姫君」

さも自分のことを知っているかのような口ぶりに、海鶴は首をか

しげた。

「……誰ですか？」  
思い出せない。

でもどこかで見た気がする……。  
こつ見えても、物覚えの悪さは大巫女の折り紙付き、太鼓判を押されている。

だから、目の前の好青年が誰なのか全くわからなかった。

ただ、この様子だけ見ると、何か変態っぽいように思える。浅羽は首筋を押さえて青ざめた顔で彼を見ているし、海鶴は海鶴でどこか見たことありそうだけどどこだか覚えていない好青年に釘付けだった。

「そんなに可愛い顔で見つめられると……って本当に覚えてないんだね」

どちらかといえば、整った容姿の青年は海鶴の上で笑った。

「酷いなー、海鶴。手取り足取りあれこれ教えた仲じゃないか……」  
なんとなく意味深な言葉をさらっと吐いて、誰かが笑った。  
緩く癖の掛かった髪は、薄茶色。年は大体20歳前後の青年で、表情至つて穏やか。むしろ全てを包み込むような微笑さえ浮かべていそうな顔。囁く声は太すぎず、細すぎず、心地よい音色。海鶴の名前を呼ぶ声。

知っている。

この人……知っている。

きよとんとしている海鶴の顔を両手で包み込み、近い顔を更に近

づけてきた。この人、目悪いのかなとか呑気なことを考えていたが、鼓膜が破れそうなくらい大声で浅羽が叫んだ。

「ちよつと待てお前！！ 何なんだ、誰なんだ！！ 変態だよな、絶対」

彼と海鶴を無理やり引き離し、『誰か』をにらみつけた。

「あれ？ 妬いちやった？」

引き離されて、その場にお尻を着いた彼は、くすつと笑った。

長い回廊を歩く足音と、苛立った声が近づいてきた。

「おい、飛景ー？ 何でどこにもいないんだー」。

……人のこと散々使つといて、これだからあいつは本当に……  
おい、何してんだこのぼんくら」

燈火の目には、自分の捜し求めていた男に自分が連れてきた娘の肩を楽しそうに抱いている映像が写っていた。男は半目で笑っている。

それがまた、散々だだっ広い屋敷を探し回っていた燈火を苛つかせた。

「はい、燈火。僕のこと死ねつて言っただって？」

くすくすくすくす。笑ってんじゃねーぞ。という言葉で燈火は必死に抑えて言った。

「……陰君、いんのまき困ります勝手に動かされては……」

燈火はあふれ出そうな思いを必死に堪えた。こいつは一応自分の上司だ。こんなこと言っちゃいけない。いけないけども、ああ、確かにそうだった、だからすぐ死ね。今だ。

言葉からは怒りがあまり感じられずとも、燈火の目からは怒りの光線が出ていた。彼を見るその目は、今にも彼を殺しそうだった。

「まあそう怒らないでよ、ね？」

「誰のせいで怒ってると思ってるんだこの野郎……」

「三の巫女さまは短気なんだからなあ、もう。僕の悪戯心がわからないの？ ちょっと海鶴たちを驚かせたいなーなんて思ったりして」  
燈火は彼の胸倉をいきなり掴み、お互いの鼻が今にもくっつきそうなくらい引き寄せた。

「飛景、ふざけるのも大概にしる。私はお前の侍女でもなけりや奴婢でもないんだ。今度私にそこら辺の遣い間と同じようなことさせてみる。社会的にも身体的にも抹殺してやるからな、絶対に」

「そんなにすまなくても、もうそんなこと二度とさせないから大丈夫だよ」

燈火の手を簡単に払いのけて彼がふわっと笑った。

今凄く自然なしぐさで燈火の手を払ったが、燈火はかなり拳に力を入れていたように見えた。やっぱり男の力に女は勝てないということなのだろうか。

じーっと二人を見つめていたら、燈火が彼を堂々と指差して海鶴に言った。

「おい、海鶴。こいつが私の言っていた男だ。どうしようもない、ろくでなしでアホで最高に権力を持った羽根一族の長。陰君。こいつはお前を知っているとか抜かしてたが、お前、飛景を知っているのか？」

海鶴は飛景と呼ばれた青年を見てから、床に目を落とした。

見覚えはあった。結構小さい頃、この人と会ったことある。いや、もっと最近修行中にあつた気がする。

知っているかといわれれば、知っているのだろうけど、はっきり覚えてないから知らないということになるのか？

海鶴は考えて考えて、

「あー……うーん、はい」と答えた。

燈火がその場にこける。

「どっち!! はつきりしてくれよもう!!」  
「あ!!」  
「わかったのか!?!」  
「私の師匠でした。そして許婚で心の友です」

「えええええー!!」

今の海鶴の発言に、燈火と浅羽が素っ頓狂な声を上げた。飛景はとりあえず笑っているし、海鶴も照れて顔が赤くなっていた。そんな海鶴も可愛いぜ畜生とか思いながら、浅羽は思わず突っ込んでいた。

「どうしてそれですぐ思い出せないんだよ!! お前だけ物覚え悪いの!?!」

「すみません……時とともにすっかり忘れてました」  
時とともに忘れられるほど心の友は存在が薄かったんだな。でもちよつと待て、許婚って言わなかったか。言っただよな、言った。

心の声を通じたのか否かは不明だが、海鶴は飛景と浅羽を交互に見比べて、長い睫毛を伏せた。

「許婚ってというのはあの……そういう遊びに私が付き合わされて……」

「普通逆だろそれ。おかしいだろそれ!!」

「あははは」

飛景が呑気に笑っているのをみて身分も忘れて

「お前が笑うな!!」

とつつこんでいた浅羽だった。

「何歳年の差あると思ってるんだよ、犯罪者かお前は!!」

「えーと……10かな?」

「そこでまじめに答えるのかよ!!」

名前は飛景、年25。かなり危なそうな奴系として、浅羽の脳内にしっかり刷り込まれた。

「陰君ってどんな奴かと思えばこんなへらりへらりした奴で、こんな奴が本当に海鶴に何の用なんだよ、燈火」

いきなり話を振られた燈火は、既に半分その場から立ち去ろうとしていた。

「馬鹿馬鹿しい……。私はもう寝る!」

「あ、お休みー。いつもの部屋使っていいからねー。多分千夜<sup>ちや</sup>はもう寝てると思うけど」

「……………」

「あまりに自然に去っていく燈火に対して声も出せない少年であった」

「勝手に人の心を解読するな!!」

「さ、海鶴。今日は一緒に寝ようか、もちろん布団はもうひいてあるよ」

飛景は海鶴の肩を抱いて耳元で囁いた。

「おいおい、ちょっと待て!! 海鶴に手出ししたら……」

浅羽が海鶴と飛景を引き剥がそうとしたら、海鶴がぱっぱと飛景の手を振り払った。しかもすごく自然に。

「変わってませんね、師匠は。からかわないてくださいよもう。いい加減もう大人なんですから、しっかりしてください」

自分より10歳も年下の相手に言われるとなんかいたたまれない気がするが飛景は気にする様子はない。

「姫は厳しいなあー。でも、簡単になびかれたんじゃこっちもつま

らないし、

長い間待った甲斐があったね……」

海鶴の胸にかけられた蒼い勾玉を愛しそうに触れ、彼は呟いた。

最初に手に入れるのは、私。

最初に見つけたのも私。

これでやっと、願いが叶う。

旅は道ずれ世は情け(4) (後書き)

比較的早く更新できてよかったです笑

次回、長らく書いていませんでした。記憶喪失少年、薫側の話に移ります。そして時間が少しさかのぼるのでご注意を。

## 第2章 神の域(1) (前書き)

今回からまた薫視点に戻ります。海鶴は出番なし。話は少しさかのぼります。

神狩り

## 第2章 神の域（1）

知っていたら止められたのか。

崩れると知っていたら、支えられたのか。

水面に映った未来が見えたなら

死んでも彼女を止められただろうか。

生きていてはいけないというのなら、その理由を教えてください。

少年はどうしたら生きられるのかを。

過去を取り戻したくはないか？

そのような甘い言葉を囁かれ、手を取った。

誰の手を取ったんだ？ 誰が囁いたんだ？

それは私と誰かが答える。

彼女の手を離してまで掴みたいものではなかったはずなのに

オレハ ダレ？

神狩り

白い髪。緑色の目。禍々しさを思わせるこの姿。

どうして彼らと違うのでしょうか。

どうして彼女と違うのでしょうか。

それは貴方が魔性を秘めているから。貴方はこの世で最強の存在

どうして隠すのでしょうか？ 魔性の赤い目を

どうして恥らうのでしょうか？ その力を

むしろ誇りに思ってください。貴方のその美しい姿を。

血を求めるがいい、血に汚れるがいい

それでも貴方は美しい

\* \* \* \* \*

「帰りがこんなに簡単なら、来る時だってもっと早く来れたんじゃないのか？」

池から這い上がり、濡れた衣を絞りながら薫がぼやいた。

「仕方ないだろう。どの池に繋がっているかもわからないところにお前なら飛び込めるのか？」

龍邦が老婆を引き上げるのを手伝いながら言う。

神狩り

いや、むしろ池に飛び込んでそこが違う世界に繋がっていますなんてこと、普通考えないんじゃないか。

「ま、そりゃそうじゃの。普通に生活してきたもんにはわからんじやろつな」

「……お化けだ」

「誰がお化けじゃ!!」

龍邦に引き上げられた、しわくちゃのお化け……じゃなかった、葵上が持っていた杖で薫の頭を引っぱりたい。意外と強打の老婆の一撃で、頭がか割れるんじゃないかと思った。

「いいか薫。こちらからはどこに繋がるのかわからないが、あちらからだところらにつなぐことができるのじゃ。どという原理かわしも知らん。作つた奴に聞いてくれ」

「なんだよそれ。アンタが知らないんじゃ誰もわかるわけ無いだろ」

「アホか。それに、アンタじゃなくて、葵上か葵上様と呼べ!!」

わしはお前の数百倍の月日を過してきているのだぞ」

薫は、ああと頷いた。

「じゃあやつぱりお化けだろ？」

「何でそうなるんだ!! お前の頭は何でできてるんだ!? 薫か

!? 味噌か!？」

ぎゃははははと、自分よりちびな虎彦に笑われ、なんとなくむつとする。

「まあ、あながち間違っちゃいないと思うけどな。葵上は確かにお化けっぽいし腹黒だし皺だらけのば……」

背後から冷たい空気が流れてくるような気がして、薫は身震いした。

「おい、そのこの虎。こっちに来やれ。生がわ剥ぐなんてこと、絶対せんから」

振り向くとニコニコした可愛い老婆が、虎彦を手招きしている。

笑顔なんだけど、何か目が怖い。虎彦は恐怖に引きつった顔で鷹峰の後ろに隠れ、彼を前に押し出した。

「すみませんすみません、こいつなら煮るなり焼くなりしても結構

ですけど、こんなたいけな男の子にそんなことしないで下さい！

葵上は容赦なく、手に持っていた杖で虎彦の脳天を叩いた。

「男の子だと？ お前がそんな気色悪いこというな！！」

薫が怪訝そうな顔をしていると、龍邦が丁寧の説明してくれた。

「あいつは俺と同じ年だ。49歳」

薫は絶句した。こんなまじめそうな男が嘘をつくとも思えない、多分本当のことなんだろう。

ツくしゅー！！

くしゃみででた鼻水をすすりながら、薫はがたがた震えていた。

「なあ、なんか寒くないか？」

「当たり前じゃ。今は冬じゃぞ？ そんな薄着でしかも濡れたままの服では風邪を引くぞ」

「は？ だつて今、春じゃないのか？ 桜もちらほら咲き始めて、椿の花も咲いていただろ、春京で」

薫以外、その場にいる全員がため息をついた。

「そうか、知らなかったなそういえば。記憶無いんだっけ」

「仕方ないじゃろ。誰か薫に服貸してやってくれ……。お前だな虎彦。お前しばらく虎になつてろ」

「 だつたら早く鷹峰の家行こうぜ。あつたかいところから寒いところって結構きついんだよ」

薫はわけがわからない。

「いいか薫。ここは地上の神域なんだ。人間の住んでいる域とは時間時空を異としている。外より時間の進みが遅い。この一日は、向こうの三日に相当する。だから今は冬。わかった？そして向こうはもう三日経つてことだ」

龍邦が夕日を指して説明してくれた。こいつ、なんでこんなに面倒

見いいんだろつとどつでもいいことを考えていた。

「ここが神域。」

まだ寒さの厳しい空気。風が吹くたび、刺さるように肌を撫でていく。

真白な雪がそこらに残り、草木はまだ眠っているようだ。

神域、神の住む場所にも、ちゃんと気候があるということに薫は驚いていた。

鷹峰の屋敷は、かつて見たことが無いくらい大きな家だった。中に入ると暖かかった。囲炉裏にはもう薪がくべてあり、誰かが火を起こしたあとだった。

「まあ座れ。お前にも色々聞きたいことだってあるだろう。こっちの一方的な話ばかりじゃ申し訳ない」

葵上に勧められるがまま、薫は囲炉裏の近くに胡坐をかいた。

「そうだな、何から聞きたいんじゃない？ 何でも言ってみる」

「……そうだな、お前らの年だなりあえず」

「……………馬鹿だろお前」

聞きたいことなら沢山あった。むしろ沢山ありすぎて、何を聞いたらいいのかわからなかつたくらいだった。

ここにかつて自分はいたのだろうか。誰かと一緒に住んでいたのだろうか。

誰かって、誰なんだろう。自分が住んでいた家ってあるのだろうか

か。それに、自分の本当の名前ってあるのだろうか。

考えれば考えるほど、自分がなんなのかわからない。

『貴方、生きていてはいけないよ。だって、貴方に関わると、すべて……わ……され……うから』

誰だ、お前は。何を言っているんだ？

『いい、生きて、生きるのよ』

そんな言葉、言われたのか？

彼らは正反対の言葉を言っている。どっちが正しいのかわからない。

## 神狩り

「葵上様！！」ご帰還されましたか！？ 大変でございます！！」  
怒声が外から響いてきた。葵上は老人とは思えないほどすばやい動きで立ち上がり、縁側の木の戸を勢いよく開けた。他の者の顔も、

これまでに無いくらい厳しい表情をしている。  
「何があつた？」

男は、チラツと屋敷の中にいるものを見渡した。薫に目が行ったとき、彼は一瞬息を詰まらせ、大きく目を見開いた。

「月読……………様……………？」

信じられないという呟きが聞こえた。葵上が続きを話せと促したため、葵上へ向き直る。

「お疲れのところ、申し訳ございません。葵上様がお留守の間にちよつとした事件がございまして……………。実は、何者かが神域に侵入しました。外との境界を守っていた神が、何者かに惨殺されておりまして……………」

兵士らしき男が葵上に頭をたれる。

そのような報告を受けたというのに、葵上は特段焦るようなそぶりや、驚くようなそぶりは見せなかった。むしろ、そのようなことは予想の範疇であるといわんばかりの冷静な構えに、薫は目を見張っていた。

「そうか、報告ご苦労であつたな。その神はどのような殺され方をしていた？ 滅多なことでは死なぬ神が死んだのだ、よほどのことがあつたのであろう」

「それが……………わからないのです。葵上様のお力と龍邦殿の御高診にて究明していただきたいのです」

葵上は年老いたその体で、何の支えもなしにすくつと立ち上がった。龍邦も後に続く。

「わかつた、すぐ行こう。おい虎彦。薫を頼んだぞ」  
「任せてくれ」

神狩り

ただならぬ展開に、薫は啞然としていた。神域とはそんなに危ない世界なのか。

こんな危なそうな世界で自分が生きていた？  
とても信じがたいことだった。

それに、さっきのあの驚いた表情はなんだ。

「……月読？　それが俺？」

## 第2章 神の域（1）（後書き）

個人の都合上、更新は頻繁に行うことができません。

それでもお付き合いしていただけるといふ方々、本当にありがとうございます。  
ございます。

神狩りは不定期更新ですが、どうぞ見捨てずお付き合い下さい。  
酷評、感想など待っています。作者もやるきになると思っています。  
どうぞ叱咤してください。

次回も薰視点でお送りします。

神の域(2) (前書き)

あはははは。皆様お久しぶりでございます。

更新が滞っております。闇です。今回も薫の視点でお送りします。

海鶴ファンの方、しばらく我慢してください(笑)

## 神の域(2)

汝悪しき神なり

怒る声がする。震える声で、悲しみの籠った声で。それでも彼女の声は懐かしく響いていた。

「薫、お前はこつちだ！」

虎彦の怒鳴り声で、自分の世界にのめり込んでいた薫は一気に引き戻された。

何か言葉を発するより先に虎彦は薫の腕を掴み、否応なしに屋形の奥へ引つ張っていく。事情もよく飲み込めていないから、余計な不安が胸を過ぎった。誰かが殺害されたなんて温厚じゃない。

「お前はまだ何も知らねえし何も出来ねえ。……だからそんなに情けねえ面すんな」

虎彦はまるで心を見透すように薫の目を真直ぐ見てきた。読心術でも心得ているのか。それともそんなに不安が顔に出てただろうか。「だけど、俺にも何かできることってあるだろ？」

「お前は何もするな」  
即座に答えられ、少したじろいだ。いいな、と睨まれるように念を押され、ただはい、と答えるしかできなかった。虎彦が満足そうに頷く。

神狩り

屋形の奥に行くにつれ、人の気配が減っていった。

すれ違う人がほとんどいない。話し声さえ聞こえない。どうなっているんだろう、この屋形は。

まあ、奥の間ほど主人以外あまり人が行き来しない場なのであるうとなんとなく察しがつく。そんな場所に薫は連れて行かれようとしていることに少し戸惑いを感じ、鬱な気持と共に足取りもなんだかゆっくりになっていく。

「大丈夫だって。葵上と龍邦が行ってる。お前が首を突っ込むと余計ややこしくなるから、死因がわかるまで大人しくしててくれ……」

「それって、前の俺が関わるとややこしくしてたってことなのか？」

そのように聞こえた薫は、別に悪気があったわけではなく、純粋に虎彦に質問した。

虎彦は一瞬答えにつまり、口をつぐんだ。

「……ああ。まあ、そういうことになるのかな……？ だけど今回はそういう意味じゃねーよ。多分、な」

含みを持たせたもの言いに、少し気になるところはあったが、薫はそれ以上追及する気にはならなかった。自分のことを知りたいと思っ一方では、そんなに急に全て知ったら今までの記憶が全部嘘になっていくのではないかという恐怖もあった。

自分にとつての現実はこちらなのか、それとも春京で過した時間なのか。なんとも言えない。

「お前、変わったよな。俺の知ってるお前じゃない」  
虎彦が唐突に言った。

「それはいい意味で？ それとも 悪い意味？」  
「そりゃもちろん、いい意味だよ」

虎彦は肩をすくめた。彼の知る「薫」はよほどの男だったらしい。

虎彦は声を立てて笑っていた。

「そうやって周りの目を気にするようになったところなんて、昔のお前からじゃとても想像できない。柔らかくなったよ。俺、お前のお守りさせられてたからよーくわかるぜ。そりゃ、昔のお前は葵上でさえ困らせるような奴だったしな。美鈴も随分困っていたみたいだし……」

薫は眉をひそめた。今の言葉、一体どういう意味なんだろうか。心中少し複雑な思いだった。

「美鈴つてのは、もしかして俺が懇意にしていた女性のことなのか……？」

虎彦は開いた口がふさがらないらしく、口をパクパク動かして空気を吸っていた。

「もしかして……自分の巫女のこと覚えていないのか？」

「俺の巫女？ 何で俺に、俺専用の巫女がいるんだよ？ 別に神様つてわけじゃないんだから」

「な、何言ってるんだよ……。お前は神様だろうが。自分でもここに来る時認めてたじゃねえか……。俺は同属なのかってよ。本当にどうしちまったんだよ！ たったの数年だぞ？ 向こうじゃ八年か。それなのに、本当に全部忘れたのか？」

虎彦が笑いながら、明るい声を出した。薫が黙っていると、その笑顔が徐々に固くなっていく。

すぎるような目で虎彦が無言で何かを問ってきた。その瞳があまりにも切なくて、薫は胸が締め付けられる思いで、そのまま首を縦に振った。

「何か覚えていることは一つもないのか？ あの日、お前がここから逃れていったことも忘れたのか……」

「 ああ 」

これしか答えようがない自分が情けなかった。

「本当に、これが俺達が探してきた男か。俺、何のためにあの日以来神域を出て、八年間もお前を探したのか本当にわかんなくなっちゃまったよ……。お前が戻れば全部終わるとか思ってたけどさ。

でも、ま仕方ないよな。記憶がないとは聞いていたけど。まさか美鈴まで忘れているとはさ。思わなかったから」

多分、彼らは薫に何かをかけていた。神が生き残るため。何かを必死に守るため。そのために戦ってきたのだろう。こうして幾度となく神域に侵入されながらも、何度も何度も。

その都度思ってきたことは、きっと 自分という存在があるということ。

それが、簡単に崩れ去った？

あまりに切ない現実。覚えていないという虚しさ。

「そんな今にも泣きそうな面の月読を拝める日がくるとはな……。いやー、記憶ないほうが良かったのかもな」

虎彦は薫の顔をみて吹き出し、おどけて言ってみせた。

「何せお前は、どんな神からも愛されてたけど、どんな神からも最も恐れられてた男だからな」

虎彦はあははと笑った。そこで笑われると、どう反応していいかわからなかったが、よいことを言われているわけではないということだけはわかった。

「来いよ。葵上が帰ってきたら、お前のごと話してやるから」

はははと笑いながら、虎彦は足取りの重くなっていた薫をずるずる引きずっていった。

## 神の域(2) (後書き)

またしばらく更新できないと思います。それでもお付き合いしてくださっている皆様、ありがとうございます。貴方は神様でございます。

もしよろしければ感想など下さい。闇の励みになりますので。

断章 どころの庭（前書き）

こんなところにこれを入れるのはかなり無理やりかな（笑  
そのうち話の順番を入れ替えるかもしれない（馬鹿）

神狩り

## 断章 どころの庭

桜の花びらが風に吹かれるたび散っていった。葉桜といっても過言ではなくなってしまうた木は、哀愁を帯びているように見える。

彼女の趣向で、庭には桜の花しか植えられていなかった。桜以外の花は、花と認めたくないらしい。

意外と殺風景な庭なのに、目前に建てられた屋敷だけは優雅なものだった。磨きぬかれた床は彼女が廊下を歩きたびにきゅきゅと音を鳴らす。漆黒の天井に彫刻されたのは天に昇る龍。これも彼女の趣味だった。

いつものように白い砂地に跪き、彼は言葉を待っていた。緩い癖っ毛に散っていった桜が張り付いても気にしない。

いくらそれなりの地位がある彼でも、屋敷の中には決して足を踏み入れられないことになっていた。彼女との契約により。

ここは彼女の聖地である。ここに入ることを許されるのは、彼女が気に入ったもののみ。別に自分が嫌われているとは思っていないが、彼女はかなり用心深かった。

『巫女を見つけたとき、面白いものを見つけたのだ』

喉の奥からこみ上げる笑い声を抑えるような声だった。彼女の鈴をこころがしたような声が、もう一度響く。顔を上げなくても、彼女が今日は上機嫌であることは察しがついた。

『面をあげよ。いつまでもそう堅苦しくそなたが頭をたれているところを見ると気持ち悪い』

声に少し不機嫌さが滲んだ。彼は苦笑して、頭を上げた。闇の中で、白い衣に緋色の袴を履いた少女がたたずんでいた。

『この世の終焉の証。赤い瞳の。それが巫女と共にあった。実におかしな組み合わせだったよ』

彼女が暗闇の中で、もう一度笑った。外からでは彼女の表情はわからない。ただやはり機嫌は今までにないほど良いらしい。

『巫女も勾玉も我が手に堕ちた……。だが、あれが存在する限り、私達に勝ち目はない。そうだったな？』

彼女は自分の長い髪を人差し指でくるくる巻きながら呟いた。その髪はまだあどけない彼女には似つかわれない白髪だ。

それは彼に対する問いなのか、それとも独り言なのか。彼にとってはどっちでも良いことだった。彼は微笑んだ。

『ならば、消してしまえばよいか……。あれはどうも覚えていないらしい。だからあれほど避けていた巫女と一緒にいたのだろう』

傷一つ無い透명한肌が、スツと朱に染まる。彼女は興奮するとすぐ体に現れる。嬉しそうに上気した頬。

含みを持たせた笑い。

彼女の楽しそうな口調。鈴の音のような声には似つかわしくない言葉。

とてもそのような残酷な言葉をつむぎだすとは思えない、ぷつくりとした赤い唇。

白髪は彼女の背の丈より長く、歩くたびに彼女がそれを引きずる。愛らしいと形容するのがしっくりくる。誰にきいても、彼女は10歳ぐらいだと口をそろえて言うことだろう。なのに中身はまるで……。

その容姿に似つかわしくない、人を威圧する風格が滲み、くりくりした瞳は、野心に満ちた光が灯っている。彼女の纏う雰囲気は、高貴で妖艶な大人の女性そのものだ。

どれもこれも、あどけなさの残る顔に似つかわしくない。

『こちらの鏡池を使えば、奴らより早く神域に入れる。そなた、行ってくれるな?』

彼女は自分の背後にずっと控えていた娘に話を振った。娘は明らかに、自分より幼いようにしか見えぬ相手に畏怖畏敬の念を抱いているようだった。控えている時も、終始娘は萎縮していた。その場の雰囲気在必死に耐えている姿は、あまりにも異質で滑稽だった。

娘は緊張した面持ちで、黙って頷く。

『いいこだ』

ずっと目を細め、彼女は娘　二の巫女を見つめた。自分の首にかけられた紫色の勾玉を指で撫でながら……。

断章 どころかの庭（後書き）

次こそまた薫の話に戻りますよ！

神狩り

神の域(3) (前書き)

わー今回、なんか最初からグロくてすみません。血やら死体やら、苦手な方ご注意ください……。

神狩り

### 神の域(3)

葵上は、龍邦を伴い神域の境目に来ていた。

辺りは燦然さんぜんとした空気に包まれ、みな無言でその場に立ち尽くしている。葵上と龍邦も無言でそれに近づき、全身にかけられていた白い布を剥ぎ取る。思わず目を背けたくなるような様相だったが、彼らに動揺は見られない。

蒼白な顔。四肢に浮かんだ、紅い斑……。死者である兆候。既に硬直が始まっていたそれ。

既に冷たくなっている体に触れ、龍邦が首を横に振った。そして一言、外傷はない、と小さく呟く。

吐息は白く、呼吸をするたびにつんとした寒気が肺に入りこんできて痛い。だが、彼は 既に死んだ神は、もっと辛かっただろうと、その姿を見ただけで思う。

「特に争った形跡などありませんでした。体中の穴という穴から血が噴水のように吹き出し、突然倒れ、そのまま即死……」

状況を淡々と説明する、彼の仲間。

目、耳、鼻、口……。確かに顔面の穴という穴から血が吹き出ている。死亡してから時間が経っているのか、血液は黒ずみ、凝固していた。死体の周りには血溜まりができており、全身の血が流れてしまったのではないかと疑うくらいだ。

死んだという神は、確かにどこにも外傷は見当たらなかった。ならば、どうやって殺されたのか。

葵上が知る限りでは、神を殺す方法は限られている。地の神はその回復力と再生力の高さゆえ、胴と頭を切断でもしない限り、即死は免れる。

さすがに全身の血が流れ出るような出血量であれば徐々に衰弱し死亡、又は即死するだろう。

しかし、『人』に比べればそれでも頑丈である。それゆえ、彼らは人から神と呼ばれる。長寿であり、ほとんど怪我で死ぬことなどない。

「龍邦、どう思う？」

「これだけの量の吐血から、臓器の損傷が激しいように思います。特に腸の辺り。そして顔面からの出血も激しいので……何らかの原因で頭蓋内圧が上昇、血管の破裂……、それによる出血ではありませんか？ 直接の死因は、今のところなんとも言えませんね」「そうじゃな……」

原因として考えられることの一つは、特殊なる毒殺。

いくら身体が頑丈とはいえ、体の内側から腐ってはいけません。こともできない。それも、そんじょそこらの毒ではない。猛毒中の猛毒。体内に入ただけで即死するような毒だ。

そして、葵上が知る限りでは……その毒は一つしかない。

女神の血……。彼女の血液そのものが、神にとっては猛毒。

即死の毒……。その血は甘美なる香りを発するが、一口でも飲めば即死亡。体の内側から、破裂していく。細胞は死滅し、一度死滅したらもう二度と再生も回復もされない。その純粹なる血に耐え切れる者は限られている。

まさか、神殺しが直接ここへ乗り込んできたのか。

葵上は少しうつむいて考え込んだ。だとすれば、それは少し穏便ではない。

それならば……なぜ彼女は皆殺しにしなかったのだろうか。不自然だ。何故神域を守る神のみを殺した。それはここに、侵入し何かを成し遂げなければならなかったから……か。

それにそれはありえない。なぜなら、彼女は今、高天原で眠りについているのだから……。

もし彼女が転生しているか、もしくはどこかの巫女に降りていれば別だが、それはありえることなのだろうか……。許すはずがない。天照が。彼女は……嚴重に監視されている。そうやすやすと抜け出すことはできない。神殺しは無駄な犠牲を払いすぎた。いくら命令を受けていたからとはいえ、多くの仲間を惨殺した罪が許される日は、気が遠くなるほどずっと先のはずだ。

なら、彼女自身がここに在るといふ可能性は限りなく低い。それなら……心当たりなら一つ。

「羽の水……」

「葵上……心当たりがおありで？」

腕を組み、その場で唸る葵上に、龍邦は遠慮がちに声をかけた。

「まあ、な……。お前、このように神が死ぬところを見たことがあるか？」

龍邦は考えるまもなく即答した。

「ありません。このような症例は初めてです」  
葵上は一人虚空に向かって笑いを浮かべた。

（昔馴染みが牙を剥いたか……。それとも、奴には関係ないのか……。一つの可能性として、奴が絡んでいると考えてもよいじゃろっな）

「体を開かなければ確認できないことがいくつかあります。……よろしいですか？」

葵上は苦虫を噛み潰したような表情を浮かべた。

「ああ、好きにしる。わしは帰らせてもらうぞ。血なまぐさいのはどうも……な」

その言葉と、葵上の表情を見た龍邦は意味ありげに口の端を上げた。

「葵上からそのようなお言葉が出てくるとは」

「わしは平和主義者じゃからな」

葵上は肩を竦め、忍び笑いをもらし、踵を返した。

「なあ、聞いてもいいか？」

薫は前を無言で歩く小柄な男に声をかけたが、彼は全く反応を示さなかった。

神狩り

「おい、聞いてるかチビすけ」

「……………」

「チビチビチビチビーチビオヤジー」

子猫でも呼ぶかのような勢いで、舌を鳴らして見せても、この大きな子猫はなかなか振り向いてはくれなかった。もともと、虎級の大きさの子猫には通用するはずもないだろう。

「あつそ……。無視する気がよ……。チビのくせに」

薫は口を尖らせた。頬も膨らましてみようかと思っただが、これは意外と難しかったのであきらめた。そういえば、よく海鶴は頬をあんなに上手く膨らませることができると感心してしまう。今ここで感心することではないかもしれないが、今度会ったら……。すごいなと言いたい。

「……さつきから黙って聞いてりやチビチビ連呼しやがって。うるさいからちよつと黙ってる。それと俺はチビオヤジじゃねーよ！何だチビオヤジって。ちつちやいおっさんだからって馬鹿にするなよ」

遂に虎彦が後ろを振り返った。顔が幼いせいかなんなのか、睨まれたというのに全く怖くない。自分よりも年上のはずなのに迫力も特になかった。

「いや、馬鹿にしてないけど……。おっさんだから、もつと実年齢と合った容姿のほうがいいんじゃないか、ちつさんなりに」

「何だ、ちつさんって！ちつちやいおっさんの略か？」

「ああ、よくわかったな……」

薫は素直に驚いた。まさかわかるわけがないよなと思っていたのだ。

## 神狩り

「なあ、怒らないから正直に教えてくれよ。別に怒っていたとか、苛立っていたからちつさんと呼んだわけじゃないんだ、虎彦」

薫は、その身に僅かに冷気を滲ませて微笑んだ。虎彦を薫の碧色

の双眸が捉える。

「お前もしかして、迷ったのか？」

薫と虎彦は鷹峰の屋形の奥を真っ直ぐ歩いてきた。このままいけば、誰が歩いたって屋形の最深部、一番奥の部屋、もうそれ以上は何もない場所へたどり着くはずだ。なのに、何故か彼らはどこをどうやってきたのか、入り組んだ廊下を前にしていた。そしていくつもの通路を背にし、分岐点に立っていた。目的地がどこなのか薫にはわからない。が、これはちょっとおかしいと思った。

左側からは冷気がするし、右側からは熱気がする。どちらの通路、どの間を選んでもよくないような気がする。

「だ、大丈夫だって……。任せろって。あはははは」

虎彦が顔を引きつらせて、明後日の方向へ笑っているのを見ると、任せてなどいられないと正直思う薫だった。薫はため息をつき、仕方ないなと呟いた。

「こういうときは、己の感性に頼るしかないんだよ」

「え？ ええーっても……。お前の感性に頼るのはちょっと不安なんだけどなあーあはは」

「大丈夫だ。ちっさんに任せるよりはきつとましだからな」

薫は何故か自信の塊のような笑みを浮かべ、迷わず左へ歩き出した。

「あー……。なるほどー。感性……。ね。たいした感性もってるじゃねーか」

後ろで皮肉そうに虎彦が笑った。薫はそれを別に気にするわけでもなく、ただ自分が選んだ道を突き進んでいった。

くすくすくす……。  
くすくすくすくす……。

歩くたび、一歩ずつ進むたび、鈴をころがすような笑い声が聞こえた。

最初は空耳かと思ったが、そうではないようだ。

『迷子だって』

『主さまが迷子だって』

幼い少女のような、あどけない少年のような、どちらともいえない澄んだ声が聞こえてきた。

『助けてあげなくてよいのですか？』

『よいのですか』

その声には悪意は籠っていないようだ。ただ、純粹に楽しんでいる。薫と虎彦が彷徨う様を楽しんでいるように聞こえる声。

『自力でたどり着くでしょう』

『だって、ここは主さまのお屋形だもの……』

囁きあう声は楽しそうだ。主の帰還を喜んでいるのか、それとも退屈しのぎの会話なのかはわからない。ただ声は囁きあう。

## 神狩り

「薫ー、どうしてこっちの道を選んだんだ……？」

いつの間にか、薫と立場が逆転した虎彦は、薫の袖をしつかり掴んで密着したまま後を着いてくる。どうりで動きづらかったわけだ、と呆れて呟いてみたが、虎彦からの返事はない。

「どうしてって、俺の感性……心がこつちだと言ったから」

「そうか……そうだよな。俺はこんな場所知らないけど、ここは確かにお前とば……葵上しかこれない場所だったわ、うん」

ぶるつと肩を震わせ、虎彦がぎゅつと薫の袖を握りなおした。

「俺達の屋形は繋がってる。鷹峰と龍邦。葵上と月の屋形。それに俺のも……。一番奥の屋形……それはお前の屋形。お前と葵上以外足を踏み入れる度胸のある神はいね……。一番謎に包まれた屋形だぞ？ お前があーなってこーなって以来は、葵上と美鈴さえ足を踏み入れなかったんだぞ？ 冗談きついぜ、薫」

今にも泣き出しそうな虎彦を、半ば引きずるように薫は奥へと進んでいった。

くすくすくす……。

お帰りなさいませ、主さま……。

### 神の域(3) (後書き)

次回も薫の話が続きます。葵上による語りが満載かと。いよいよ薫の過去の核心に徐々に迫って参りました。

……そして更新はもう少し先になると思います。申し訳ありません。遅くて遅くてすみません。

神の域(4) (前書き)

葵上の語りとか予告しておきながら。何故かあまり出てこなかった。

神狩り

## 神の域（4）

記憶は確かになかった……。

だが、体が覚えている。

ただ一箇所を目指して歩いている。

……懐かしい、この回廊。

薫は何故自分が迷わず今歩いているのか、不思議でならなかった。だが、知っているのだ。確かにここを知っている。

先ほどから鼻をくすぐるような甘い香りがする。

花の甘い蜜のような香り……。

交わるように聞こえる声。はるかな高みから己を見下ろすような  
忍び笑い。

『おかえりなさいませ、主さま』

『主さま』

鈴の音をこころがしたような囁き声たち。

自分を主と呼ぶ何者かわからない者たち。

神狩り

今、薫はここを一人で歩いていた。……正確には二人だが。虎彦

はほとんどおまけみたいなものだ。虎彦の方が、よくこの屋形を知っているはずなのに、何故か記憶のおぼろげな者が先を歩いているという、この異様な状態。

この通路、白く磨かれた、冷たい通路を歩くのは辛い。一歩ずつ進むたびに、足に枷がついたように重くなっていく気がする。どうしてだろう、後ろに虎彦の体温を感じるとわかっていても、何故か寂しい。

あの時は…… どのときか知らないが 隣に誰かがいたのだ。多分、その時は、もっと暖かくて、こんなに寂しいとは思わなかった。

誰だ。

瞬間的に、薫の脳裏に見たことのない、だけどこか懐かしさを感じさせる女性の姿がよぎった。

微かに花の甘い香りを漂わせた、小柄で、雪のように白い肌の女性……。漆黒の髪は肩で切りそろえられていた。彼女はそっと薫の手を握り締め、その手を引いてここを何度か往復した。

だからかもしれない。花の甘い香りがこちらに微かに残っているのは。もう何年も経っているはずだから、そんなことはありえないはずだが。

月の屋形。

神狩り

確かここはそう呼ばれていた……。

「どこからどこまでが屋形と屋形の堺なんだ？」

薫は未だ自分にしがみつくと虎彦に尋ねた。

「えーと。そうだな……。一応屋形は渡り廊下で区切られていて。渡るたびに違う屋形へ行かれたはずだ。だけど……。月の屋形への行き方は俺はよく知らん。適当に歩いてれば着くとかなんとか聞いたような気がする」

（ そんな適当な作りなわけあるかよ ）

薫の疑惑の視線に気付いたのか、虎彦が一言付け加えた。

「お前がそうしたんだよ。近寄って欲しくないって感じだったからな」

「ふーん……」

今まで白く冷たい石畳だった床が、うって変わって少し温かみのある木目のある床に変わる。それでも周囲は冷たいままだった。

白く磨かれた石でできた柱。同じように白い壁。蜘蛛の巣ひとつ在るわけでもなく、床の底が抜けているわけでもない。

「虎彦……屋形の先には一体何が在るんだ？」

何気なくこの質問をしたわけだが、虎彦は明らかに動揺していた。

声は上ずり、額から冷や汗を滲ませ、あたふたとしている。そんな様子も面白いなと思いつつ、薫は虎彦の答えを待った。

「そりゃあ、アレだよん。お前、なんていうか……。こーい……。えーだから……」

「全然説明になってないぞ」

「だーってすっぱー言いにくいっ……」

そうこう言い合っているうちに、二人はいつの間にか、一際大きな間の目前に来ていた。

その扉は、壁や柱が白一色で統一を図っている中、黒く染められ

たその様子がいらぬ存在感をかもし出していった。いかにも、ここが一番奥なんですと言わんばかりの誇張された間。誰が考えて作ったんだか知らないが、もうちょっと配色を考えてもいいのではないかと、二人とも言葉には出さなかったが感じていた。

ここまでの道は確かに冷気がしていたが、この間の前でのそれは半端ではない。

即座に薫も虎彦も、絶対自分からは行きたくないと思った。

「……はいどうぞ」

「いやいや。ここは年功序列つてことで……」

「馬鹿お前。そしたらお前が先だな絶対。いろんな意味で」

「ここはだな、俺の家かもしれないけど、お前の家でもあるんだ。要は虎彦。お前が先に行くべきだ」

「馬鹿いえ。もしこれで死んだらどうするんだ。……逝くならお前独りで逝ってくれ。お供えぐらいはしてやるから。それともアレか。このまま引き返そう。今ならきつとまだ戻れる気がする」

そうだ。こんなに入りたくないと思っただけなのに、どうして早く引き返さなかったのだろう。薫は自分でも疑問だった。だが、わかっている。自分の過去を知る手がかかりだ、これは。これほど甘い誘惑に勝てるはずがないではないか。

薫は、ゆっくり頭を振った。できないことだ。引き返せない。ここに立った時点で、既に足枷が鎖でしっかりつながれたのだから。

お入りなさい。

醜い譲り合いをしている中、扉の置くから清々しい女性の声が響いた。それと同時に扉が自然に開かれる。それも少し不気味にぎぎ

いいという、何かを引つかいたような音をたてるものだから、余計に入る気がつける。

一瞬、虎彦が顔を引きつらせ、それから三步後退りしたのち、くるつと背を向けた。

「嘘だろ嘘だろ……何でだろ……。おかしくねえ？　ありえないよな？」

ぶつぶつ言っている虎彦を無視し、薫は奥へと進んだ。

この先にあるものを知りたいという好奇心の方が今の薫の心を大幅に占めていた。

そこに踏み入った瞬間、薫は呼吸が止まった。

目の前が真赤になり、めまいがしてきた。立っているのも結構つらい。なんだ、ここは。

『当たり前でしょう、主さま。ここは貴方の根城ですもの』

『ここは貴方を縛る場ですもの』

『ここは……貴方を鎮めるための場ですもの』

「お前達は、何者だ」

いや、違う……。その質問は正しくないかもしれない。薫という存在は何者だ、という質問が適切なのだろう。

くすくすくす……。。

呻く薫の姿を見て、四方から、また姿なき声が鈴をこころがしたように笑う。

「……………さつきから、少し黙っていられないのか。本当にうるさいやつらめ。だから鬱陶しいのだ、この屋形はのう」

それは呟きに似た言葉だった。先ほど、薫達に入れと命じた者と同じ声だ。低くもなく、高くもない、凜とした響きを持つ声。その声に、それまでざわめきを絶やさなかった声がぴたっと止まった。

彼女は、その間の中央に寝そべっていた。上体を起こすと、長い髪が肩に流れ落ちた。

足先まで伸ばされた豊かな藍色の髪。一見、黒髪のように見えるのだが、光に透けたその髪は、よく見るとそうではないことがわかる。

白い肌は、寒さで僅かに赤らみ、柔らかそうな頬が紅色に染まっていた。彼女は身体に掛けられた桃色の衣を手繰り寄せるようにして起き上がった。二人の顔を微笑みながら見上げる切れ長の双眸。目のふちいっぱいまである瞳は黒く輝き、聡明な光を宿していた。ふつくらとした唇が、弓なりに引きあがる。思わずため息が漏れそうな、美しい女性。

……………何故か虎彦はその姿を確認できた瞬間、その場に凍り付いてしまった。

「おお、来たか。待ちくたびれたぞ」

そういつて鼻を鳴らし、片眉を上げる女性。

誰か知らないが、待たせたのか。いや……………勝手に待ってる方が悪いだろつ。

「あ、ああ、ああああ……………いい……………え？ ど、どどどつて……………」

何故か酷くうろたえている虎彦を不思議に思いながらも、薫は女性の顔を凝視した。この女性からも、花の香りがする。ただし、通路でかいだものとは違う香りだ……。

「お？　もしかして、私が誰なのかわからんのか？　こんな美女、そうそういないじゃろう。わかるじゃろ？」

虎彦が何故かすかさず何かを口から吐き出すまねをした。

「美女……自分で言っちゃうんだもんねー。この婆さんは……」

「虎彦、なんじゃと？」

自称美女は虎彦を冷たい目で見遣った。

「いやー、なんでもありませんよー、葵上様」

「……………」

「ほらみる婆あー！！　薫が絶句してるぞー！！　やっぱり無理があるんだよその姿には」

「ふむ……ちと刺激的すぎたじゃろうか？　私の魅力の前に倒れん野郎はおらんからのう」

自称美女　葵上は腰に手を当て、体をくねらせて見せた。魅惑的な動きだが、虎彦の顔は何故か青い。

「そつだな！　ある意味！」

「……………嘘だよな？」

「嘘などではないわ。これが葵の花の化身たる、我が本来の姿」

長い髪を掻き揚げ、胸をそり返して答える葵上と、呆然とそれを凝視する薫。

「花びらのように美しく、茎のようにしなやかな私に見惚れたのか？ ダメじゃぞ。年下は守備範囲ではない」

ふふんと鼻で笑っている葵上に、もはや何も言うことができない。虎彦はボソツと顔を背けて呟いた。

「枯葉のようにしわくちゃの、の間違いですよね？ 葵上様」

葵上は虎彦を容赦なくにらみつけた。美人が睨むと、迫力が増す気がするのは何故だろうか。

「お前も少し黙っている、虎彦。それとあとで絶対私の屋敷へ来い。私はここにつれて来いとは言わなかったはずじゃぞ？」

「わ、わかつたぜもつ。んじゃ俺はここから出て行くから。」

後は二人でゆっくり昔話でもしてろ！！」

虎彦は、ばーかと言い捨てて走り去っていった。

「奴のことは放っておけ。大丈夫じゃ、迷っても鷹峰辺りが拾ってくれるじゃろ」

何を、とはあえて聞かなかった。そういつている葵上の顔があまりにも楽しげで、歪んでいたから。

格子から、僅かに月明かりが差し込んでいた。もう夜だ。どれくらい彷徨ってここにたどり着いたのかわからないが、かなりの時間彷徨っていたのだろう。

「さてと。お前の聞きたかったことを聞こうか。私とお前だけの秘密も色々ある。他のものがいてはつきり言って面倒……。偶然か必然か、お前がここに来てくれたことをありがたく思う」

薫は眉をひそめた。

「ここは不快だ。出よう」

「無理じゃの。ここはお前を縛る。お前を静める。狂い月となったお前を、ここにいる巫女達が静め、他の者に危害を加えないよう縛り付ける場。巫女が良いと判断するまで出られぬわ。ここにいる巫女達は、お前の歴代の巫女。今の巫女はわけあって、ここにおらん」

薫は周囲を見渡してみたが、人影は一つも見当たらない。

「どこにいるんだよ……その巫女とやらは」

「もうこの世におらん。彼女らは精神体としてここでお前を鎮めておる」

手と足が重い。完全に力が抜けている。これでは、立ち上がることも難しいだろう。瞼を持ち上げるのも辛い。体に鉛をくくりつけられているようだ。

「どうして今の巫女がない……？」

何とか声が出た。

「……お前を逃がすためだ」

葵上が耳元で囁いた。

「どづいうことだ……」

葵上は悠然と微笑んだ。生唾を思わず飲み込んでしまうような微笑。

「教えてやろう、薫。ほんの数年……私達にとっては瞬きに等しい時間のはずなのに、何故かこんなにも苦勞して……お前を探すことになるとは思わなんだ……」

貴方に思い出させてあげる。

「お前の巫女　美鈴のことも、お前が何で在るかも。だがわかって  
いるのだろうか？　あの時、ここに帰ってきたとき、お前を見て神  
がなんと言っただか覚えてるか？」  
「ああ……」

くすくす……。

主さま　月読様。

## 神の域(4) (後書き)

やったー更新結構早くできた。  
きつと方向がそれていかなければ、次から過去話本格始動です。

神の域(5)(前書き)

皆様、いかがお過ごしでしょうか。体調は崩されていないでしょうか。

つと、前置きはこれくらいにして。

えーと。前の話をお忘れの方。ご安心下さい今回完全に過去話です  
んで。あーバックしていかないで下さい!!

葵上から過去話を聞かされていた薫。遂に自分の真実を知ることになる!?

## 神の域（5）

昔、高天原を追放されて、闇の世界に降り立った。姉とは袂を分かち、夜と昼に世界が割れた。

「お前の今の巫女の名は、美鈴といってな……」

葵上が歌うように囁いて、薫はつられて瞼を閉じた。丁度いい、もう目を開けているのに疲れてきたところだ。

葵上の声が、低く優しく響いて心地よかった。これではまるで子守唄だ……。

「お願いします、どうか無茶はしないで下さい……」

目をつぶりかけていた月読に、女が切なそうに囁く。優しく、憂いて。殺戮の神にこのような情を向けるのは、おそらく巫女である彼女くらいなものだったろう。

「……余計な心配をするな」

いつでももぶつきらぼう。たとえそのものが本心から心配していても、自分の為に心を砕いていようがお構いなし。そのものがどうなるかが知ったことではないという男。巫女さえ己の道具でしかなかった。それが月読。

え、どれだけ非情な男なんだって？

それはもう、月読の通る道には何も残らないくらい、月読は破壊の快楽者だ。そう睨むな。本当のことだぞ。疑ってるのか。

そう　あの日、月読は一の巫女を暗殺しに出向いたのだ。

覚えているか。覚えていないだろうな。

一の巫女を殺すことができれば、ほぼ我々の勝利も確定するはず

だった。一の巫女、神狩りの巫女の中で、もつとも神格の高い神を封印できる巫女。誰もその姿を見たことがない。かく言う私も、何百年と生きながらえていながら、その姿は知らぬ。困ったことに、彼女に暗殺者を差し向けたとしても、全て返り討ちにされてしまうのが現状だった。誰もその正体を知りえない、そんな相手に月読は挑んでいった。

昔から無茶なことしかしなかったな、月読は。私達がいくらやめておけといっても、頭に血の上ったお前には聞かなかつた。よつぽど仲間が消されたことが悔しかったのか、それともただ退屈していたのか。私にはわからない。気ちがいの考えることだ。

月読は鏡池を自由につなげることが出来る唯一の神だった。鏡池を一の巫女の元へつないだお前は、そのまま彼女の館へ乗り込んだのだ。

そして、何があつたのか良くわからないが、力を半分にそれが、姿は幼子に換えられた。月読に説明を求めようにも、自身も全く状況を把握できない状態。何を聞いても怯えた目で周囲を見渡すばかり。あの何をも恐れぬ目をした最強月読は、このとき既に失われていたのだろう。

赤い瞳は力を失って碧の双眸に変わっていた。常に月読の周囲に漂っていた殺気は薄れ、無力な姿がそこにはあつた。力だけではなく、体も精神も全て、弱体化させられたお前には、巫女の力がどうしても必要だった。

そのまま放置しても良かったのだが、月読に死なれては困る。月読の力は全部滅ぼす力だが、いなくなつたらいなくなつたで、均衡というやつが崩れるのだからな。

お前の失われた力を補うため、お前を守るために今代巫女、美鈴はお前を最初から育てることになった。美鈴の神力を月読に与え、お前は何とか生きてきた。

「通り名（仮の名前のこと）を考えましょう、忌み名（まことの名前のこと）を呼ぶのはやめます」

美鈴が私を射るように見つめてきた。このとき彼女は重大な決断をしたのだ。お前を守るため。

「月読の存在を弱めるか……。そうすることで、一の巫女から月読の存在を一時的に隠すのか」

名は呼べば呼ぶほど、人の存在を強くさせる。月読と呼び続ければ、月読の存在は強まってしまう。月読を一時的に捨て、新たな名をつけることを、美鈴は決断した。月読は、そんなことは知らず、美鈴の隣で無邪気に遊んでいた。

「我が主に名前を付けることになるなんて……」

美鈴は俯いて、唇をかみ締めていた。拳を震わせて、隣で遊ぶ月読を見ていた。

「わたくしにできることは、それくらいしかありません」

「名は、決めたのか？」

私が美鈴に尋ねると、彼女はにこっと微笑んだ。

「はい……。その、もしわたくしに子どもが生まれたら名づけようと思っていた名前なのです。その子が男でも、女でもね」

優しく微笑んで、彼女は呟いた。

「薫」

月読は美鈴を見上げた。そして繰り返しその言葉を不思議そうに呟いていた。

「かお？」

「そうよ、薫。今日から、貴方さまの名前は薫。ほら、もう一度……」

「か、お、る」

今思い出すだけでも微笑ましい光景だったな、あれは。なんていうか親子だな。

薫なんて女につけるような名だろう。美鈴は感性のずれた女だったからな。仕方ない。  
そんな怖い顔をするなよ。怨むなら、その名前を考え出した美鈴を怨むんだな。

とにかく、その日から月読は、薫として生きることになった。

幼児と化したお前は、扱うのが以前より明らかに容易になった。皆、近寄りがたいと思っていたのだろうな、容姿が幼くなった途端、郷の女が我先に世話をしたいと押しかけてきた。

性格は冷徹非道で、破壊快楽者だったが、黙ってればそれなりに麗しき容姿だったから……。それまで散々お前を避けていたのにな。私以外は。

まあ仕方ない、お前のまとう空気は、人を容易に寄せ付けない。ああ、それは春京でも同じだったか。あの巫女は、その空気を跳ね除けてお前に近づいてきたか。たいしたものじゃないか。

へえ。そうでもない、女によく囲まれて困った、だと。  
それは。よかったじゃないか。まあ、私にはそれも海鶴姫のおかげにしか思えないけどな。おい、顔が赤いぞ。何だお前、そんな可愛らしいところもあったのか。

お前は、虎彦、龍邦、鷹峰、そして私……。この里の皆のもの、全員の手によって守られて、育てられてきた。

虎彦はお前の子守をしてくれた。  
龍邦はお前が病気になったとき、一睡もせず側に付き添ってくれた。

鷹峰は、お前のおしめを変えてくれた。

美鈴は……。いつもお前を見守ってくれた。お前の手を引いて、お前を月の屋形から連れ出した。

お前のかつての名を呼ぶものはいなくなり、お前も自分の名に何の疑問も持たなかった。

お前が春京で体験してきた時間全てを否定するつもりはない。だがそれ以上に、お前はここで生きてきた。何年も、何十年も。

月読が姉と袂を分かち、昼の居場所を地上に求めた時から。天月という里を作り出し、世の悪を破壊するという使命を天帝より賜ってから。

お前は人に対しての、いや、道はずした者に対しての断罪者だった。それがお前の快樂のためであっても、そうではなくても……。それゆえ、月読という神の存在は、道はずした者にとっては邪魔。

皇族も一の巫女も、力を失った月読をそのまま野放しにしておくような輩やかいではない。

どこまでも執拗に追いかけてきた。まあ、追いかけてきたのは、正確に言えば彼女の集めた巫女達だったが。その執念は拍手を賞賛を送ってもいいくらいだ。

その日は新月だった。どこでかぎつけたのかわからないが、星さえ浮かばぬ闇夜の中、一の巫女は大勢の巫女を引き連れてやってきた……。

里のものは巫女により何人が捕らえられ、圧倒的に不利な状況に立たされていた。

私達は、薫だけでも逃がそうと考え、鏡池へ集まっていた。

一の巫女の狙いは、月読の命。そしてもう一つ……。私達が守ら

なければならぬもの……。

鏡池の道は美鈴が開き、あとは薫と美鈴をどこかわからぬ場所へ送り出すだけだった。まだ精神的にも身体的にも幼いお前を一人逃がすのは心もとなかった。美鈴は状況をいまいち良くわかっておらんかったお前の手を引いて、鏡池の前に立った。無邪気にお前は笑う。どうしてそんな怖い顔をするのかと問う。

その場にいる、誰も答えられない。

お前だけは、守らなければならない。ここでお前が消されては、我々はもう成す術がなかった。私も年老いたものだ。かつて鬼を震え上がらせていた私が、巫女相手にできることといったら……。彼女らに屈しないことだけ。

そのときだった。

「初めまして、葵上。久しいな、美鈴」

鈴をころがしたような声が私の背中へ向けられた。私は眼を見張った。この葵上の背後を取ったものなど、かつて数えるほどしかいなかったのだがその相手が彼女。

どこからどう見ても、彼女は年端の行かぬ子どもにしか見えない。白髪を引きずり、小首をかしげる仕草は可愛らしいが、放たれた殺気が彼女の愛らしさを否定する。瞳は金色に輝いていた。

「一の巫女……」

「ああ、美鈴。どうして前のように私の名を呼ばないのだ？ 戻っておいで。お前は優秀な神狩りであったではないか……。それが、月読にたぶらかされて。遂にお前は戻ってこなかったな？」

「一の巫女。過去のことは忘れてください」

美鈴は一の巫女をはっきり拒絶した。一の巫女は花びらのような唇を歪めた。

「わらわを拒絶するのか？ 帝を……拒絶すると？」

「……」

美鈴は黙って俯いた。心が揺らいでいるのが、私には手に取るようにわかった。

一の巫女は、まあいい、と呟いて美鈴を通り越した先を見据えた。

一の巫女の視線の先には、美鈴の背後に隠された薫の姿があった。まるで蛇が獲物を狙うような目つきに、私は背筋がぞっとしたよ。

「ああ、何て忌々しいのだろう。無垢なフリをした狂気の神。神狩りの巫女を次々と殺戮して、挙句の果てに手籠めにして 何食わぬ顔でわらわの前に姿を現した」

白百合のように可憐な姿であり、声は鈴をころがしたよう。だが紡がれる言葉は 。

「だが手に入れてみたい。その力を。圧倒的な破壊力 それが人ではなく、神に向けられたらどうなるだろうな!？」

一の巫女の首には、紫色の勾玉がかけられていた。彼女の声の抑揚に合わせて輝きを強めていく。

「やさかにのまがたま八尺瓊勾玉……!!」

「わらわに屈しないものには情け容赦なく頭を潰しているところだが、お前は別だ。美鈴。一度わらわを裏切っても、許すよ。可愛い美鈴」

一の巫女は優雅に微笑んだ。はたから見れば、慈愛の言葉に、慈愛のにじみ出るような笑み。何て可愛らしいのだろうと思う。内面のどろどろとした黒さを知らなければ、の話だが。

美鈴の膝は笑っていた。立っているのもやっとなはらずだ。それでも薫をかばうように大地を踏みしめていた。

「ねえ美鈴。大人しく月読と一緒にこっちに来て？ 何もしないから」

少女の楽しげな声が夜空にこだまする。白い髪が暗闇で浮き彫りになり、金色の瞳が人懐っこく笑みを浮かべる。白い手を差し伸べ、一歩一歩と私達に近づいた。美鈴は首を横に振りながら、後退する。一の巫女が美鈴の腕を掴んだ。小さな手は振り払おうと思えば振り払えただろう。それができない何かが、一の巫女にはあった。「それだけではできません……！ たとえ殺されても！」

そこからは、一瞬のことであつたのだろう。だが今でも私の脳裏には、その光景が焼きついている。ゆっくりと、こま送りで動く映像。

美鈴は、薫を鏡池に突き飛ばした。  
口元は笑みを浮かべていた。

「生きて、下さい……。貴方は生きて……」  
ずっと、お慕いしております……。

「それが答えか？ 美鈴……」  
一の巫女が美鈴の顔に手をかざすと、美鈴はそのまま気を失ってしまった。彼女は冷たく美鈴を見下ろし、そのまま彼女を暗闇へと引きずっていったのだった。

正直、呆気に取られた。その場から言葉どおり姿を消した彼女に。このように簡単に引き下がるとは思わなかったよ。

一の巫女は、この里で守られてきた白銀玉の存在を知っていたはずだ。だからそれも狙っているのだと思った。その潔さが、不気味だった。

葵上は長いため息をついた。聞いている薫も疲れたが、話す葵上も疲れたのだろう。

「一の巫女……その名は白藍<sup>しろあいら</sup>。神狩り最強の巫女」

葵上は、険しい表情でその名を呟いた。薫は、話を聞くうちにふつふつと湧き上がってきた怒りをどこにぶつけることもできなかった。

薫の瞳は、暗闇の中で赤く輝いていた。

## 神の域(5) (後書き)

はい、どうも。更新が亀より遅い間です。次回、第五章【刺客】スタート。(多分)まだまだ薫さんのパートは続きます。素敵読者様から、「薫はいるだけでシリ阿斯、温度がマイナス10度くらい下がりますね」という言葉をいただきました。え、そうでしょうか。どうなんでしょう!??

### 第3章 刺客（前書き）

物語の展開が相変わらずゆっくりな闇です。薫視点はまだまだ続きます。第五章、刺客スタートです。

### 第3章 刺客

白き勾玉を持つものは、誰でも癒すことができるという。  
その勾玉をつかうことができるのは、心優しきもの。  
その勾玉を手にするのができるのは、神に愛されたもの。  
その勾玉を輝かせるのは。

生暖かい風が、頬を撫でた。

花の香りがする。昨日の夜、どこかでかいだ香りだ。女の香り。  
よく見知った少女のものとは違う甘ったるい香り。

どこかふわふわした気分で、彼は薄っすら目を開けた。

「おはよう、あ・な・た」

「うわああああ!!」

薫が目を開けると、そこには葵上の顔が拡大されて映っていた。  
長い睫毛は伏せられて、恥らうように頬を染める葵上。時折、薫の  
顔を見上げては切なげにため息をつく。

よく見れば、男女が情事の後で絡みあっているように見えなくも  
ない構図。葵上は何故か半裸に近い恰好だ。着物がはだけ、生々し  
い真白な足がのぞく。見たくもないけど、肩と胸の露出で谷間がは  
つきり見えている。そして薫は気付いた。自分も半裸に近いような  
状況で、かなりの肌蹴はだけようであることに。

「葵上……!!」

どうしてここにと叫んで、薫は思い切り後退りした。葵上がつま  
らなそうに唇を尖らせ、はっと白い息を吐いた。

「なんだ、昨晚あれほど激しい行為をしておきながら、その態度は  
男として少々冷たいのではないか？」

葵上は長い藍色の髪を掻き揚げ、豊かな胸を揺らした。つい先日までは婆の姿であっただけに、どうもその姿がちくはぐなものしか思えない。

「何をわけのわからないことを……。俺と葵上の間に関わったとでも言うのか！」

しかし明らかに薫は動揺していた。額から汗が滲んでいたし、視線も定まらず、空間を泳いでいる。薫は気付かなかった一瞬、葵上の表情が悪意に満ちる。

「ああ、思い出すだけでも身もだえしそつだ。お前は私を押し倒し、全身を嘗め回すように見つめて私の衣を一枚剥く」

葵上が頬に手を添えてはにkind笑みを浮かべた。次々とその口から出る言葉に薄ら寒さを感じて、薫は言葉をさえぎるように叫んだ。

「ああああーもういい。どこから沸いてきた、その妄想。嘘だ、明らかに嘘だ。俺はあの後力尽きて目を閉じたはずだ」

「なんだ、覚えているのだな。まあ、半分当たり、半分はずれなわけだが……」

意味深な言葉をさらつと吐き出した葵上の顔を凝視して、薫はその場に固まった。

「まだ何かあるのか……」

「ああ、教えてやらぬ。自分で思い出せ。そのほうが、後で面白いからな」

「葵上、性悪だな……」

葵上は悪戯つぼく笑い、薫を見上げた。

「そんなこと、今更気付いたのか？ 私は人が困ったりするところを観るのが大好きなんだよ。退屈しない」

葵上は、桃色の羽織を着て、立ち上がった。艶やかな藍色の髪が背中を流れ落ちる。ふわつと香る甘い花の匂いが鼻腔に残った。これが彼女の体臭だと知ったのは、もつとずっと後のこと。

……彼女が今までどういうつもりで老人の姿でいたのかわからな

いが、認めよう。葵上は美人だ。

そういえば、葵上に聞きたいことが沢山あった。殺された神は結局、どうなったのだろう。誰が殺したのだろう……。一の巫女の話聞いて、もしかしてまた彼女が乗り込んできたのではないかと。とめどなくそんなことばかりが薫の頭に浮かんできた。そもそも白藍は、神を殺すことができるのだろうか。

葵上は一言も、白藍が仲間を殺した、とは言っていない……。確か、封印するという言葉を使っていたはずだ。封印と殺しは、同義語ではないのだろう。

葵上も他の奴も、神が殺されたと聞いたあの時、一瞬ただならぬ雰囲気を感じてた。ありえないことだというような、緊迫した雰囲気。だから自分は奥の間に連れて行かれた。

だから……？

どうして奥の間にいく必要があったんだ。

そうしなければならぬ理由が『月読』にはあったのか。

色々聞きたいことはある。何かを訴えるように彼女の後姿を凝視した。葵上はそれに気付いているのか、いないのか、首を横に向けた。ただだった。

「さあ、行くぞ」

どこに、と薫が尋ねると、彼女は口の端を少し上げた。

葵上に導かれて、複雑な回廊をどれくらい曲がったのだろうか。

目の前にある今にも崩れそうな東屋に、入れと促され薫は戸惑っていた。ここに一体何があるのか知らないが、ぼろぼろの注連縄や戸口に何枚も貼られた札を見ると、なんとなく入りたくない。いかにも何かに呪われていそう。それともよほど重要なものがしまわれているのか。葵上は緊張の面持ちで、札を慎重に剥がし続けている。

「お前に渡したいものがある」

葵上は改まった顔で薫に向き合った。つられて薫の顔つきも真剣

になる。

「なんだよ、渡したいものって。……恋文なら断るぞ」

「ばか者。このような神聖な場所で。大体なんで私からの恋文を断るのじゃ。失礼ぞ」

何かを探していた葵上はその手を止め、振り返って頬を膨らませた。

しばらくして、埃を被った桐の箱を手に乗せた葵上が目の前に現れた。心なしか、安堵した表情に見えるのは気のせいではないだろう。どうせ、ずっとここには立ち入っていないかった為に探し物がどこに行っただか忘れて焦っていたのだらう。絶対そうだと薫は確信した。

「良かったな、探し物が見付かって」

「ああ、耄碌もろくしてる婆と聞こえるのはどうしてじゃ？」

「そう言ったからな」

「そうかもしれないな。というわけじゃ。これはお前にもっていて欲しい」

葵上が投げてよこした箱を受け取り、不思議そうにそれを眺めた。

「何が入ってるんだ？」

「……この世を白紙に戻せるもの」

ふざけているのかなんなのか、葵上は笑って答えた。そして、一瞬鋭く薫を見据え、低く囁いた。

「それを絶対誰にも渡すな。たとえ、お前が愛した女でも」

入った扉とは別の扉から出て行き、通路に出た。何処かの屋形の通路に通じていることに驚いた。どれだけ広いのだろう。

良くわからないが、どうやら外る通路に出られたらしい。目の前に湿った木の扉があり、葵上はその前で立ち止まった。

扉を開けると、冬の太陽の光と冷たい空気が顔に直撃した。白い地面の粉雪が舞い上がって、光を反射する。眩しさに思わず目を細めた。

真白な景色に目をちかちかさせながらしばらく歩いた。不意に、葵上が薫の袖を引いた。振り返ると上目づかいでこつちをみていた。「懐かしいか？」

「どうしてそんなことを聞くんだ？ 覚えてないって言ってるだろ」葵上が寂しそうに笑う。その顔を見て、薫は狼狽していた。今言葉の選び方を間違えたのか。でも今の場合、何といえればよかったのだ。不意にしおらしくなって、一人感傷に浸って。葵上はずるい。勝手に心の中で焦っている薫を尻目に、葵上は言葉を続けた。

「そうだったな……。のう、薫よ。冬は好きか？」

「……どつちかっていうと、好きじゃないな」

冬はいい思い出より嫌な思い出の方が多いから……。海鶴は冬が嫌いだったから。

「そうか。……実は私もだ」

「それは、葵上が花だからか。アレだろ、冬は花って枯れるからなだから婆なのか」

彼女の華奢な肩が震えた。何が起こっているのか全くわかっていない薫は、成すすべなくその光景を見守っていた。

「……………ふっ！」

葵上は、腹を抱えて笑い出した。あまりの突拍子もない答えに、笑いを堪えられなかった。

「さあ、待地くたびれているだろうから、そろそろ行くかの」

息も絶え絶えに言い、葵上が先を歩き出した。

眩しさに目も慣れてきて、やっと周囲全体の状況がつかめた。目の前に朱色の門がそびえ立っている。門の上には二つの人影があり、薫と葵上を見下ろしているようだった。近づくと、彼らは、門番であることがわかった。彼らは、何度も目を瞬いていた。

「月読様……………」

「帰ってきたというのは本当だったのですか……………」

「おい、ものめずらしいのはわかるがな、早く開門せよ」

腰に手を当て、葵上が呆れたようにため息をついた。

「はっ、申し訳ありません！……お帰りなさいませ、月読様」

懐かしそうに、彼らは目を細める。労わりの念をこめたその言葉。こんな異形の容姿でも、彼らは何の疑問も持たずに受け入れてくれる。そう思うだけで、嬉しい。

重い門が、軋み音をたててゆっくりと開かれた。

そして、白い空間に響く怒涛の歓声。

……何だ、この人ばかりは。幾つもの視線が自分に向けられている。何かを切望するように。何かを期待するように。

薫は熱気に包まれた大衆を見渡した。光に反射して、白銀の髪が輝く。寒気の風は無造作に流れる髪がまぶしい。碧色の瞳と、彼らの熱いまなざしがぶつかり合う。そこから感じられるのは何かに怯えた目。期待の裏にある、恐怖、畏怖の念。

「びびってるのか、薫」

「どうして俺がびびらなきゃならないんだよ」

びびっちゃいないが、見知らぬ土地に来て熱烈歓迎されたら、戸惑ったりたじろぐのが普通だと思うのは自分だけだろうか。

「それではもう少し堂々としている。お前は天下の月読様だぞ？」  
爽やかに笑って、葵上はバシバシ背中を叩いてきた。その馬鹿力に薫は顔をしかめた。

「誰もが自分と同じだと思ふなよ、葵上……」

「なんじゃ、私がさも凶太い神経のように言いおつて。こんなもんな、笑顔で手を振るか、真剣な顔で片手を上げるか」とけばいいんじゃない。絶対喜ぶぞ」

とか、ほとんど口を動かさずことなく葵上が言い、笑顔で民衆に手を振った。その途端、悲鳴のような歓声上がる。彼女は一步下がって、薫の背中をさりげなく前に押し出した。薫はやけくそになつて、左腕を高く上げた。一際歓声が大きくなる。

「月読！」

「お帰りなさい!!」  
後ろで腕組みしながら、葵上が笑った。

「ほら、みる」  
突然、背筋に悪寒が走った。刺さるような冷たい視線が、何処かから浴びせられたのだ。この熱気を帯びた羨望にも近い目の中、冷やかな悪意の籠った目は際立つ。殺気にも似た悪意。誰かにそんな目で見られている。

緊張の面持ちでその場に立ち竦んでいると、前方から白い花が投げ込まれてきた。それまでの殺気がそれと同時に消えた。薫は花を反射的に受け取り、腕に抱きしめた。花の飛んできた方向を見ると、小柄な女が柔らかな微笑んで、自分を見上げている。薫が首をかしげると、彼女は顔に満面の笑みを浮かべた。彼女もかつての知り合いの一人なのだろうか。葵上を振り返っても、彼女はその女に目もとめなかった。目で周囲を見渡しているだけだ。何かを探しているようだ。もう放っておく、薫は心の中で大きなため息をついた。

彼女の目は不思議な色をしていた。茶色い瞳に時々光が差し込むと、青く輝いて見えるのだ。今まで、そんな不思議な現象を見たことがなかった……。

「あれが月読……」  
人込みにまぎれて呟かれたその言葉は、誰の耳にも入っていないかった。

### 第3章 刺客【瞳の色は…】

「うちのこと、覚えておへん？」

彼女の茶色の瞳に光が差すたび、青く輝いた。

まずい。あれだけ葵上に一人にはなるなといわれていたのに、この状況。

大体あれだ。何でこんなところに人が出現するんだ。

二人しかいない雪原で、薫は見知らぬ女に襲われていた……。

「うちに気付いてくれたんやな？」

嬉しそうに笑いながら、知らない女が話しかけてきた。茶色の人懐っこい瞳に、薫の呆気に取りられた顔が映っていた。

「……確か、花を投げた人」

「はい！」

彼女の明るい声が、屋形に響いた。

薫は、葵上と一緒に鷹峰の屋形に来ていた。相変わらず、神を殺害した犯人はわからず、厳戒態勢は続いていた。どこに行くにも常に誰かと一緒にでなければ出られない。

虎彦と龍邦も一緒に、薫を迎えに来た皆がそろっていた。丁度、夕食をとっていた頃だ。彼女が突然入ってきたのは。

他のものは特に彼女をとがめるわけでもなく、気にする風でもない。ごく自然に、アレとって、これとって。ご飯をよそってくれ、茶をくれたのなんだの。用事を彼女に言いつけたり言いつけなかったり。そんなだから、鷹峰の屋形の侍女か何かだろうと思っていた。それがまさか、正面きって自分に話しかけてくるとは思いもしなか

った。

「俺の知り合いか？」

「お花をまさか受け取って下はるとは思うとりませんでした……おおきに」

女は薫の問いかけを完全に受け流して満面の笑みを浮かべた。薫は戸惑いつつも素直に頭を下げる。

「はあ、こちらこそありがとうございます……それである」

「おかわりくれ」

虎彦が空の器を差し出し、にこにこしながら彼女はそれを受け取った。

「はいただいま」

言いかけた薫の言葉は消え、伸ばされた手は虚しく空を掴むだけだった。

こげ茶色の髪を一つに束ね、白い前掛けをかけてくるくるよく動く彼女を見て、薫は感心した。きっと、いいお嫁さんになるだろう。自分ももらうわけじゃないがそう思う。

「なんじゃ、薫。萌葱が気になるのか？」

「ああ、萌葱というのか。あの人」

薫が呟くのを見て、ご飯をよそってもらうのを待っている虎彦が鼻で笑った。

「あいつは駄目だぞ、薫。玉碎するぞ」

「いや別にそういうことを考えているわけじゃなくて……」

ただ、彼女は自分の知り合いなのかなんのかを知りたかっただけなのだ。虎彦は薫の話に聞く耳持たなかった。薫が萌葱に好意を持ったものと受け取ったらしく、ニヤニヤして脇腹を小突いてきた。ちよつとそれがうざったいなと思った薫だった。

「お話がかねがね伺ってりました。初めてお目にかかります、薫様。噂とは大分違う印象を受けたので驚きました」

「そりゃどうも……」

一体彼女がどういう印象をもっていたのか良くわからないが、な

んとなく良くない印象だったのだろうなと察した。そうか、しかも初対面だったのか。知り合いつてわけではない人物にここに来て初めて会った気がする。

「月下香、気に入っていただけましたやろか？」

「あの白い花は大事に飾ってあるけど……」

月下香というのか。甘くて良い香りがする。ただ不思議なことに、夜の間しか咲かず、夜明けに花を閉じてしまう。綺麗な花なのに、夜明けになると残念だった。

あの香りは、月の屋形の回廊に漂う香りと同じだった。足元から官能を呼び覚ます香り……。どこか快楽を伴った香り……。

「よかった」

萌葱は薫の言葉を聞き、ほっとため息をついてから満面の笑みを浮かべた。

「月下香がお好きだと聞いて、もろうたんです」

確かに、嫌いではない。あの花も、香りも。ただ、自分の記憶がないのに、周りの人間が自分の好みを知っていて、それを彼女に教えるということが、何だか変な感じがした。一体誰が薫の好みを萌葱に教えたのかとか、誰にもらったのかとか、薫の一瞬の疑問は次の瞬間吹き飛んだ。

「しかし月下香はこの時期に咲いていないはずだが……」

「心優しい女性の方がうちに分けてくださいました」

ずっと黙秘権を使っていた鷹峰がここで初めて口を開いた。彼は萌葱をきつと睨みつけ、萌葱はおっとりそれを見返した。彼は

「あまり知らない者から色々もらったりするな。何があるかわからないだろうが」

きつい鷹峰の口調にも特に怯えもせず動じもせず、微笑みさえ浮かべて萌葱は言葉を返した。

「それは申し訳ありませんでしたな。せやけど、うちの知らない者がほとんどですよ、この里は」

「確かにそつだが……」

鷹峰は低く唸った。最後何かをぶつぶつ呟いたが、何を言いたかったのか聞こえなかった。苦笑いを浮かべつつそのやり取りを客観視していた葵上が立ち上がった。

「そう攻めるなよ。鷹峰。お前ただでさえ目つきがきついんだ。そう鋭く睨まれては、いくら妻といえども怯えてもう近寄ってきてはくれぬぞ？」

「はあ……申し訳ありません」

「もっといつてやって下さい、葵上。本当に変なところで心配性なんです。もううちの人ったら、娘の前ではでれでれしてるのに、近所の寄り合いで娘の話が出ると急につんとして！ 帰ってきてから『家の娘は絶対他所にはやらん……』ってぶつぶつずっと呟いとるんです。どこの馬の骨ともしれない奴にひっかかったら大変やって……」

萌葱の口からは、次から次へと鷹峰のことが語られ、誰かが止めない限り到底終わるようには思えなかった。

「いや、本当もう勘弁してくれないか……」

鷹峰の背中が段々小さくなっていく。首まで真っ赤にして、情けない声を出し頭を下げる鷹峰を複雑な思いで見つめる薫だった。

鷹峰が所帯持ち。しかも妻がこんなに可愛らしくて小柄な人。意外だとしか言いようがない。目を瞬いていたら、鷹峰がぶすつとしてそっぽ向いてしまった。

「え、何その子どもみたいな態度。いつも冷たい気取った奴が、女の前だとそんな感じになっちゃうのか」

「ええ、そうなんです薫様。困った人やる？ どうぞ末長くよろしくお願いしますね」

「あ、ああ……」

何か、妻の言葉としてはそぐわないような、お前は鷹峰の母親かと思うようなことを言って頭を下げられて、薫は苦笑いを浮かべた。「それにな、天月（てんげつ）に外部の者が入るなどということ、余程のことがない限りないであろう。そうびりびりするなよ」

「……葵上様、どちらへ？」

桃色の衣を羽織り、広間に背を向けた葵上に龍邦が声をかけた。

葵上は首だけ捻って答えた。

「腹もいっぱいになった、少し休む。薫、行くぞ」

「あ、ああ」

白藍率いる神狩りの巫女が攻めてきたことは、よつぼどのことだったということだろうか。外部との接点といえば、鏡池だつてあるし、こんなところ入ろうと思えば簡単に入れてしまつような気がする。

そんな薫の心中を読むように、葵上は悠然と微笑んだ。

「鏡池を他の空間とつなげることができるものは、そういない。白藍は特別だつたのだ。鏡池を使う意外の侵入は難しいだろう。つと、その前に天月自体、外から人間が見つけるのは難しい。神の域は人の域と空間のずれによって普通は見えぬはずだから」

薫は適当に相槌を打った。

「まあ、それを潜り抜けて侵入してきたのだ。私も呑気にしていらねなくなってきたか……。良いか薫。知らぬ者が話しかけてきても絶対近寄るなよ。何が起こるかわからん」

「無茶なことを言うなよ。ここじゃ、俺の知らない奴の方が多いんだぞ……」

「とにかく、絶対一人になるな。先ほども言つておいたが誰かと常に一緒にいる。外に出るときは特にだぞ。私がない時は萌葱でもだれでもよい。とにかく、寄るな、触るな、一人になるなだ。狙いが何かわからぬ以上、お前を一人にしておくことはできん」

葵上は真剣な面持ちで薫の両肩を揺すつた。その眼光があまりにも鋭すぎて、……なんか怖い。

「俺が狙いかもしれないつてことか？」

「それはわからぬな。お前もいなくて、私も留守だつた。そこを狙つて誰かが入つてきた。なんなのかわからんわ。一番問題なのは今

回殺害に使われていたものが、あの水であるということ」

葵上は低く唸った。

「あの水ってなんだよ……」

「お前もよく知る【羽の水】じゃ。影の王にしてやられたのを覚えておらんのか？」

「いや、もう少し俺にもわかるように話してくれ。話が全く読めないぞ」

葵上は、はっとしてそれから一瞬気まずそうな表情を浮かべた。

「すまんの……。つい、な。羽の水とは神さえ殺す猛毒じゃ。口に含めば、体の内側から破裂して穴という穴から血が噴出し死ぬ。羽根一族が神殺しの血の成分を元に作り出した究極の毒……」

「どうしてそこまでして月詠を消したがるんだ、神狩りってやつらは」

「それは、お前が神狩りの邪魔を散々してきたからだろうな」

「一体どんな人生を送ってきたんだ、俺……。そこまで巫女から怨まれてる俺って……」

落ち込む薫に葵上は更に追い討ちをかけた。

「殺戮快楽者だと自ら公言していたぞ。使命のためというよりも、自分の楽しみのために巫女を殺すとかな」

「……最低じゃないか。屑みたいな奴じゃないか……!!」

「だが安心しろ。それを言っていたのは赤いほうの奴で、碧い方の奴は結構穏便な冷たさだったのう」

葵上は片目をつぶってみせた。だがそんなもの、励ましにもなんにもならない。

「というわけで、羽の水について少し調べたいことがある。ちょっとお前新月の間に行って大人しくしてくれぬか」

新月の間は、歴代巫女が月詠を鎮める間だ。あそこにいくと体が重くなり、具合悪くなりそうでいきたくなかった。薫はあからさまに眉をひそめ、口をへの字に曲げた。

「嫌なら、その辺の散歩でもしているがよい。今は明るいし、刺客

といえどもおおつぴらに動けんだろう。虎彦とか、暇そうな奴にでも声をかける。一人には、なるなよ？」

口元に笑みを湛え、葵上は踵かかとをかえた。

一人取り残された薫は、新雪の上をわざわざ選んで足跡をつけながら歩き出した。海鶴とよくやったことだ。あの頃は随分幼かった。成人した今でもこんなことをやってしまっなんて、こどもっぽくて可笑しかった。

行き先は特に決めてない。ただなんとなく、真白な道に自分の足跡をつけて歩く。

そんなことをしていたから……。多分彼女に遭遇したのだろう。

ドンッと鈍い音を立てて、薫の胸にぶつかってきたのは線の細い少女だった。

「きゃッ」

「悪い、大丈夫か？」

正面から勢いよくぶつかりその場に尻もちをついた彼女に、薫は手を差し出した。彼女は、顔を見られたくないのか、俯いたまま後退りする。彼女は尻を余程強く打ったのか、起き上がろうとしない。沈黙が二人を包む。

薫は困って頭を掻いた。白銀の髪が揺れる。葵上には誰にも関わると、一人でいるなど言われたばかりだったのに。このまま放つといていいものだろうか。自分のせいで起きれなくなったとか言われたら嫌だった。

「……！」

少女がぎょつとした顔で無言のままこっちを凝視してきた。

「まさか……月読ですか？」

少女が低い声で訊ねる。

「……誰だお前」

少女の暗い色をした茶色の瞳に、薫の警戒した顔が映る。

「うちがわからないん？ もしかして、記憶がおへんの？」

戸惑う薫を見て、少女がくすつと笑った。

そして突然、少女が抱きついてきた。

「え？ おい……」

「まさか……こんなところで逢えるなんて……」

彼女は突如として目をきらきら輝かせ始めた。

「いやだから。誰……」

薫が少女の体を突き放すと、少女はその場にへたり込んでむせび泣き始めた。

「うちのこと、忘れてはるなんてあんまりや……！」

彼女はこりもせず薫の胸に飛び込んできた。

薫は、心底こいつ、何かうざったいと思っていた。

### 第3章 刺客【近づくもの】（前書き）

伏線の張り方って難しい。伏線を暴くタイミングって難しい。もう思いながら書いた今回の話でした。

空白ほとんど空けなかったので読みづらいかもしれません。

### 第3章 刺客【近づくもの】

気をつけて。彼女達は平気で嘘をつく。己の手駒にするためならば、どんなことでもするのだから。笑顔で手を差し伸べられても、その手を簡単に取らないで。

薫は、春京にいる頃から女の子にはよく触られたりしてきたが、ここまで大胆に触ってきたのは海鶴くらいだった。だがこの女は海鶴以上の大胆さだ。こっちは初対面なのにいきなり抱き付いてきて、ため息をつこうと息を吸ったら、肺が凍り付くような寒気が入り込んだ。刺さるような冷たさに胸と、鼻が痛い。白い吐息が細々と漏れた。

吸気の一瞬、空気中に甘美な香りが鼻腔についた。不思議に思っ  
て周囲の匂いを嗅いだ。この香りの元は、何だ。

自分の周辺に甘い香りが滞っている……。そして、香りの元は抱きついてきた女からであると気付いた。彼女からどうしようもなく抗い難い甘い匂いが漂ってくるのだ。月下香の花の香りだろうか。自分の手が意思に反して、彼女の背中に伸びかかっているのを見て驚いた。

身体が、反射的に求めようとしている。頭がそれを拒絶する。何となく、危ない気がする。

「わかった、とにかく離れる」  
だから本能の警告により、この女を反射的に突き飛ばしていた。白い雪の上に、冷たく突き放した薫を女は切なそうな目で見上げてきた。自分で突き飛ばしたわけだが、ギクつとした。少し胸が痛む。

「そないに冷たくあしらわんでもええやろ……」  
女の目がまた潤みだし、薫は慌てた。後ろ頭をかきながら困った

ように笑う。

「ああ、悪い悪い。泣くな。女に泣かれるのは、苦手なんだ……。それで。名前は？」

それまで目を真赤にしていた彼女は、薫の言葉を聞いた途端に満面の笑みを浮かべた。

「うち、えい やなかつた、翡翠いいます。ホンマに覚えておへんのやなあ……。相変わらず、連れないお人やわ……」

翡翠と名乗った女は、薫の体に擦り寄って腕を絡ませ、クスッと笑った。薫は顔色一つ変えず、やんわりその腕を引き離した。

「悪いな、どうでもいい女のことは大抵記憶に残らないもんだから」  
薫が眉一つ動かさずに言うと、翡翠はびくつと体をふるわせた。

一瞬前のあたふたした彼と今の彼は違いすぎる。  
色んな言葉を飲み込んで、翡翠はやつと口を開いた。

「……またまた、冗談が過ぎますえ？ 月読はん」  
「そうだな、 今のは冗談だ」

薫は乾いた笑いを漏らした。半分本気みたいなものだったが、翡翠には何を言っても無駄な気がした。

翡翠は、唐突に薫の顔を正面から見上げ、射るようにその顔を見入った。

「そういえば、月読はん……、アレはどないしたんどす？」

翡翠は何か含みを持たせ、薫の耳元で低く囁いた。アレといわれればぴんとこない薫は、首を傾げてみせた。翡翠の問い詰めるような視線に対し、何も知らない無垢な瞳で答える。

「あれって、何のことだ？」

翡翠は口を引き結び、ふっと視線をはずした。そして、眉尻を下げ、悲しげな目で訴えてきた。

「アレのことを忘れたとでも言いはるの？ うちらにとって、大切なアレどすえ？ この里にずっと隠されて……」

「だから、アレって」

翡翠は小さく舌打ちし、短く叫んだ。

「もう、まどろっこしい！」

翡翠は薫の胸倉を掴み、真白な雪の上に押し倒した。冷つとしたものが背筋を伝って思わず体を震わせた。雪が衣の隙間から背中に入り込んだのだろう。そんな薫のことなど気にする風でもなく、翡翠は彼の懐をまさぐりはじめた。

いきなりなんだ、この女は。突然人を倒してきた拳句、体の隅々を探られて……。怒りたいのに、くすぐったくて怒れない。笑いを押し殺して薫は低く唸った。

「……おい、やめろって！」

翡翠の手首を掴み、体をよじった。

「ッ」

少し力と体重をかけたただけなのに、立場は簡単に逆転した。翡翠の身体は思った以上に細かった。黒髪が雪の上に散らばり、上気した頬が桜色に染まる。鳶色の瞳に光が差し込んで、時折青く輝く。

掴んだ手首が赤くなっている事に気付き、四肢をpushさえつけていた力を少し抜く。自分の体の下になった翡翠を見下ろすと、彼女は潤んだ目で薫を見上げていた。何かを期待するような目に、薫は少し引いた。

翡翠は、目を瞬かせ、クスツと笑ってから瞼を閉じた。

「ホンマに、アレを持ってへんのやな……。それに知らんときた。堪忍え。でもうちな、月読になら、何されてもええわ……」

「俺が見ず知らずの女に何かするとも思ってるのか……」

「……酷い人」

遠くの方から、自分の名を呼ぶ声が聞こえた。おそらく、葵上だろう。薫は振り返って片手を挙げた。

「ここだ！ 葵……ッ」

背後から、いきなり翡翠が口を両手でふさいできた。

「お願い、人を呼ぶのはやめとくれやす。うち、黙って出てきたさかい、怒られてしまう……」

「……う、どういっつもりだ」

翡翠は切なげに俯いて、下唇をかみ締めた。

「へえ……。うち、ホンマは誰にも会うてはあかんのどす……。人に会うことを、禁止されてて。屋形の外に出ることも禁じられてました。せやけど、耐えられへんかった。みんな、貴方の話ばかりして……。うちかて、月読に会いたい。久しぶりに生の声が聞きたい思たら、足が勝手に、外の方へ向いていました……。そしてはるばる、ここまできたんどす」

話すうちに、段々沈んでいき、目に涙を浮かべ始めた翡翠に、薫はまたか、と心の中で呟いた。またにしる何にしる、泣かれては何となく後ろめたい。

「貴方に会うことだけ考えて。せやから人に見付かると、後でぎょうさん怒られてしまう……。」

遂に翡翠はその場に手をついて、雪の上にぽたぽた涙をたらしはじめた。自分が泣かせたわけではないのに、薫は気まずくてしかたなかった。

「わかった、だから泣くな」

薫は、翡翠の前にしゃがみ込み、困惑しながら翡翠の頭に手を載せた。翡翠は堰を切ったように泣き始め、薫の胸になだれ込んできた。薫は黙って胸の中で泣きじやくる翡翠の背中をぽんぽん叩いた。「美鈴姉さんのことは、ホンマに残念やった。あの時うちは、屋形の中にいたさかい、その時の状況をよく知りまへん。せやけど、美鈴姉さんにはよう世話になりました……。あないにお優しいお方があんなことになってしもうて……。月読もさぞお辛かったですよ……。」

「そうだな、辛かったんだろうな……」

薫の言葉に、翡翠は目を見開いた。そして、呆れたような、驚いたような、なんともいえない表情で白い息を吐き出した。

「そんなあ、まるで人事みたいに」

そう、その通りだ。他人事みたいなのだ。美鈴のことも、月読も。

全部自分のことで、おそらく周りから見たら薫も『月読』も変わらない、同一人物だろうけど。自分にとって、月読は自分だけと薫とは違う存在にしか思えない。

月読にとつて、美鈴がどれくらい大事だったのかわからない。多分、凄く懐かしい気がするから、美鈴の存在は月読に大きな影響を与えていたのだろうとは思う。だけど、今の薫にとつて、ここにいらない美鈴より、つい先日まで一緒に過してきた海鶴のほうが遥かに現実的で、春京にいた時間の方が大切に思える。美鈴を海鶴に置き換えると、月読の辛さが良くわかる。だけど、その程度だ。

「多分、俺はアンタが思っているような月読じゃないと思う。だからそんなに期待するなよ」

立ち上がると、じゃあなと薫は片手を挙げ、翡翠に背を向けた。その背中に震える声が投げかけられた。

「待つて！　また、会える？　また……ここで、二人で会える？」

「……あんまり勝手に抜け出してばかりいると、そのうち怒られると思うけどな」

薫のその言葉に、翡翠は口元が緩むのを抑えられなかった。

「薫、誰と一緒にあった？」

戻るなり、葵上の険しい目に迎えられた。その迫力といったら、鬼気迫るものだった。その形相と、全身から滲み出る冷気に気圧されて、薫はその場に凍りついた。

「あ、あー……怪しいやつじゃないぞ？」

「ほーう……お前の知り合いだったのか？」

葵上の口調はどこまでも冷たいし、その鋭い視線に薫はうるたえた。

「いや、その　多分？」

「天月にきてまだ幾日も経っておらんお前が、知り合いだと？ それも 多分とな？」

葵上が薫の冷や汗の滲んだ顔を見上げた。見上げられているのに、見下ろされている思いなのは気のせいではないだろう。

「それで……？」

その言い方は、あまりにも冷たい。みぞおちの辺りが冷たくなってきた。薫は嘘が上手くつける人間ではない。それにくわえて、氷の上に追い込まれ思考を凍らせるような追求の前では嘘などつけるわけがなかった。

薫は素直に本当のことを話した。

「実は、翡翠という女に会って、色々話していた」

その名を出した瞬間、葵上は鳩が豆鉄砲を食らったような顔になった。

「翡翠……？ 翡翠は屋敷から滅多に出てこぬ。何故あのような場所に行ったのだ？」

不思議そうに呟く。

「それ、本人も言ってたな」

「ほう、それで？ 他に何か言っていたか？」

「ああ、アレがどうか言ってた……」

アレという言葉を出した瞬間、葵上から刺すような視線がとんできた。正直、怖い。

まずい。これ以上話しては、余計なことまでべらべらと話してしまいそうだ。葵上が眉間にしわを寄せ、口を開きかけた。

何となくこれ以上追求されなくなかった薫は、さりげなく違う話題に摩り替えた。

「そういえば、ほら。何とかの水ってやつのはわかったのか？」

「ああ、そのことが。いや、何分、何百年も前のことだな。記憶があやふやなのだ……。羽の水を飲んだものは皆独特な症状が出る。

例えば体臭が変わる。あの水はとても甘美な香りがしてな。それを飲むと体から甘い芳香が漂うようになるのだ。あんなもの口に含め

ばほとんどの生物が即死する……死体の血液から独特な芳香がするから、すぐ羽の水だとわかる」

死体からも漂う甘い香り。

それを毒と知りながら、死ぬとわかっていながら、思わず口に含んでみたいという衝動に駆られるのだという。

「てことは、その水を持つてるだけで香りがするんだな？」

「そうだな……まあ、あんな危ないものそんなに大量に持ち歩けるはずないのだ。余程意思が強くなければ、羽の水の誘惑に勝てない」

「……飲めば絶対に死ぬのか……」

葵上は黙って薫の顔を見つめた。いつも自信にあふれた黒い瞳が、今はゆらいでいた。

「それが断言できぬ……」

今出せる答えは、それだけだと彼女は小さく呟いた。

「なあ、この話の流れとは全然関係ないことなんだが、聞いてもいいか？」

「何だ」

「人の目の色って……そんなに簡単に変わるものなのか？ 何百年も生きてる葵上ならなんかわかるだろ？」

葵上は腕を組み、唸り声を上げた。

「ないこともない……現に目の前にいるんだから」

そう言つて、じつと薫の顔を見上げた。なんだか良くわからない薫はしどろもどろだった。

「何だよその目は」

生暖かい視線を感じ、何となく嫌だった。馬鹿にされているんじゃないかと思う。

「いや、いいんだ。よしよし、わからないんじゃない。ういやつじや。そのままお前の瞳が碧色のままでいてくれることを私は祈っているよ。全部破壊されたんじゃないよこっちも困るんだよ。とにかく、お前に

はこの前渡した桐の箱の中身さえ守っていらえば十分だ」

悪戯っぽく笑い、葵上は片目をつぶってみせた。何か腑に落ちないが、薫は複雑そうな顔で頷いた。そういえばあの箱……ずっと月の屋形に置きっぱなしだったことは今ここで言わないでおこうと心の中で呟いた。

「しかし、何故そんなことを聞くんじゃ？」

不思議そうに首をかしげる彼女に、薫は説明した。

「目に光が入ると時々青く光る人を見たから」

葵上は目を細め、ほーうと呟いた。この話題が琴線に触れることはないだろうと思っただが、思い違いだったようだ。

「お前を野放しにしておく、色んなことがわかるものだな」

葵上は皮肉そうに口の端を上げた。

葵上は、もう勝手に出歩いていいぞと言い残して、踵を返した。

あれだけ一人になるなといわれていただけに、いざ簡単に一人で出歩く許可が出ると、何だか拍子抜けしてしまった。

### 第3章 刺客【近づくもの】（後書き）

昨日、一昨日、その前にも拍手くださった方々、ありがとうございます！こんな小説でも読んでくれる方がいると思うだけで、闇は凄く嬉しかったです。拍手ボタンをぼちつと押して下さるだけで、こんなに嬉しいものなんです！読んでくださる方が一人でも存在する限り、闇友菜は頑張ろうと思います！

が……本当に勝手ながら、しばらく休載することになるかもしれません。理由は、かなり私的なことですorz

また復活すると思うんですが、それまでお待ちを！

え、別に待ってねーよって？

（笑）

### 第3章 刺客【和み】（前書き）

休載を掲げていたわけですが、用事がとりあえず一個片付いたので更新できる分だけ更新したいと思います。

今回、割とほのぼの和やかな流れ。（あれ、いつもとあんまり変わらないじゃない）

### 第3章 刺客【和み】

葵上から外出しても良いと言われたはいいが、その笑顔と言葉に裏がありそうで怖かった。一人で歩いてもいいと言われても、どこに何があるのかも、何をすればいいのかも全くわからない。そういえば自分がここに来たのは何のためなのか、いまいちよくわからない薫だった。

戦えといわれて、戦えるだろうか。少なくとも「薫」には、今まで戦の経験はない。

平和なところで暮らしてきたんだと今更ながら思う。春京に何か攻めてきたら、あそこはすぐ滅びてしまうのではないだろうか。何が攻めてきたことなどないからなんととも言えないが。

天月は、綺麗なところだ。真白な雪景色。輝く銀色の世界。だが、空気が張り詰めていて、自然と背筋が伸びる。緊張感のある空間。皆、何となくぴりぴりしている。仲間が死んだから、当然といえば当然か。薫は白い息を吐いて、縁側から空を見上げた。今日は、白い雲が太陽を覆い隠している。雲の隙間から光が差し込み、天から降り注ぐ光の梯子が美しい。

殺伐としているのは外だけで、屋形の中は至極平和なようだ。静まり返った月の屋形は、いつものような不気味さは感じられない。神聖な空間にさえ感じられる。……いつもあの不気味な歴代巫女の声が聞こえるからここは敬遠されているんだろうなと思う。

神狩り

静けさを突然打ち破ったのは、どこからか聞こえる子どもたちの笑い声だった。月読の歴代巫女達の、気味悪い笑い声ではない。純粹な子どもたちの、無邪気な笑い声だ。この屋形のどこかにいるらしい。時々聞こえてはいたのだが、一度も子どもたちの姿は見たことがなかった。

神様にも子ども時代があるんだと思うと、何となく和む。まあ自分だって、子ども時代をすごしてきたはずだから、当たり前といえ当たり前前なのかもしれないが。

縁側に座って冬の光を浴びていると、背後からいきなり誰かに抱きつかれた。驚いて振り向こうとしたら、今度は小さな暖かい手で両目を隠された。

子どもだ……。手の大きさと暖かさで薫は推測した。

後ろで、くすくすと笑いあう声が聞こえる。絶妙な声の重なり具合だった。澄んだ高音だが、そこに微妙な高低の差がある。

「だーれだ？」

幼い声が楽しそうに聞いてきた。

全くわからない。天月に来てから子どもと一度も面識がないのだ。考えても出てこなかったので、薫は首を横に振った。

何故かその行為が残酷な気がした。

「薫兄さん、覚えてないんだ……」

声が沈んだ。高い声は女の子なのか、男の子なのか判別がつかない。

「ないんだ」

更に幼い声が、追い討ちをかけて繰り返してきた。

「私が誰なのか本当にわからないの？」

少女の声が更に沈む。申し訳なくなつて、薫は頭を下げた。

「ごめんな」

空気が重くなる。薫は手に汗を握っていた。子どもといっても多分、傷つけていることには変わらない。

少女は呆れたようにため息をつき、両手を腰にあてて、薫を見下

るした。

「あーあ、変わってないね。そういうところ。すぐ謝って。別にあなたに悪いわけでもないじゃない。眉間にシワ、よってるわよ」「真っ直ぐな茶色の髪を掻き揚げて、少女は、でもさ、と続けた。

「勝手にいなくなつて、勝手に大きくなつて……ずるいね」

両手が離されてゆっくり目を開けると、腕組みをした少女と、少女と同じ茶色の髪の子が立っていた。多分血縁者なのだろう。よく似ている。少女が真っ直ぐ薫を見上げる。意思が強くて利発そうな漆黒の切れ長の瞳。対照的なのは、彼女の後ろに隠れる子。俯いてはちらちとこつちを見てくる。ふちいっぱいの黒目が小動物を彷彿させる。とろんとした目をしていて、どこか頼りなさそうだ。

「仕方ないから教えてあげる。いい、一度しか言わないから、ちゃんと脳裏に叩き込むのよ」

多分、まだ十歳前後だと思われる少女が、脳裏に叩き込むとかよくそんな言葉知っているなと変なところで薫は関心した。

「私は黎明。弟は浅葱。覚えた？」

え。今彼女はなんと言った。彼女の背後に隠れた子は、男の子……だったのか。衝撃を受けつつ、薫は頷いた。

「覚えた……と思う」

薫の言葉を聞いているのかいないのか、黎明は一人話し続ける。

「年は今年で十二になるわ。弟は十よ。薫あにさんと三年くらい会ってないだけだったのよ。なのに、いきなり大きくなって帰ってくるのはずるいと思うわ」

「いや、ずるいって言われても……」

「だって考えてもみて。私と薫あにさんは一つしか年が離れていなかったの。背だつてね、私の方がずっと大きかったんだから。それが何？ どうしてこんなに大きくなって帰ってくるのよ。成長しすぎよ！ まあ、悪くないけど。私につりあう男になって帰ってきて

くれたからね」

いつ息継ぎをしているのか首を傾げなくなるくらい、黎明は一気に言った。

それは悪いことをしたような、結果的には良かったような。薫は、とりあえず口を開けば次々と言葉が飛び出す黎明に口を挟める状態ではなかった。

黎明の後ろに隠れながら、浅葱が小さい声で訊ねてきた。姉を嵐のようだとたとえるのなら、弟はそよ風のようだった。なんにせよ、嵐を止めてくれたことを感謝したい。

「薫あにさん、今までどこに行ってたの？ どうして急に帰ってきたの？」

「外の世界に出てたんだ。春京っていう、春が綺麗なところで……」

外の世界っていうのも変な感じがする。つい先日までその世界しか知らなかった自分が、そこを『外の世界』だって。自分で言ってる、苦笑いした。

「私が先に話すんだから、浅葱は後でゆっくり話していいわよ」  
薫の言葉をさえぎって、黎明が後ろの弟を睨みつけた。

姉にきつい口調で言われ、黙って俯く浅葱。おそろしく内気な子だと薫は思った。そういえば、春京に来たばかりの頃はこんな感じだった。年も同じくらいだ。昔の自分と、あの頃と重なって、思わず微笑を浮かべた。

「こつちにおいで」

薫が手招きすると、今まで毛を逆立てた仔猫のように小さくんでいた浅葱がひょこひょこ近寄ってきた。その動きはなんとも言えず愛らしい。浅葱はぎこちなく薫の横に腰掛けて、くりっとした大

きな目で薫を見上げた。

「……薫あにさん、また一緒に遊んでくれるの？」

小首をかしげ、薫のよい答えを期待し瞳を輝かせる浅葱。

……何、この可愛い生き物。薫は頭をくしゃくしゃに撫でたい衝動に駆られた。弟なんていないが、いたら凄く可愛がってあげたいと思う。

「三年前もお前達とここで遊んだのか？」

「そうよ。私と浅葱と薫あにさん。それからね、おねえも一緒だったわ。いつも皆で内緒で集まって遊んだの。おじちゃんや葵上様に見付かると、大目玉食らうからって」

黎明は薫の背中に抱きつき、クスクス笑った。浅葱も懐かしむように目を細め、姉の言葉に何度も頷いていた。

「おねえってというのは美鈴のことか？」

二人の子どもは、薫の言葉に同時に首を横に振った。

「美鈴様って薫あにさんの巫女さまでしょ？ 美鈴様はいつも遠くから生暖かい目で見てるだけだったけど。時々一緒にかくれんぼしたりしてたわよ。いつも私達に優しく、お菓子くれたりしたし、私が薫あにさんとべたべたしていると雰囲気とがって怖かった。子ども相手に嫉妬なんて見苦しいわよね？」

……美鈴という人物がますますわからなくなった。

雲が風に流され、隠れていた太陽が姿を現した。いつの間にか真上に来ていたようだ。そろそろ昼になるのか。

いつもは日が一番上にくるころに誰かが呼びにきてくれているの。今日はまだ誰も来てくれない。呼びに来るまで待っているものどうかと思うが、自分から行くのも、何だか食べることに執着しているような気がするし。……いや、腹は減っているんだ。食べることに執着することが悪いとも思わないが、何か……嫌だ。

延々と一人で話し続ける黎明をよそに薫はそんなことを考えていた。

そんな薫の思考をぶった切ったのは、さくさく雪を踏む音だった。真つ直ぐにこつちに向かつてくる。

「ああ、いなくなつたと思つたら、こんなところで……。勝手に入り込んだらあかんと何べん言つたらわかるんや？」

「お母さん！」

と子ども達が声をそろえて叫んだのと、

「萌葱……？」

と薫が呟いたのは同時だった。

萌葱はぺこつと頭を下げ、お昼の仕度が整いました、と告げた。

どうやら、今日から萌葱が薫を呼びに来てくれるようになったらしい。

「お世話かけました。薫様、お疲れでしょうに。この子らが、お休みのところをお邪魔して」

萌葱は改まつて頭を深々と下げてきた。黎明と浅葱は気まずそうに薫の前に立ち、お互いに顔を見合わせて苦笑いしている。

そんなに何回も忍び込んでいるのか、子どもたち。誰も近寄らないはずじゃなかったのかとちよつと虎彦の言動との矛盾を薫は感じていた。

萌葱が子どもたちに頭を下げるように促すと、子どもたちはそろつて渋い顔をした。

「あんた達もちよつとは反省の色みせん」と

「だって、別に休んでなんてなかったわよ……。ぼーっと空眺めてたからちよつと遊……」

黎明が小さく呟いたのを、萌葱は聞き逃さなかった。

「黎明」

萌葱は静かに娘の名前を呼んだ。怒鳴られたわけでもないのに、黎明は亀のように首を縮めた。浅葱も黎明の後ろで身を縮め、伺うように母親を見上げた。

「はい」

「どうしてここがわかったのかと言いたそうな顔やな。うちがあん

たらの行動を知らなくても思ってたんか？ あんたらの行動なんて、お見通しや。うちに黙ってここに忍び込んで遊んでたことなんて、とうの昔にわかつつたことや。毎日のように同じ時間に同じ場所に来てればな、誰にだって行動の予測くらいつくもんや。お母ちゃんを舐めたらあかんで」

二人の子ども達は勢いよく首を縦に振った。

「それで、言い訳はしてもええんか？」

萌葱はしゃがみこんで、黎明と視線をあわせ、真っ直ぐ見つめた。

黎明は少しうろたえて、首を小さく振った。

「いいえ」

「そつやな、悪いことは認めんと。アンタはすぐ言い訳する。悪い癖や。自分の非は認めんとあかんのや」

口調は決して厳しくない。目をそらさず、萌葱は娘に優しく語る。黎明も母親を真っ直ぐ見返した。

そこまではよかった。何か微笑ましい光景だった。

「そやかて、お母ちゃんかて勝手にここに来てるやないの。お母ちゃんはええのに、何でうちらはあかんの？ そんな不公平や。誰かお母ちゃんをきつく叱る人がおるんならうちかて大人しくしてるわ。大体、お母ちゃんは人目につかんほうがええって葵上かていつも言つて……」

黎明は口を開いた状態のまま、しまったという顔をした。どうやら彼女の言葉が萌葱の琴線に触れるものだったらしい。黎明は額に汗を滲ませ、黙ってじっと見つめてくる母親から視線をそらした。浅葱はどうしたらいいのかわからずにおろおろと、手を出したり引っ込めたりし始める。

突然、萌葱が腹を抱えて笑い出した。

「お、お母さん……？ 怒ってへんの？」

黎明は明らかに狼狽し、しどろもどろに萌葱に声をかけた。薫も娘の言葉を笑い飛ばした萌葱に驚いて、とにかく言葉が出てこなかった。といつても、さつきから何も発言していないわけだが。

「そんなことくらいで怒るわけないでしょう。子どもの屁理屈に、子どもの戯言。ホンマにまだ子どもやなあ、黎明。大人びた振りしても、薫様には伝わらんと思っけどねえ」

それまで大人しく黎明の影に隠れていた浅葱が、くすくすと忍び笑いをもらした。

「あはは、姉様、本当のこと言われたね」

「うるさいわね、あとで覚えてなさいよ……浅葱」

黎明は鋭く弟を睨みつけた。

「仲いいな……」

薫には、彼らのやり取りがとても微笑ましくて、顔がだんだん熱くなってきた。頬に手を当てると、自分が思っている以上の熱さに驚く。今絶対、知り合いに顔を見られたくない。浅羽とか海鶴がここにいたら絶対からかってくるところだろう。

それだけ、眩しかった。とても暖かった。

家族か。……何か今無償に海鶴をぎゅっと強く抱きしめたくなった。海鶴の体温を感じたくなった。今、海鶴はどこにいるのだろう。何をしているんだろう。駄目だ、一回海鶴のことを考え出すと、彼女のことと頭がいっぱいになってしまう。何かを思い返すたび、海鶴の影がよぎる。

それにしても。

子どもが何度もここに忍び込んでいたというのなら、一度や二度くらい萌葱に会っていてもおかしくないはずだ。それが今まで一度も会ったことがないなんて。鈍い薫でもわかるくらいの不自然さだった。

萌葱が突然苦笑いを浮かべた。

何だ、今思ったことがまさか筒抜けになったなんてことはないよ

な。薫は何故か焦った。

「そんなに見つめられては穴が開いてしまいます。綺麗な碧色の目で見られたら、恥ずかしくなってしまいますよ」

無意識的に萌葱の顔を凝視していたらしい。別に思考を読まれたわけではなかったことに妙な安心感を覚える。萌葱は悪戯っぽい笑いを浮かべ、薫の顔を覗き込んできた。

「うちのことが気になってるんですか？ 何で今まで会ったことがないのか……とか？」

「え、ああ……まあ」

心中を当てられて、しどろもどろに答えた薫を見て、クスツと黎明が笑う。

「わかりやすい方ですねえ。さっき、黎明も言っていました。うちは外をふらついたらあかんことになってるんです」

「どうしてだ？」

「……うちは、この里の人たちと違って神域で育った人やないんです。うちだけ異質なんです」

意外な萌葱の答えに、薫は何と言ったらいいのかわからず、その場で固まってしまった。

### 第3章 刺客【和み】（後書き）

えっと。この流れはただ和やかな様子を書きたかったわけではなく一応ある場面との対比のつもりで書きました。が、その場面はおそらくもっと後のほうになってしまうと思うので、何となく頭の片隅にとどめていただけたら嬉しいなーなんて思いました。

O r z

第3章 刺客【昔話】（前書き）

萌葱さんの一人語りが延々と続きます……。。

神狩り

### 第3章 刺客【昔話】

……うちが覚えていること。

仕えていた屋敷で、ある日女主人様に話しかけられた。恐怖と、  
驚愕。あるはずの声が出ない。

『もっと良い仕事があるのじゃ。今よりも簡単で、待遇も良くする。  
どうじゃ、悪い話ではなかるう？』

美しい女主人の言うことには、とても逆らえなかった。うちは屋  
形の離れで住み込みしながら、女主人のいう『仕事』をすることに  
なった。

あの時から、うちの世界は色を失った。そして時間は止まる。

暗い部屋に充満する甘い香り。そして水の音……。

『お姉ちゃん……』

死んだ目……。うちの弟。伸ばした手を払いのけると水になって  
消えて、溶けていった。

時折青く輝く無数の瞳。鳶色の、目。

拒むこともできず、震えることしかできなかった。そんな絶望の  
中、微かに混じる、睡蓮の香り。

アレを飲み込むのが、何度怖いと思ったことだろう……。

### 神狩り

黙ったままの薫と萌葱に飽きてしまったのか、子ども二人は雪の  
中に飛び込んでいった。手を真赤にさせて、それでも子犬みたいに  
雪だらけになって遊ぶ子どもたちが、少し羨ましいと薫は思う。ふ  
わふわした雲が空から落ちてきたみたいに真っ白い庭で、濡れた衣

を特に気にするわけでもなく、雪まみれになる子どもたち。

萌葱の方を横目で見ると、彼女はそんな光景を微笑みながら眺めていた。視線に気付いたのか、薫と視線がぶつかり、お互い何となく小さく笑う。

「十何年前に、気付いたらいつの間にかここに迷い込んでしまった。せやからうちはあまり薫様の記憶がありませんけども、薫様はよくうちの子供たちとよう遊んどくれましたんや」

萌葱は遠くを見つめ、懐かしむように目を細めてやんわり笑った。薫の何か言いたそうな顔を萌葱はじつと見つめてきた。あまりに真っ直ぐ見つめてくるものだから、胸が少し高鳴った。

「葵上が部外者は薫様に近づけてはいけないとお決めになっただけだからね。うちは薫さまのことは風の噂で聞く程度。遠い存在でした。子どもは……無邪気やし、勝手に薫様のところに行っちゃったさかい、大目に見てもらたんとは違えますか？ 探しに行くのはうちのうて、いつも鷹峰さんの方でしたけどね。まあ、うちには子どもたちがどこに居るかも、薫様がどこに居るかも、離れていてもわかるんですけど。凄いでしょ？」

萌葱はくすつと笑うと、薫から視線を外した。変な緊張感から開放されて、薫はほつと胸をなでおろした。萌葱の目は、心のうちを見透かすようで、自分の中に潜む影の部分まで知られそうで、正直怖い。そういえば、自分の思い描く女の子は澄んだ目をしているのだった。海鷗のことを思い出しながら、薫は少し頬を緩ませた。

彼女は子どもたちと、それから屋形の外を眺めて、白い息を吐き出した。

「なんや、色々思い出してきてしもたな。懐かしいわ」

萌葱の温かい目に気がついたのか、浅葱が駆け寄ってきて、真赤にかじかんだ手で萌葱の袖を掴んだ。

「母さん、手冷たいよ」

甘えるような声で訴える浅葱の手を、萌葱はそつと包み込んで目を少し見開いた。

「本当だねえ。こんなに真赤な手して。今暖めてあげるからね」

浅葱は手をさすったり、暖かくて湿った白い息をかけてくれる母親をじつと見上げた。

「母さんの手はどうしていつも暖かいの？」

「どうしてやるなあ。きつと、ここに来てから身も心も温まってるから……やるなあ」

うちの手は、死人のように冷たい手でした。

最初は皆さん、うちがここに来た時は驚いた顔されてました。全身ずぶ濡れで、あの鏡池の上に浮かんでいたらしいんです。

第一発見者ですか、もちろん鷹峰さんですよ。運命やる。

死体が浮かんでるんかと思ったと、今でも鷹峰さんと葵上様とあの時のことを笑いながら話したりしますよ。うちは、ぼろきれを身にまとつて、全身傷だらけの状態でそこに浮かんでいたようです。

その時のことは、おぼろげにしか覚えてへんのやけど、とにかく必死だったんやと思います。何でやるう、何かに追いかけてらいて……それに捕まればうちは確実に生きてここにはいられなかつたと思うんです。思い出せへんけど、思い出したいとも思わへん。

黒い影を見るたびに生きた心地が今でもせえへん。あれは死神みたいにしつこくうちを狙ってきた。

いまでも時々、あの影に追いかけられているような気がして。一人になると、未だに怖い。暗闇が地獄のそこまでも追いかけてくるような……。

あのころただの小娘やったうちが、そんなものから逃げる術なん

てなかったのにね。不思議ですねえ。何で助かったんやろうなあ。

あら、うちの顔に何かついとる？ 黎明。なんでもないんやったら、そんなに見つめんといてや。なんや、アンタは鷹峰さん譲りの目やさかい、見つめられると気恥ずかしいわ。

「ごめんなさい、話がそれましたね。

……意識がはつきりして、まず最初に目に入ってきたのは、薄暗い部屋の中を照らす灯りでした。その次に目に入ってきたのが、半分白目を剥いた状態で、うちの側で胡坐をかいていた鷹峰さん。今考えると面白いつたらないですね。あの時は、恐怖で一瞬固まってから悲鳴を挙げましたけど。だってね、髭も伸び放題、誰このむさくるしい人は、襲われると思いましたが。

その声を聞きつけてやってきたのが、龍邦さま。

「大丈夫か！？ まさか襲われたか！？ 病人相手になんて鬼畜なことをするんだ鷹峰！」

って、半分白目の鷹峰さんの胸倉を掴んで、龍邦さまが。鷹峰さんは何が何だかわからないまま、龍邦さまに怒鳴られていてうちは何だか可哀想になつてきました。

そこ、笑うところとちゃうわ、黎明。あの時のうちは、生死を彷徨った後で心が不安定やったんやで。ま、うちもそのとき、思わずクスツと笑ってしまいましたけどね。

あら、薫様は知りませんでしたか。龍邦さまはお医者様ですよ。龍邦さまと交代で、鷹峰さんがうちを見てくれたんです。半分白目でしたけどね。

うちはそのとき初めて、自分が暖かい床で、綺麗な衣を着て、横になってることを知りました。あの時は、どこぞのお屋敷に来てしもたんやろって、焦りました。うち無一文やったし。

誰が着替えさせたか、やて？ どうしてそんなあほなこときくん黎明。そういうのは、察せなあかんよ。その場を察することができたら、一人前の大人や。それができんからあんたはまだまだ……ああ失礼しました。話がそれで。

鷹峰さんが『具合が良くなるまで、ここにいてもいいという許しが出た』と、床に伏せるうちに教えてくれたのは、うちが次に目を覚ました時でした。

それからうちが元気になるまで、ずっと鷹峰さんの屋形でお世話になってました。苦いお薬は飲まされるし、あの人は何というかね気が利かん。うちが着替えたくても、あの人がずっとおるから、なかなか着替えも好きにできませんでしたよ。  
今なら、うん。

あれは、あの人なりにうちのことをとても心配してくれていたから、ずっと側にいてくれたんやと思います。  
恥ずかしいことに、うわ言のように、怖い、怖いつて咳いてたみたいです。

『行かないで……。側に、いて……。』  
って、知らんうちにあの人の衣をぎゅーっと握り締めて放さなかつたみたい。

なあ、そのときの困ったような鷹峰さんの顔が目に浮かぶやろ。

精もついてきて、ようやっと屋形の外に出られるようになったころ、うちは初めて葵上様にお目どおりが叶いました。葵上様の美しさには心を奪われましたよ。

流れるような藍色の髪、均整の取れた肉体。こんなに完璧な人が存在するのかと、それともこれは人形なのかと何度も目を瞬かせました。そしてあの意思の強そうな黒い瞳に射すくめられて、うちは声が出せませんでした。

そんな葵上様の前ですくみあがっているうちを見て、葵上様は優

しく微笑んでくれました。まさに絶世の美女やな。

そこで初めて、ここがどこなのかを聞きました。神域 天月であるよね。

予想もしていなかった言葉に、うちは打ちのめされました。正直、これやったら助けてもらうよりも、死んだほうがましやとも。

……本当に死にたいと思った。

ああ……かんにんな。そんな泣きそうな顔せんというて、浅葱。もうそんなこと今は思っへんよ。大丈夫、今お母ちゃんは幸せやからな。あんたらを置いて、死んだりせえへんよ。

本当に浅葱は、まだまだ細い体やなあ。ふふ、それに柔らかい。

なんやの、そんな恥ずかしがることないやない。まだまだアソタは可愛い、こつちにおいで、もつと抱きしめさせて。離れていっってしまったら、お母さん、泣くよ？

それでもええの？

……命って、そんなに簡単に捨てたら、アカンもんですねえ。自分の命ならば、やすやすと捨てられると思っていました。うちが死んだかて、ここでは誰一人悲しんだりせえへん。そう考えたら、死ぬことが怖いとか、思われへんかった。でも……そう簡単に、鷹峰も屋形の間人も、うちを殺そうとはしてくれませんでした。

ずっと、待ってたのに。

自分から死にたいと思っていたうちを愚かだと思ひますか。そうですよね、普通はそう思ひますよね。今になつて考へてみると、本当にあの時は鷹峰さんを困らせて、苦しめていたんじゃないかと思ひます。

薫様には、わからへんかもしれませぬ。ここは神域ですよ。

普通の人間がそうやすやすと足を踏み入れられる場所ではありません。うちも、ここに来るまで信じてましたから。人の噂を。

残虐で、残忍。血も涙もない。人のことは虫けら程度にしか思わない。人の魂を喰らって生きている存在だって。

人の死なんて、痛くも痒くもない。だから魂を喰らって、己の力の源としている。

不死の存在。それゆえ、感情が麻痺している。神と会ったら死よりも恐ろしいことが待っている、死んだほうがましだと思ってしまうようなことをされると。

生きたまま、精神的にも肉体的にも追い詰められる。肉体なんてほとんど残らん、体の一つ一つをもぎ取られ、目は抉られて、最後に残るものは、頭くらい。

神は探しているのです。自分の最高の体を。そして、全部もっていかれたら、最後に魂を食われる。

これが私が聞いていた神の姿です。

なあ、嘘っぱちもええとこやろ？

神は皆、そんな残忍なことせえへん。うちのことを助けてくれたし、居場所まで与えてくれた。

でも、恥ずかしいことに、そのころ小娘やったうちは信じてました。とんでもない化け物の巢窟に来てしまったと、これならば、鬼の住処にたどり着いたほうがましだとさえ思いました。

いくら鷹峰さんが、不器用なりにうちに気を使ってくれたとしても、あのぶっきらぼうさがうちには恐ろしい男にしか思えなかった。龍邦さまがうちのために診察に訪れてくれていても、うちの身の回りの世話をしてくれた侍女が、いくら気さくに話しかけてくれたとしても。それが全部、うちを手懐けてうちの魂を吸い取るための策略かもしれへん、まやかしやと思えてきた。どうしてあんなに頑なやったのか……。

葵上様は、絶望感に打ちひしがれ、塵と化していたうちに優しく話しかけてくれました。

『我々はわけあってそなたを追い出すことはできぬ。……そなた、名は？』

わけあってってというのがちょっと引つかかったわけですよ。でもあの張り詰めた空気の中でそんなことさすがのうちでもいえなかつたんです。

あ、薫さまなら、空気も読まず聞いてしまいそうですよね。あはは。

うちは自分の名前を、平凡な名前やのに震えながら答えました。

大した名前でもあらへんのにね。よっぽど気が動転していたんですね。それくらい、緊張した場でした。

『萌葱、一つ約束してくれ。これを守れなければ、尊き意思に逆らつてまでお前にはここから出て行ってもらわなければならない』

やっと頷くうちに、葵上は続けて言いました。

『……白銀の髪の子どもには近寄るな。そして屋形の一番奥に足を踏み入れてはならん。でなければ……私に殺されても文句は言えぬからな』

うちは、その理由を聞くことができませんでした。そんなこと聞けるような雰囲気やなかったからなあ。

そんなことよりも、これから先もここで暮らさなあかんと思うと、胸のうちは空っぽなのに、そこに絶望感が湧いてきました。暗くてじわじわとしたものがはいあがってきて……。

かといって、そのときのうちは死ぬ気にもなれんかった。生きてることは辛いけども、死ぬことも、怖かった。自ら命を絶つなんて……。

あの時。出て行けという言葉をごれほど待ったことでしょう。

ここに居てもいいという言葉を待っていたわけではなかったのに。

元気になったうちは、鷹峰さんに連れられて初めて天月の地を自分の足で踏みしめました。その時の皆さんのうちを見る目といったら。まるで珍獣、腫れ物でも触るかのような扱い。ここでは、うちは完璧異質なもの。得体の知れぬ、神さま方にとっては脅威の存在なのかもしれんと思いました。

え、うちの気持がようわかりますか。そうですか、薫さまも今までいらしたところで、最初遠巻きに見られていたんですね。白銀の髪に碧眼の双眸は好奇の的でしたか。……寂しかったでしょう。うちも、ようわかります。

うちは知らなかった。月読が巫女に力をそがれてしまったことを。巫女はうちら人にとっては、神々からうちらを守ってくださいさる、尊い方々でしたからね。そんな恐怖の対象なんかじゃなかった。せやから、不思議でしたね最初は。巫女を恐れて、それでも心のどこかでは巫女に惹かれていた人たちが。

外に出るたび、うちに向けられる好奇の目が嫌でたまりませんでした。でも、出て行くといっても、あの黒い影たちが今もしつこく自分を探しわっているかもしれないと思うと、怖くて出て行くこともできませんでした。

## 神狩り

自分から出て行くこともできず、出て行けといわれることを待つ日々が続きました。あの人は、なかなかうちに出て行け、と言わなかった。

『鷹峰、お前あの子をどうする気だ。死ぬまでここで面倒見るつもりなのか。あの子は、人の子だぞ？ お前だって、色々と世間体があるんじゃないか？ もしなんなら、出て行ってもらうことも考えたらどうだ。人里に届けるなり何なり、お前ならできるだろう』

ある日うちは偶然、龍邦さまと鷹峰さんの会話を聞いてしまいました。

うちは心の底で、何かを恐れていた。多分、回復したうちはもう見限られることだろうと覚悟しました。それが、うちが望んだことであり、鷹峰さんもやっと思形の娘から開放されることになるから……そう思っていました。

『そうだな』

うちは、心に鉛を乗せられたみたい、思考が一気に暗くなりました。

やっぱり、うちは邪魔なんや、ここに居たらあかんかったんや。何でこんなところに来てしもたんやろう。こんなところに、来たくなかった。

これやったら、一人だったほうがまだマシやった。

うちは……これからまた一人になるには、コノ里の人と関わりすぎた、人と関わりすぎた。人の情の暖かさを 知りすぎた。

『……そこまで考えて拾ったわけじゃないが……ここに居たいというのなら、ずっとここに置いてやるし、出て行きたいというのなら出て行けばいい。それは俺が決めることじゃない。だから俺は、出て行けとはいわない。あの子の逃げ道を、奪ったりしない』

と、鷹峰さんの言葉が続いた時、自分でも意識せんうちに、ほっと胸をなでおろしていました。

そのとき、初めてこんなに安心して自分の身に気付いた。出て行

つてもらおうという言葉が出たら……うちはもしかして、泣いていたかもしれない。

鷹峰の言葉は、そのときのうちにとって、重過ぎない言葉でした。何故かいきなりこんな未知の土地に来て、しかもそれが今まで恐れてきたものの里で、先のことなど真つ暗だった娘に、少なくとも選ぶ余地を与えてくれたのですから。

鷹峰やなかったら、死んでしまっていたかもしれないな。うちは、孤独やなかったから。

神も人も同じやった。大切なもんは一緒。そうやる？

それから、鷹峰さんのところに何となく居ついて、そのうちあんたらが生まれたんですよ。

何となく、の間にあったことが一番大事なんじゃないかって？ 生意気言っくんじゃありません。ほら、薫さまだつて困つて顔が真赤になってるでしょう。子どもの癖に、ませたこと考えてはいけませんよ。

あんた達、勝手に忍び込んで薫さまと遊ぶようになってから、どれだけうちの寿命が縮まったか……わかつてへんな。

薫さまに近づけるようになったんはほんまに最近。うちが以前に比べて外を自由に歩けるようになったのも最近です。あなたたちには本当に感謝してるんよ、黎明、浅葱。

## 神狩り

あんたらが居る限り、うちは命を懸けてもあんたらを守る。せやから、簡単に命を投げ出したらあかんよ。お母さんが命がけで生んだんやからな。

神狩り

……うちの目、そんなに不思議ですか？  
薫様……。

第3章 刺客【昔話】（後書き）

次はもう少し、話が進展するといいな。なるべく早い更新をめざします。><

神狩り

# 広告募集中

小説関連広告に最適です。  
出版社や印刷会社はもちろん、  
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくは PDF 小説ネット広告募集をご覧ください。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6782d/>

---

神狩り

2009年5月17日22時15分発行